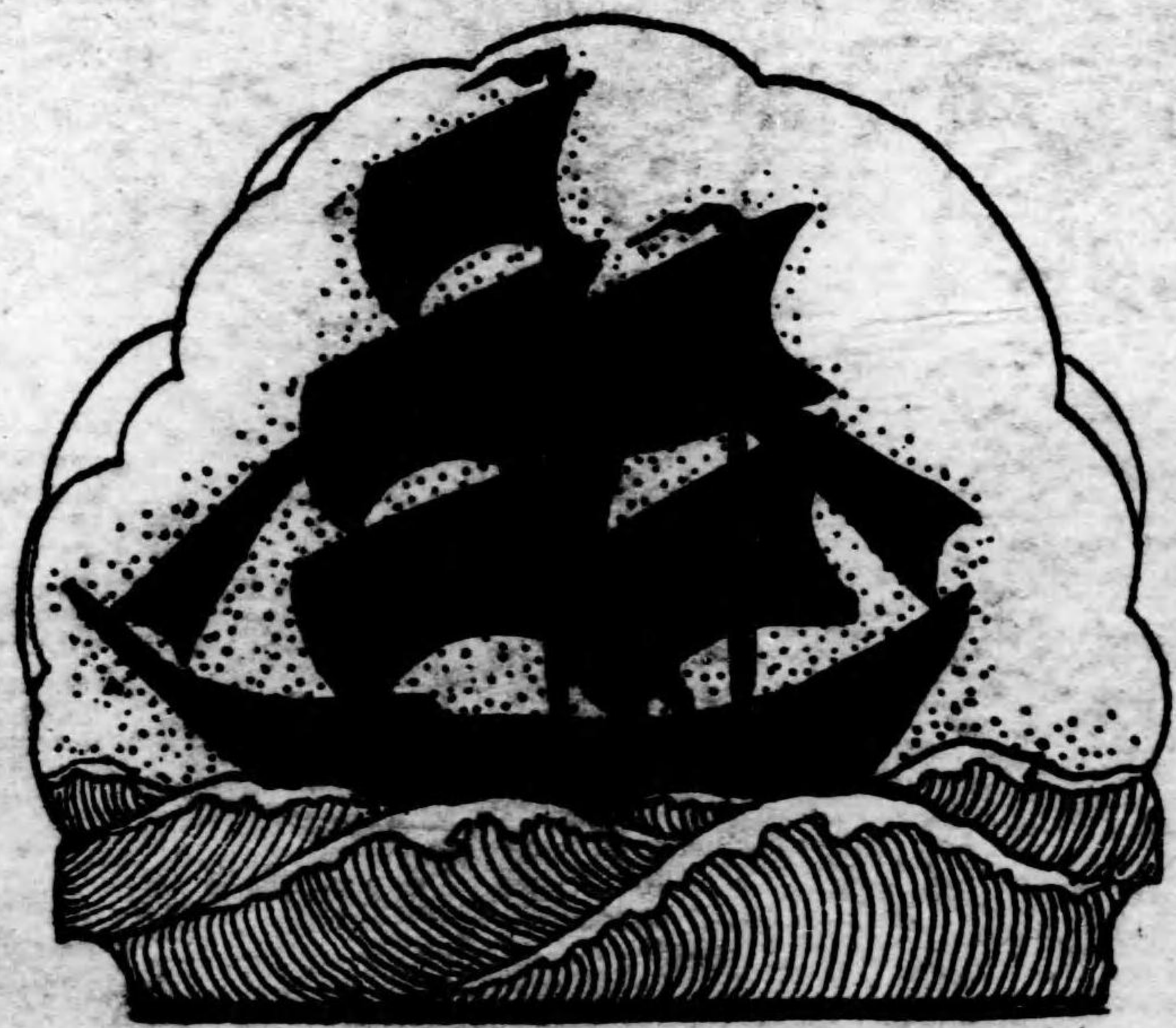


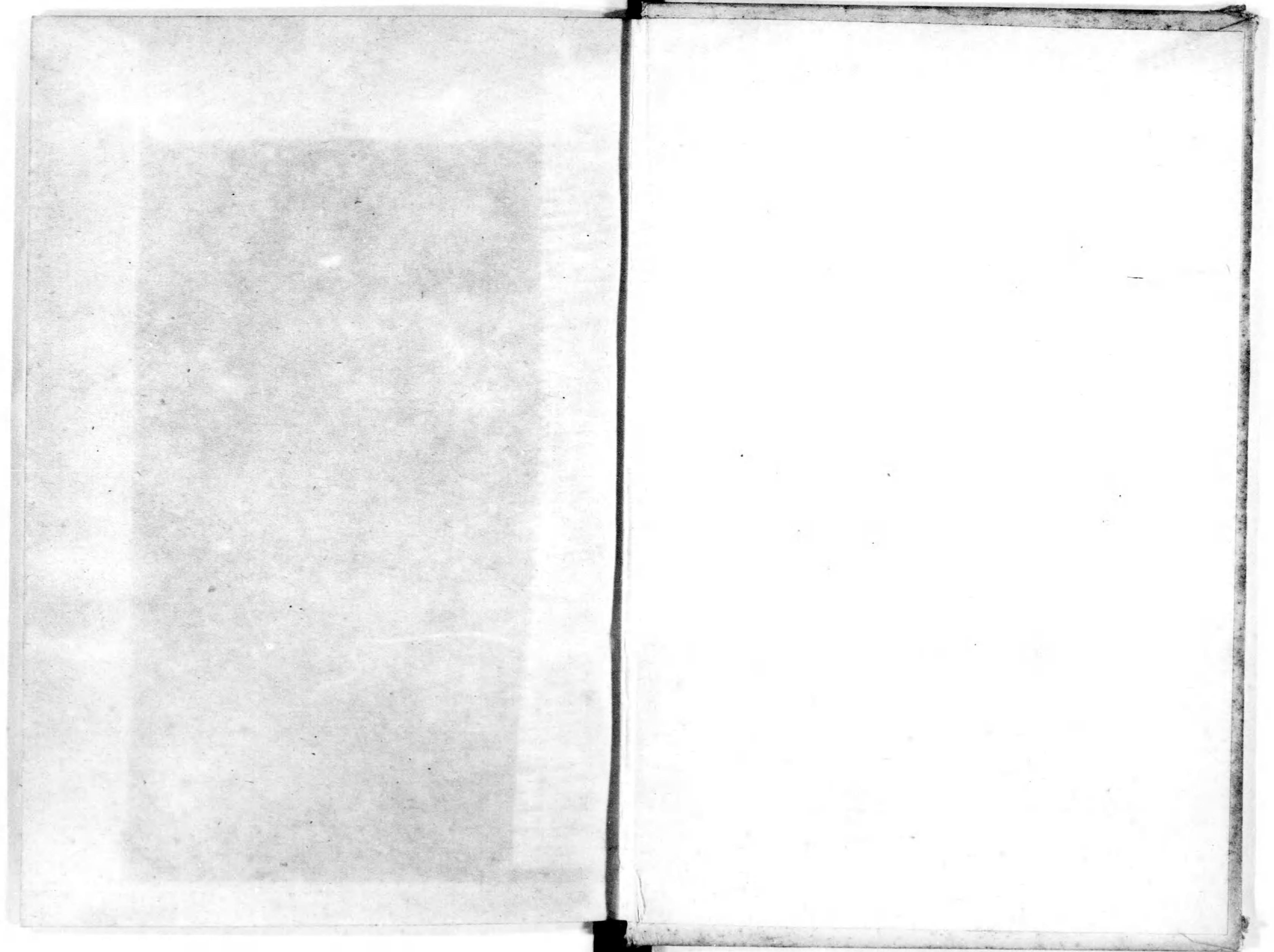
探偵小説
海賊船

31
183



始





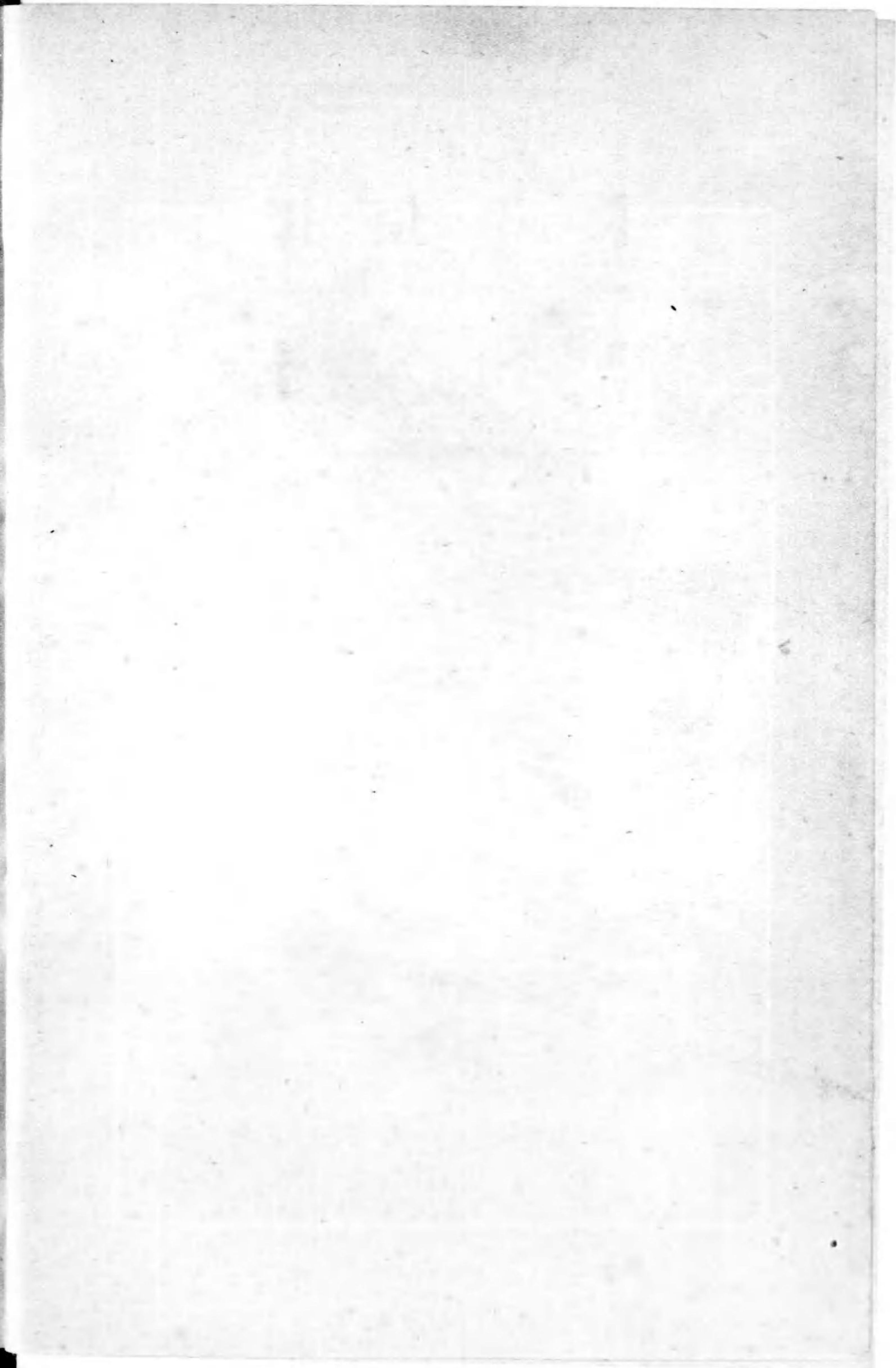
特102
288



覆面子著



正 大 正
社 15. 頁. 16 尚
內 交



目次

無慘や落花狼籍……………	(一)
十三歳の博徒……………	(二三)
賭場の大喧嘩……………	(三七)
叶はぬ戀……………	(三七)
美女を殺害……………	(五三)
欺かれて逐電……………	(六三)
今日明日の生命……………	(七六)
小賊の失敗から足……………	(九三)
お絹の危難……………	(一〇一)
變り果てた母の姿……………	(一一三)

海賊の襲來……………(184)
 奇怪な父子の邂逅……………(181)
 一代の大仕事……………(185)
 兩勇士の苦心……………(184)
 討手の大軍襲來……………(191)
 奇遇から海賊露見……………(194)
 大海賊の最期……………(198)

目次 (了)

小探偵 稀代の大海賊

覆面子著

無残や落花狼籍

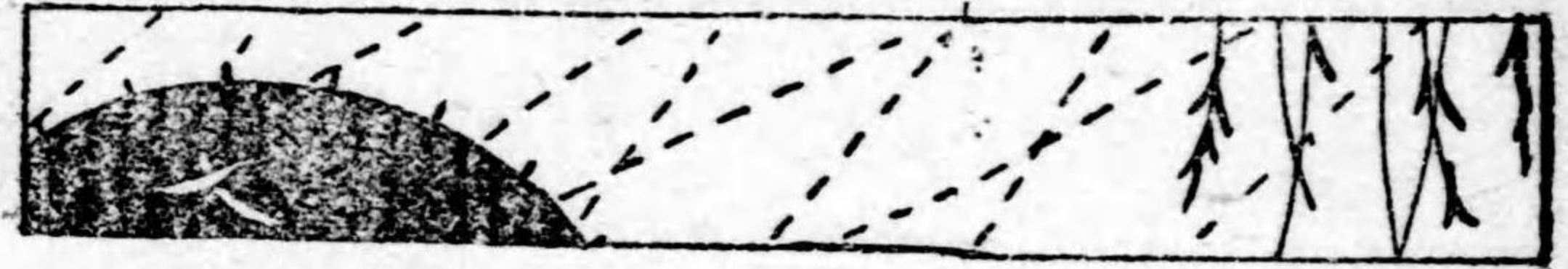
稀代の海賊毛剃九右衛門と云へば今は百五十餘年の昔、寶曆十二年は卯月の上旬、五十餘人の小頭小賊共を率ゐ、大膽不敵にも肥後の太守細川越中守忠宗公の御用金三萬兩を奪ひ取り、當時西海の天地を震動せしめた絶世の大海賊の首領であるが、積悪の報ひか將又天のなせる配劑か彼れは半世の天壽をも保ち得ず、花ならば漸く半ばはころび初めし二十一歳をこの世の名残りに、隣れ磔の極刑に處せられて熊本の朝露と消

無残や落花狼籍



わ、末世までもその醜名を廣く天下に傳へた強賊の張本で、演劇でよくする博多小女郎油枕と云ふは毛剃九右衛門の一説を取つたものである。九右衛門は幼名を丸市と呼ばれ、肥前の國長崎に程近き海邊荒戸村の産れであるが、父を九平次母をお浪と云つて共に善良な土地の漁師であつた。

九平次夫婦は別に裕富と云ふほどではなかつたが、夫歸は共に稼人で稼業を怠るやうな事もないので、兎にも角にもその日は極めて安らかに暮してゐたが、唯だ不足なのは夫婦の仲に子と云ふ者がないので九平次は明暮れこの事ばかり唧つて嘆息し、お浪はお浪で殊更物憂く思ひ、心中ではせめて女の兒でもよいどうか一子を擧げさせて戴きたいと神佛に禱りながら歎かほしい數年を送り迎へてゐたが、來る年もく、



妊娠になる事が出來ず、こればかりは神や佛の力も及ばぬことかと諦めかねる心を無理に押しつけて居た。

「今日は、お浪さんお前さん何をそんなに鬱いでゐるの？ オウそうくお前さんは日頃子供の無いことを人一倍苦に病んでゐた人だね。それについて宜いことを思ひ出したのだが、お前さんも知つてゐるだらう無養寺の大銀杏を？ 何年経つたか知れない恐ろしい古木で、あれがまた恐ろしく靈驗があるとよ。殊に子の無い者には一層それが驗かで、三七二十一日の日參をして、その度毎に銀杏の樹にそつと抱きついて心願すれば如何なる場合もきつと妊娠になると云ふよ。餘り遠くもない寺だからお前さんも試みに願立てをしちや如何です？」

と、云つて突然訪れて勧めたのは同じ漁師仲間の次郎平の女房であつ





た。
 「ホ、夫は御親切に有りがたうございます。妾は寝ても起きてもその事ばかりが苦になつて困つてゐるところだつたよ。だが、樹に抱きつくと云ふのも何だか恥しいやうな氣がして……」
 お浪は女房の勧めを深く喜びましたが、それでも何となく面恥かし氣に斯う云ふのであつた。

「オホ、お前さんはまだやつぱり娘ツ子だね。彼の寂しい境内だから晝の日中だつて誰れも見る者がなからうよ。夫に恐ろしいほど御利益があるんだから、そんな事は云つちやゐられないぢやないか」
 「それもそうです。ちやア一つ思ひ立つて見ませう」
 「そうなさい。それが一番だよ。昔から神や佛の申し子と云へばきつと



立派に子にきまつてゐるから、お前さんも大方そんな子を授けて貰つて楽しい一生を送る事が出来やうよ……」

次郎平の女房は尙ほも四方八面の話をして、太陽が今しも西の山に傾かんとする頃いそくと歸つてしまつた。

『そんなに靈驗があるんか知らん。何にしても良人に告げての事にしませう』

お浪は口の中で斯んな事を呟きながら九平次の歸りを心待ちに待つてゐた。

「今かへ、大そう早かつたね」
 何となくつまらなさうな顔つきで、平常よりは餘程早く歸つて来た良人の漁具を受取り、腰蓑を脱してやりながら、お浪は優しく聲をかけ



た。
『ウム、今日は暴日でさつぱりいけないよ。それこそ雑魚一尾ない始末さ、だから諦めて歸つたよ』

然うかへ、それは悪かつたね。たまにはかうした日もあつて早く休める時がなくちや働くばかりも何だから……』

と、云ひつゝお浪は勝手から湯を汲んで来て足を濯がせ、やがて夫婦水入らずの楽しい夕餐の膳に向つたが、食事も終で、九平次は大きいなため煙草でスツバ〜と一喫やりながら明日の支度に、お浪は食後の跡かたづけに各々の用事をすませ、更け易き秋の夜は早や寝物語の頃ともなり、お浪は晝間次郎平の女房に教へられた一始一終を話して聞かせた。



『然りや宜いことだ。己等も子供さねありやどんなに幸福だか知れないよ。昔から神佛の事は如何にも争はれないよ。信心すれば必ず御利益と云ふものは與へ下さるにきまつてゐるのだ。また呪ひと云ふことも随分廣く云ひふらされてゐる事だから、明日から思ひ立つて三七日の願立をするがよからう。だがその間はなるべく精進して參詣を怠るやうなことがあつてはなるまいよ』

良人の九平次は一も二もなく賛成して呉れたので、お浪はその翌朝から道程一里餘りの無養寺と云ふ山寺へ參詣に出掛けた。銀杏の樹を捜すと鬱蒼と生茂つた奥の院の横手にあつて、見るからに大きい、十抱へにあまらうかと思はれる、如何にも靈驗のありさうな古木であつた。

こゝは片鄙の山寺、而も庫裡納所とも餘程かけ隔つた奥の院で憚る人



目とともないが、お浪はまだ三十路を越さない女盛り、殊に漁師の女房には惜しいほどの美人であるところから、若い女には有り勝な恥しさの念も出て、一時は何となく躊躇てゐたが、やがてきつと心を定め、教はつた通り銀杏の大木に抱きつき

「何卒神變不測の靈験をもつて、妾共夫婦に一子をお授け下されよ……」

と、丹誠籠めて一心に念じ、その日は羞しさの念にかられて他人と顔見合す事さへ心苦しく思つてゐたが、よく考へて見ると、寂しい山寺の奥で他に心を措く所もないから、毎日々々怠ることなく熱心に参詣してゐる中、三七日の日はまた、く間に過ぎて、いよいよ満願の日となつたが、どうしたことか生憎にもその日は朝から據ない用事に追はれ、と



うく申刻頃（只今の午後四時過ぎ）までは少しも手抜きがならなかつた、それでも今日を過しては大願も空しくならうと思はるゝま、道を急いで無養寺へ詣つた處、時しも神無月（舊曆十月）の下旬とて、吹く木枯はヒユウくと物凄いな音を立て、樹の葉はチラ／＼ハラ／＼と瞬時きもなく落ちて、奥の院の寂しさはとて日頃の比ではなく、氣丈夫のお浪も流石に足も進みかね、小さい心をとつおひつしたが、何を云つてもこの日限りの願望、最後の勇氣に漸く例の大銀杏の所へまわり、平常よりも精神を凝して

「何卒一子をお授け給へ……」

と、一心不亂に祈念してゐる折りしも、遙か後方にあたつて人の足音が聞え、だん／＼それが近寄るやうに思はれるところから不圖振り返つ



無残や落花狼籍

て見ると、年の頃なら廿四五歳かとも思はしき一人の若僧、身は墨染の衣に包まれども、色の白さ、目元の清らかなにも涼しき様、鼻すぢ通つて脊のすらりとした姿、業平朝臣も斯くはあるまじと思はれるばかりの美僧、お浪は餘りの事に暫くはちつと見詰めてゐると

一 汝はさほどに子が欲いか？ 我は汝が日頃の信仰に免じ法力をもつて目前に一子を授けつかはす……」

と、云つたかと思ふと無慘やお浪はその場へ押し倒され、脱れんとすれど虚弱き女の力の及ばざこそ、身動きすらもなりかねて、後は無慘や落花狼籍言語に絶せぬ振舞ひであつた。

お浪は餘りの口惜しさ馬鹿らしさに一時は死なうかとさね思つたが、何かそこに考へる事もあつて其の日は早々に我が家へ立ち歸つた。しか



し、奥の院での出来事は流石にそれとは良人にも明しかね、深く包んで小さい胸を痛めてゐた。

奈何なる宿世の業因であらう、お浪は幾程もなく妖僧の胤を宿して懐妊した。けれども神ならぬ身の九平次は、斯かる事とは夢にも知らず、銀杏の樹とのみさながらに天に昇る心地の喜びで平産の日を指折り數へて待つてゐた。それに引き代へお浪は日毎に恐ろしさと苦痛の念がつり、明けても暮れても只恐々とした日のみであつた。

月日は何の容赦もなく經ぎて、早くも延享元年七月十日となつて、この日お浪は玉の様な男の子を産み落し、良人の九平次の喜びは並一通りではなかつた。掌中の珠、簪の花と、目に入れても痛くないまでに愛でいつくしみ、自分の實父の幼名が九市と云つたところからその名を幼

無残や落花狼籍



兒に與へ、自分の年の老るのも忘れて、はげば立て、立てば歩めと只だ九市の成長を一日も早かれとのみ待ちまうけてゐた。やがて月日は流星の如くに過ぎた、白駒の隙は止まらず、九市の六歳の秋を迎へた時、父九平次は偶とした感冒が因で臥床に入り、それが病付となつて病勢は日に日に進み、遂には草根木皮醫者の進める薬さへ何の効もなく、その年の十月中旬空しくも歸らぬ人の數に交つて黄泉の國へ旅立てしまつた。杖とも思ひ柱とも思ふ良人に失されたお浪の悲しみは一通りではなからるにも在られず、泣くにも泣かれず、その愁傷の程もたとへやうがなかつた。それでも親切な濱の人達の手によつて泣く／＼野邊の送りもつつかなく濟せ、その後は細い女の腕一つで九市を養ひ、漸く立つるその日／＼の煙も、人の慈惠で世を送らねばならぬ始末であつた。

十三歳の博徒



「おい、太郎作どん。九平次どんの息子は親に似てゐない鬼兒だのう」
 「ウム、親爺とは全で違ふよ。すつぽんとお月さん見たいだ」
 「だが願兒だといふが、夫れで力が強いのかも知れないよ」
 「それにしてもありや九平次どんの胤ぢやなからうよ」
 「そこが願兒と云ふものぢやねわか？」
 「何にしても母公は彼の不孝者を抱わちや可哀想でならねや」
 斯うした噂が猫の額ほどしかない濱邊へ立つやうになつたのは九平次が死んで三年目頃の事であつたが、全く人々の噂の通りで、お浪は漁師の女房には惜しいほどの美人であり、九平次は土地でも評判の善人であ



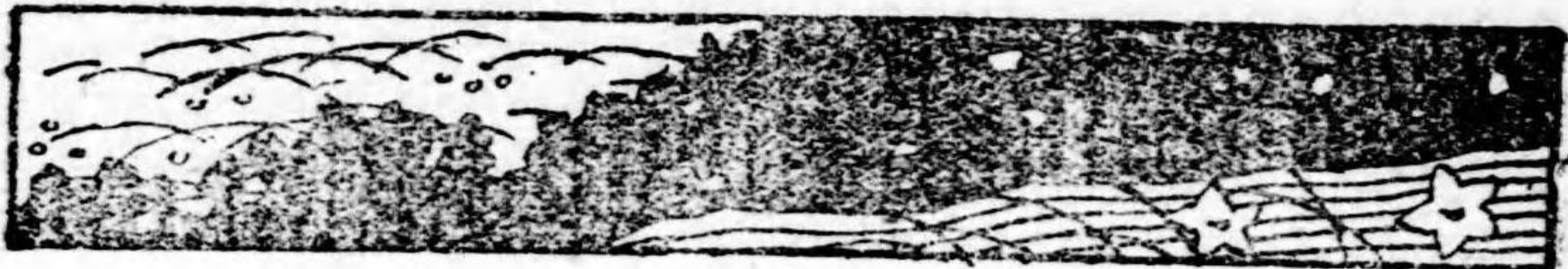
つた。ところが、その中に生れた子供の九市は兩親には似ても似つかぬ腕白者で、骨はあくまでも逞ましく、身體はとても八九歳の子供とは思へぬばかりに大きくて十五六歳の脊長があり、そのみならず、性質は驕暴で力の強いことも驚くばかりであつた。と同時に舟を操つる事も、年久しく漁業に慣れた者等にも及ばぬ程秀れた腕を持つて居て、これが漸く九つや十の子供かと土地の者で舌を捲かぬ者はなかつた。

斯様な風で九市が十二歳の春を迎へた頃は早や一人前の漁師になつてゐて、九平次の跡をそのまゝ漁業を営み多く金を儲けるやうになつたが酒を呑むことを覺けたのもこの頃で、その上稀な女好で、十三歳の春には早や宿場娼妓を買ふ始末であつた。のみならず博奕が三度の飯よりも好きと云ふ厄介者で、まだ子供殻を抜けない癖にあちこちの賭場へ入り



浸り、養の目を争ひお浪の意見など少しも用ひないのみか、母の世話をする事までが面倒ましくなり果ては人間らしい行ひさへもせなくなつてしまつた。それでも流石に母子の情は争へぬ者でお浪は九市の行ひを見るにつけ聞くにつけ、袖の乾くひまさへなきまでに泣き悲しみ、機りに觸れては諫言もするが、どうしてもそんな優しい事では身に浸なかつた。お浪はほと／＼見限つて只だ我が身の不幸を悔むばかりであつた。

「奈何なる前世の宿縁であらう。九市が良人に似ないのも決して無理ではない。あの子はたしかに無養寺の奥の院で……ア、恐ろしやあの旅僧の……。今日の日まで世間はもとより連れ添ふ良人にさへも隠して來たが、これぞ良人を偽つた天の報ひにさうゐない。兎ても角ても生存へて憂難を見るよりは、いつそ死んだが優だ、そうだ、せめてあの世でな



りと良人に詫びしやう……」

果ては女心の一途に斯うまでも思ひつめ、いよく死なうと覺悟を定め無限の恨みを抱いて、程近き濱邊さして駆け出したのはその年も押し迫つた十二月三日、で淡き宵月の影さへ、早や姿をひそめし頃であつた。

親の心子知らずとは能く云つたもので、母のお浪が斯くまでに歎いて死ぬる覺悟で濱邊へ駆け出したなどは、夢露も知らず、この事があつてから十日ばかりの後ち九市は博奕の資金をすつかり捲き上げられ詮方なきまゝ、茫乎と我が家へ歸つて來た。

「オウ九市どん。ようまア歸つて呉れた。だが、お前は未だ知るまいがお母は十日ばかり前に家出して、何處へ行つたか皆目行方が知れない。



それで村中の衆は心配してお前の行先を方々捜したが一向在所が知れないので困つてゐたところだよ。それにしても歸つて呉れてよかつた」

とありし次第を話してやりました。九市ほどの悪黨でもやはり子は子で親子の情はあらそへぬものか、流石に日頃の不孝を悔ひ歎き、

「悪い事をした。借てもく母人はこの身持の悪いのを苦にして、女心の一途に生存へても甲斐なしと、此の世を果敢なみ入水しられたか、嗚呼痛ましい事をした」

氣隨氣儘に手もおへぬ九市も、今更に打ち驚き身の放埒を悔み歎き、母の家出した日を命日として、殊勝氣にも後懇切に弔つてゐた。

曇つた鏡も少時は照るもので、九市も當座は佛事に餘念なく少しは身持も修つたが、去者は日々に疎くなり、やがてその年も暮れ果て、明れ



十三歳の博徒

一八

ば寶曆九年の春とはなりぬ。何處も同じ新玉の年の始めの樂しさは、老若男女皆一様に心の浮立つものなるが、こゝに荒戸村から五里ばかり隔つた種ヶ崎と云ふ處に、毎年正月の十五、十六の兩日を期し、天下晴れてと云ふ譯ではないが、非常に大規模な賭場が開かれ、これを目的に寄る附近者等はまるでこぼれた砂糖にでもすひよせられる蟻のやうなものであつた。

九市はかゝてこの事を知つてゐたので、前日の十四日に日頃仲間のやうにしてゐる博奕友達の破落戸兩三人を伴れて種ヶ崎に出掛け、自分も一賭場開いて一利得せんものと夜中からをさく準備を整へ、望みの賭場が開かれる非常な盛況で、午後四時頃までには二百兩餘りも儲け、九素市はより隨つて來た村の者までが大悦びに悦んでゐたところが、この



時九市の賭場へ集る黒山の群衆を押し分け掻分けて、腰に長脇差を佩した一人の男が顔色をかへて這入つて來た。

「オイ二才、汝誰れに斷つて此の賭場を開いたか。乃公は此の土地の取締をする黒髪分の子分だが、見た事も無へ小二才奴、不届な事をしやがる、何と云ふ名だ。名を名乗つて謝をしろ」

とさも横柄な態度で眞向から九市に呷鳴りつけた。九市は少しも動ずる色もなくちつとその男の顔を瞞めてゐると、年の頃二十五六、或は七にもなるかとも思はれ、面色は飽まで黒く、毛は赤く、眼は鋭くて口の大きい事、たゞこれだけでも如何にも一癖も二癖もありさうな面つき、問はずと知れた博徒とはすぐ九市の頭にも浮んだが、九市は少しも怖れる色もなく、ヘンと鼻先を鳴らして笑ひながら、

十三歳の博徒

一九

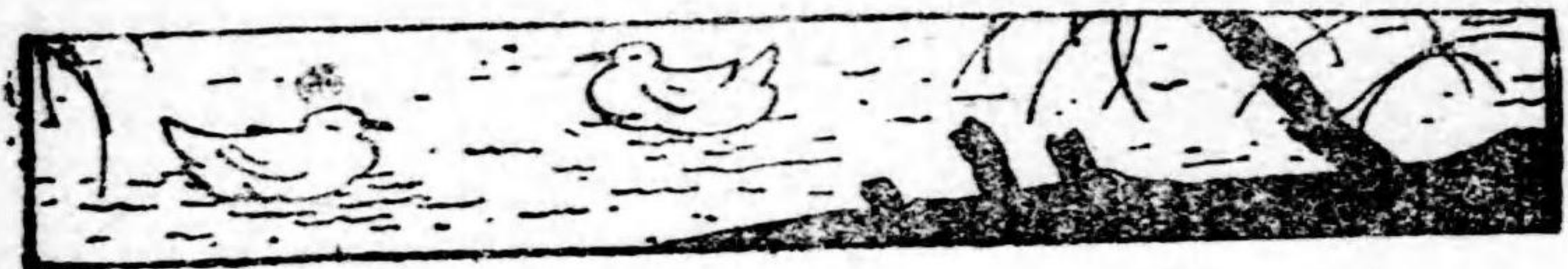


「俺かへ。俺等はこゝから遠くもねね荒戸村の九市と云ふ者だ。俺等が勝手に俺等が開いた此の賭場を、誰れに何と云ひ分が有るぞい。もとよりお上の准許を受けて、天下晴れての稼業でも無く博徒の勝負事だ。何の取締りの元締めのと七六かしい規則が有るものか、各々勝手の玩弄事だ。餘計なお世話を焼くよりも、尻込んで居やがれ」

九市は年こそ子供であるがなかく負けては居らず思ふがまゝに罵返したからたまらない。例の男は大きにむかつ腹を立て、

「吠謂な小二才奴、乃公を誰れだと思ふ、黒髪親分の子分では一と云つても二とは降らぬ赤間の三吉たア乃公の事だ。身の程知らぬ青二才、是れでも喰へ！」

と云ふより早く榮螺のやうな拳を固めて、九市目かけて打つて蒐つた



九市もさるもの早くも身をかはずと素早く立ち上り、打たんと犇めく三吉の利腕とらへて目を怒らし、

「やい蛆虫奴、打るものなら打つて見ろ」

と云ひさま指頭に力を入れてグーツと一締め持つて生れた怪力で握り

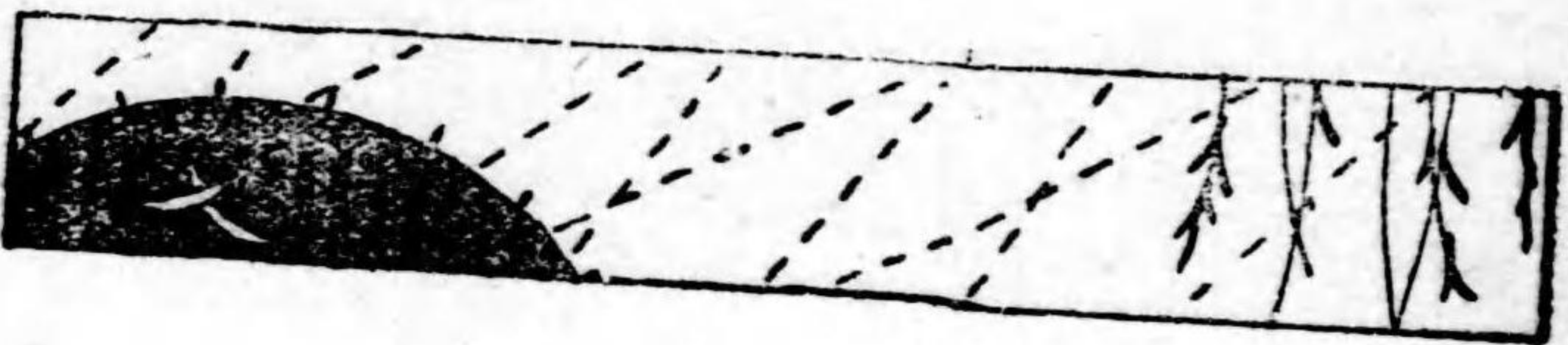
詰めたからたまらない。三吉は目を白黒させ苦しみながら、

「汝……ッ」

と叫ぶが天然備はる九市の力にはとても事の敵する事が出来ないのみか、握られてゐる腕は今にも振れて飛ぶかと思はれ苦さと痛さに堪へかね、

「アイタ、アイ、タ、アタ、ッ」

と負惜みの強い奴だがどうく我慢しかねて弱音をばき、鬼の様な眼



十三歳の博徒

からポロリと大粒の涙を流して詫を云った。これを見た九市はさも心地よげに呵々と笑つて、

「口程に、無く意氣地無奴、掴み殺すは易い事だが、無益の殺生は大人氣ない。惜いものだが今日は免してやらア、一昨日来い」

と云ひさまボンと一突き三四間も向の方へ突飛ばしてしまつた。大地へいやと云ふ程挫と突き倒された三吉は、暫くは起き上ることもならなかつたが、漸く起き上つて腕と腰を擦りながら、九市を白眼んで恨めし氣に、

能くも辛い目に遭はしやがつたな。憶わてゐやがれ」

と云ひ捨てるどクルリと後向になつて雲か霞かのやうにトンくと逃げ出してしまつた。



九市は三吉には目も呉れず、又もや勝負の續けやうとするので、最前から様子を見てゐた人達はこれを危びながら種々に諫めた。

「兄はまた今年の様子を知らなさらないね、今の者をあんなに酷い目に爲すつちや後が面倒だよ。例年とは違つて今年には彼奴が云つた通り、黒髪長藏と云ふ此の土地の親分が、此の祭二日間は村の衆に頼まれて、毎年起る賭博上からの喧嘩を取り締る事になつてゐるのだよ。だから誰れでもこゝへ賭場を開く者は一應黒髪親分に断つて置かなくちやならねなのだ。兄はこれ等の事を知らずに何の挨拶もなしに開いたものだから今のやうに喧しく云つて来たのだらう。ところがあんな塩梅に懲しては是りやとても只では済むまい。吃度彼奴は親分にこの様子を告げるから、仕返しに来るのは火を見るよりも確な事だ、早く今の間に立退きなさる

が爲めでせうよ』

と親切に云つて呉れたのみならず、荒戸村から一緒に来た四五人の者も、後難を恐れて寸時も早く立去らうとした。

『土地の衆いろくど有りがたうございます。然様な譯ならば大勢でここへ押し寄せて来るは必定、多勢に無勢ぢや所詮叶はぬ、そんな喧嘩をするよりは早く逃げて歸るが上分別だ、兄貴、早くくくく』

と連れの男等はしきりに九市を急ぎ立て逃げ支度をするが、九市はこれを馬の耳に風の如くに聞き流してカラくど打ち笑ひ、

『汝等それほど喧嘩が恐しいか。恐しけりや己等にかまはずとつゝ逃げ歸れ、俺等は此處を五分も動く事ぢやねぬ。たとへ黒髪が来やうが赤髪が来やうが、俺に敵對ふ者があれば片端から目に物見せて、再び云ひ



分無いやうに懲して荒膽挫いて呉れなきや氣が濟ねエ、心配するなこれでも荒戸村の九市様だ』

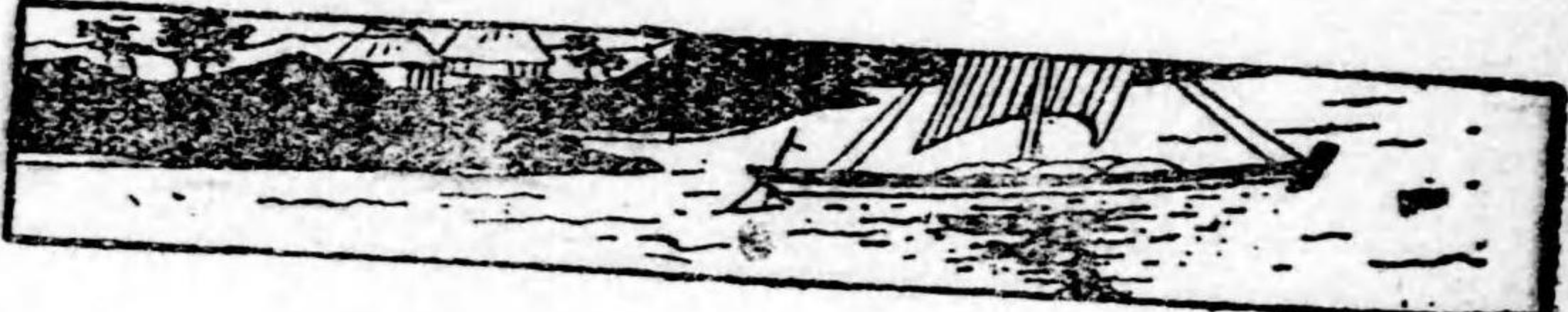
と云つて少しも動かうとはせぬが、連れの者等は種々に云ひなだめてそれでもやつとこゝを立ち退かんとする折りしも、遙か向手の方より打たれた三吉を先頭に黒髪長藏乾分等凡そ三十五六人ばかり、どつと一時に押し寄せ、

『出来過た小二才奴、逃げやうたつて遁しはせぬぞ』

と口々に呼び立てながら早くも九市等の一行をおつとり巻いてしまつた。其の場に居合た者を始め、九市に附いて來てゐた者等は膽を潰して愕き、皆こそく逃げてしまつた。

九市は豫てこの事ありと期してゐた事とて少しも愕いた色もなく、傍





に積み重ねてあつた足場丸太の中から一丈にもあまる相應のをやつと抜き出してぐつと小脇に抱え込み、寄らば打たんと身構へた。黒髪の子分等は賭場へ這入る事は這入つたが、斯うした九市の態度にすつかり恐れをなし、互に目と目を見合すのみで誰れ一人として進み近寄るものはなかつた。九市は嚇となつて急ぎ立て、

「汝等は何だい。大勢で押し寄せながら僅か一人の子供に怖れて寄りつくことが出来ないのか蛆虫奴等、誰か進んで勝負しろ、愚圖々々すりや今後の戒めにこの丸太をお見舞申して息の根止めて呉れん。そこ動くな」

と大喝一聲、持つたる丸太をりうくとまるで水車のやうに振り廻はし、群がる子分等に打つてかゝり、見る間に三四人の子分をその場へ叩

き倒してしまつた。

賭場の喧嘩

赤間の三吉等は多勢を頼みに再び九市をおつとり巻いて復讐に來たが何を云つても相手は底知れずの怪力、五十人が一度にかゝつて尙ほ物足らぬと云ふところへ三十五六人の人数であるからとてもに及びもつかず水車の如くに振り廻される丸太を前に避け後ろによけて、さながら猛虎の如き九市の勢力に辟易して、右往左往に散亂し、嵐に木の葉の落る如くであつた。

九市は勝に乗じて黒髪長藏の乾分をさながら蜘蛛の子を追ひ散らすが如くに追拂ひ、最早敵對ふ者は無いと大いに慢心してゐる折り柄、一人

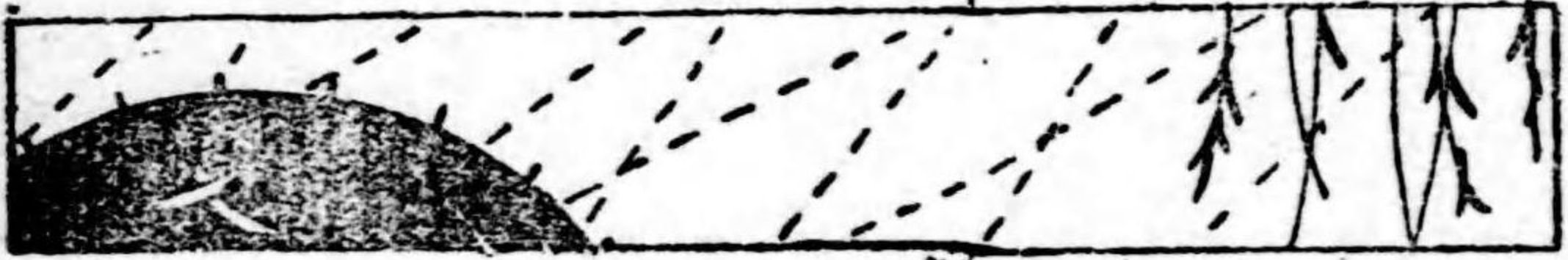




の老人がひよつくり九市の前へ現れた。

老人は殊更小兵で腰は梓の弓を張つた如くにかゞみ、頭は雪と見まがうばかり、見るからに痛々しげであつた。これこそ今しがた多くの子分をなやめられた黒髪長藏その人で、黒髪は元は中國筋のさる大名に抱けられた眞影流の達人で、一時は武藝の師範をしてゐたが、譯あつて主家を浪人し、流れ流れて九州へ落ち、持つて生れた俠氣の性質から、腕力を好み、強を挫いて弱きを助け、遂には一ぱしの親分に立てられ今日では七八十人の子分もあつて、年こそ早や七十に手がとゞかうとしてゐるが却々の饜饒で、種ヶ崎在の人々の依頼を受け祭の喧嘩を取締つてゐたのであつた。

ところが、赤間の三吉が九市に辛い目に合はされたのみならず、今又



多くの子分等も九市の亂暴狼籍に合ひ、喧嘩は益々大きなるとの注進を受け、親分も今は捨て置きがたしと、覺悟の一刀腰に帯込み、九市の賭場へ駆けつけた。流石の長藏親分も九市の強力無双の振舞に暫しは恍惚見てゐたが、餘り傍若無人の振舞に長藏も心に据かね、
「さらば懲して呉れん」

と、九市の前へつかぐと進み寄り、

「オイ青二才、汝は何處の者だ、乃公は黒髪長藏だ、此の俺が受け持つ場所を一言の挨拶もなく何故に騒す！仔細を語れ、事と品とによつてはその分には捨て置ぬぞ」

と云つて九市をギョツと睨みつけた。

「ハハ、此の老耄爺奴、白髪頭か黒髪か、物を云ふにも考へて吐せ



賭場の大喧嘩

三〇

老耄の癖に吻々と吠謂やがる。毎年勝手に勝負を爲せたこの賭場を、今年に限つて元締めとか取締とか名も無い所へ難癖つけ、多くの金を只だ貪らうと喧嘩を持ち込む不敵者、餘人ならばいざ知ず、この荒戸村の九市に限つて道理に當らぬ金銭は鑑一文だつて出すことぢやねエぞ、サア有無の問答は無益の時潰しだ、この一棒で打ち殺し、息の根止めるは易けれど、小兒にも劣る老耄命を敵手にするのは俺の名折れだ、人の譏も恥しいから今日の所は免して遣らア、大勢立たないその中に御免なせへと詫をして、とつと早く立ち歸れ。命めうがの僥倖者！」

飽まで見下した悪口廣言、流石の長藏も腹に据わかね、

「何だと、云はして置けば附けあがりやがる。未だ乳臭身で居ながら今の廣言片腹痛い、ちよございな亂暴はよして、疾く早く歸つて行ねエ、



賭場の大喧嘩

三一

今の所は見つて見ぬ顔してやらア」

年はとつてゐても腕に覺わのある爺さんだからなかく、だまつては居らず、充分に罵り返した。九は市高が白髪頭の老人と侮つてかゝつてゐるから心中燃ゆるが如くに怒り、

「放言たり老耄奴、汝がそのやうに吐すなら容赦はせないぞ、今に目にも物見せて呉れる観念しろ」

と云ふより早く例の丸太を真向から振翳し、唯一撃にと撃込んだが、長藏は少しも騒ぐ様子もなく、そつと體を翻して空を打たせ、素早く手許に飛び込むなり早く利腕を執つてグツと締め上げ、「エイ！」と云ふ聲諸共、憐れ九市は目よりも高く差し上げられ。

「ソレ引縛れッ！」



賭場の大喧嘩

三二

と云ふ聲の終らぬに、早くも四五間向ふへ投げ出された。先刻から親分の神變分測の手練をちつと見てゐた乾兒の者等は、投げ出された九市の上へ折り重なつてまたくまに縛り上げ、先刻辛い目に會はされた返報に腕へ喰ひ入るばかりギユウ〜と引き締め、三十五六人の乾兒は引きづるやうに長藏の家へ引き立てた。

「そやつを庭の物置へ打ち込んで置いて汝等一杯やりな、御苦勞だつた」

長藏はかう云つて九市を物置へ入れさせ、乾兒等は残らず追ひやつてしまふと、何思つたものか物置へ入つて九市の傍へまゐり、自分が縄目を解いてやりながら詞靜かに、

「オイ野郎。汝を懲さんその爲めに一旦は厳しく縛つたが、素より殺す



心算も無へのだ。まだこれから一花咲きなきやならね汝ぢやねわか、此の後心を入れかへ我意を振り舞ふ事は止めてしまへ。今日の處は無言で赦してやる早く住所へ立ち歸へろ。決してつまらねエ恨を抱くぢやねエぞ」

と慈仁を籠めて説きさとしてやると、九市はこれ聞いて面を上げたが、地面に額をすりつけんばかりに頭を下げ、

「實に親分恐れ入りやした。誠に乃公は目が見えなかつたので、盲目ゆゑに貴所を只の老人だとのみ思ひ込んで飛んでもね無禮をいたしやした。就ちや一件お願へがありやすが、何とお肯なすつては下せへませんでせうか？」

と何か望みあり氣に兩手をついて詫び入つた。



賭場の大喧嘩

三四

「頼みがある。何だ！俺等に適ふ事なら聞いてやらねえ事もねわが」
長藏は氣嫌よく打ち笑ひながら云ふと、九市は飛び上るほどに喜んで
「ちやお聞き入れ下さいまするか、斯う云つちや私やア自慢するやうで
すが、これで漸と十六になつたばかりで、大した力と云ふ程でもねわが
今ちや裕に五十人力はある心算なんで、それでまア、最早天下に敵は無
いものと思つて居やした。ところが今日はからずも親分のお手練を拜見
して感服しやした。何卒か今日から私を乾兒の中へ加へては下さいませ
んでせうか、武藝と云ふものが是非習ひたいんでさア。如何様仰せも背
きませんが……」
長藏もどうやら九市が眞實から望んでゐるらしいと思つたので暫くは
思案してゐたが、



「そうかへ、そりや奇特だ。汝がそうまで思ふなら教へてやらねえ事
もねわが、一先づ住所へ歸つて両親ともどくと相談して來な、両親さへ
得心すりや、是までの氣隨氣儘を改めて、再び俺の家へ出て來な、必ず
望みを叶へてやらう。だが、もう日も暮れたから夕飯でも食つて歸るが
宜からう」
長藏も流石大親分と立てられるだけあつて云ふことがよく理に叶つて
ゐた。
「有難たうごせへやす。お諭ちや御座へやすが、私や生れつき不幸で兩
親は疾くに亡くなつて今ちや孤獨の身ですから誰れに談合する者もあり
ません。只今の御諭は決して忘れは致しませんから御免し下さつた上、
只今から御指南に預りたいものでごせへます」

賭場の大喧嘩

三五



賭場の大喧嘩

と押し返しての頼みに、長藏も眞實が顔に現はれたのを見込み、又一つには九市をこの上もなく不憚に思つてすぐその日か乾兒に加へる事を承諾し、取り敢へず奥の一室へ通して乾兒等に酒肴の用意を命じ、赤間の三吉を始め居合す誰れ彼れを呼んで酒宴を開き、九市を乾兒にした事を紹介して、旁和睦の盃を取り交はし、始めて仇は水魚の友と睦み合ふことになつた。

斯くて九市はその翌日から剣道修業に一生懸命で、恥外聞も厭はず奴僕のやうに立働くところから、長藏は更なり、その他の乾兒等も九市を愛して睦しく交り合ふたが、好きこそ物の上手なりけりとは古諺にもある通り、長藏が折々の閑に指南するものが、僅か一年餘りにして流儀の奥底を極むるまでに進み、黒髪長藏一家の中では九市の右に出る者がな

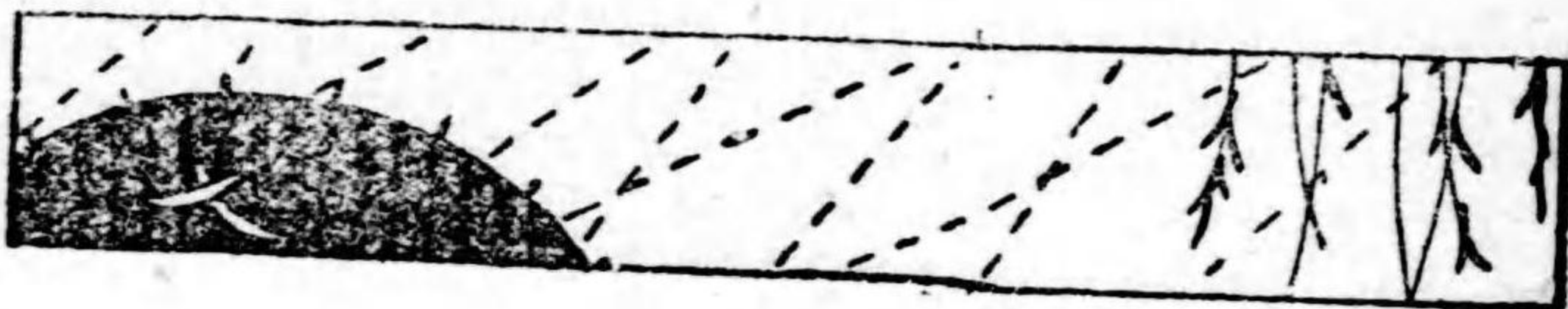


く、誰れ一人として腕前をほめぬ者どてはなかつた。

ところが九市は前にも云つた如く根が強情我慢の偽飾者の事であるから、人受けのよいやうに改心と見せかけたのはほんの表面の事で、眞實心底から改心してゐるのではなかつた。それは一人九市に限つた譯のものではなく、如何なる人間も何かそこに慾望とでも云ふやうなものがあると、その慾のためには随分苦しい思ひをも堪へ憊ぶもので、九市も剣道が習ひたいばかりにほんの一时的の改心にすぎなかつたのである。

叶はぬ戀

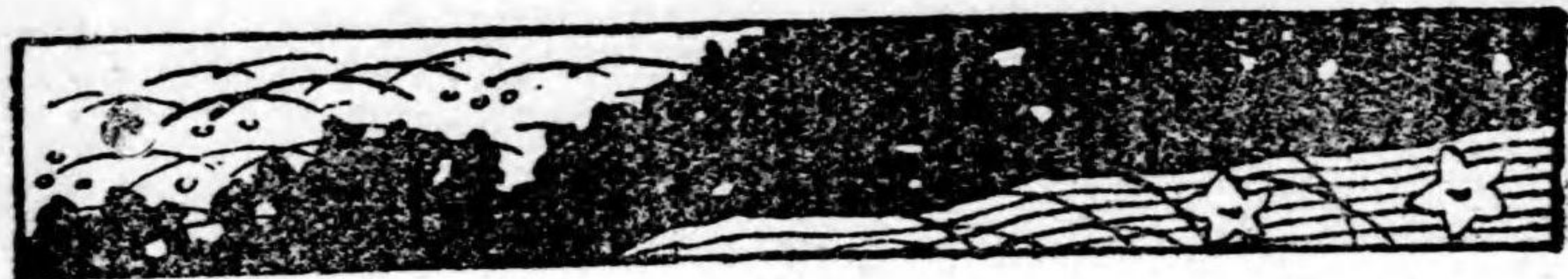
九市は種ヶ崎の喧嘩が因ではからずも長藏親分の子兒となり、一年半の後には長藏の片腕とさへ頼まれるばかりなつたが、根が破落者の横着



と来てゐるから、表面は如何にも殊勝氣に見せかけ内心では何か面白くない仕事でもないかと時節の來るのを、さながら親の仇でも探し求めるやうにして待ちかまへてゐた。だから長藏が丹精して劍術を教へてやる事は、實に危険極る事で、狂人に刀を持すよりも尙ほ危なかしい事であつた。

寶曆十年と云へば九市が十九歳の年で、確か七月二十日の事であつた今は眞逆の友である赤間の三吉と連れ立つて種ヶ崎から二里餘りも隔つた廣瀬村と云ふのへ親分の代理に使に出かけた。こゝには赤熊五郎と名乗る近在切つての親分があり、赤熊と黒髪とは互に親密にした間柄であつた。

ところがこの用達の歸り路に出逢つた一美人、年の頃は二八か二九な



らず、世に類なき艶麗さ、小野の小町か照手姫も斯くはあるまじとさへ思はれる素晴しさであつた。生れつき好色漢の九市は忽ち心神が恍惚として、過ぎゆく影のみさも恨めし氣に見送つたが、それを早くも察した三吉は、九市の背をそつと叩いて、

「何うだい大哥、美いだらう。繪に描た辨天さんを見てゐるやうに素晴らしい女だね」

「ウム、全くだ。あんな別嬪は種ヶ崎にや居ねぞ。一體ありや何處の娘だい。汝知つてゐるだらう」

「知つてゐるよ。あの女を知らないやうぢや先祖に對して申し譯がねえよ」

「ウム、知つてゐるなら云つて見ろ」



叶はぬ戀

四〇

「ハハ、ハハ、馬鹿に御熱心だね。彼りや此の邊ぢや評判の美人だよ、お氣に召したらう」

「オイ三公、そうぢらさねねで早く云つてしまひな。俺アお氣に召た所の騒ぎぢやねねのだ。命がけだよ」

「ハ、ハ、ハ、甚う思ひ込んだものう。だが大哥駄目だせ、たとへ命を投げ出して慕つても迎ても及ばない事だから未練を残さすすつぱりと歸らう」

三吉は九市が焦ればあせるほど隠して急ぎ立てたが、どうしても九市は歸らうとは云はず、飽までも恍惚として見とれながら、

「弄るなよ止せ。だが、どこの誰れの娘だい。云つて見ろ」

「ハハ、ハハ、そんなにまで思ふのなら聞かしやらう。彼りや廣瀬村



の豪農の持田富右衛門の姉娘でお花と云ふのよ。美しいだらう。あれで今年十八歳だよ」

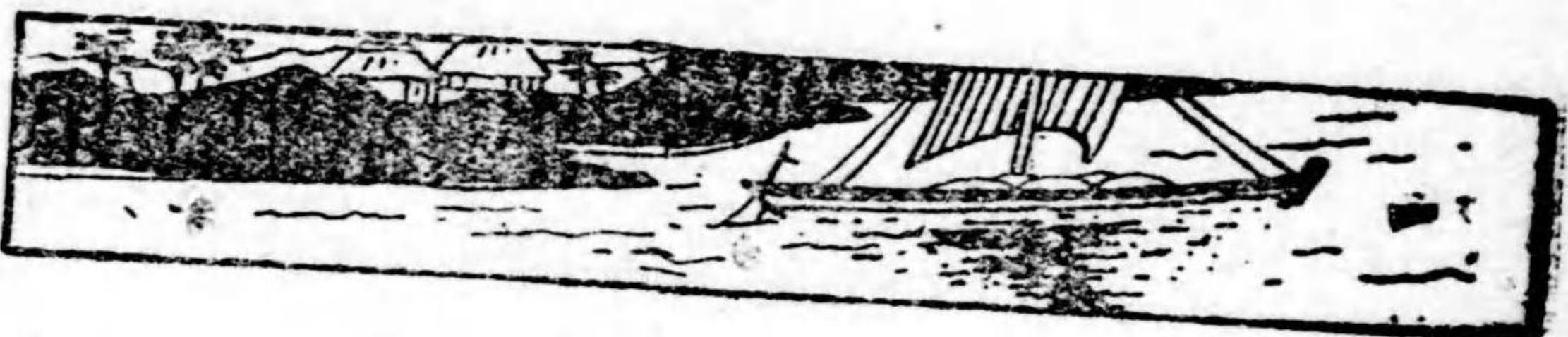
「ウム……………」

「箱入娘でめつたに外へ出ないが、偶々出る時にや下女だの下男だのが四五人もぞろぞろと従いて、今日のやうに下女一人位が供をする事はまあ無いね。随分八方から婿になりたいと申込む奴があるのだが、何れも之れも娘のお氣に入らねね奴ばかりで落第ばかりさ。それで兩親も強く心配してゐるが、肝腎の娘があつたからだからどうにもならないよ。だから大哥、何程思ひ焦れて見たところで爲方のねね事だ、まあ諦めて早く歸るとしやう」

三吉の云ふのをちつと聞いてゐた九市は、心に抱いてゐる一物はそし

叶はぬ戀

四一



らぬ風にかくし、

「まあそう聞きや詮方もなからう。だが、昔から戀にや上下の隔てはねえよ。俺だつて汝だつて天からそう斷念めたものでもあるめねよ。しかし今日は親分の使だ、兎に角も歸るとしやう」

こんな事を云ひながら、その日は種ヶ崎へ歸つたが、その後は兎角娘の事が忘れかね、夢や現に目について、戀には弱る男氣も大膽不敵の白者と來てゐるから、如何かして娘に近寄りやるせない想ひを遂げたいものど、夜となく晝となく間さねあれば廣瀬村へ出かけてお花の出入りに目をつける事を怠らなかつた。

ところがこのお花には早や既に情夫があつた。深窓に育つたお嬢さんが情夫を拵へると云ふのは一見六ヶ敷い事ではあるが、この道ばかりは



又格別なもので、お花が十八の夏を向へたある日の事であつた。日も早や西の山に沈み、お花は只一人門邊に立ち團扇片手に暑さを洗ふ夕風に浴衣の袖をなぶらせてゐる折りしも、年の頃二十二三かと思はれる、職人體の小意氣な男がお花の前を通りかゝつた。元來お花は多情者で、十四五歳の頃から兎角浮々した氣持で男の事にのみよく氣をつけてゐたから、狭風な男を見ると忽ち氣がぼうーとしてしまつた。まして今通りかかつた男と云ふのは在原の業平かさもなくば光源氏の君かとも思はれるばかりの美男子で、お花の全身は電氣にでもうたれたかのやうになつて男の姿のみ見つめてゐる、思へば先でも同じ思ひか四五間も行き過ぎて尙ほ後振り返り、又一二間行つては又振り返る、見送り見送らる姿こそ梅と柳の色競べ、深き底意の面影を残して男は行き過ぎた。



この時、持田富右衛門の近所に住むお高と云ふ老婆がひよつくりとお花の背後へ現はれそつと背を叩いて、

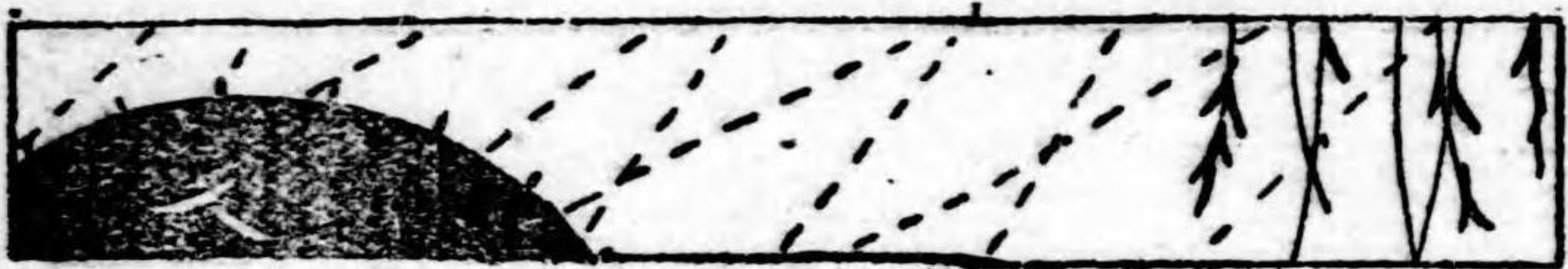
『お嬢様、御意に叶ひましたか？お執持いたしませうか』

と云はれてお花は顔に散り紅葉、お高は尙ほも耳語たが、嬉しげなるお花の顔を見てはまんざらそれが悪い事とも思はれなかつた。

「まアいやなお高さん……」

と云ひながら逃げるやうに我が家へ這入つたが、これが心のある女の仕業とも云ふべきもので、兎角浮氣する者の常套手段である。父母の許した良人を持っては何事も云ふことがないのだが、良からぬ男に懸想したばかりに後になつて思はぬ間違ひの種を作る事になるのである。

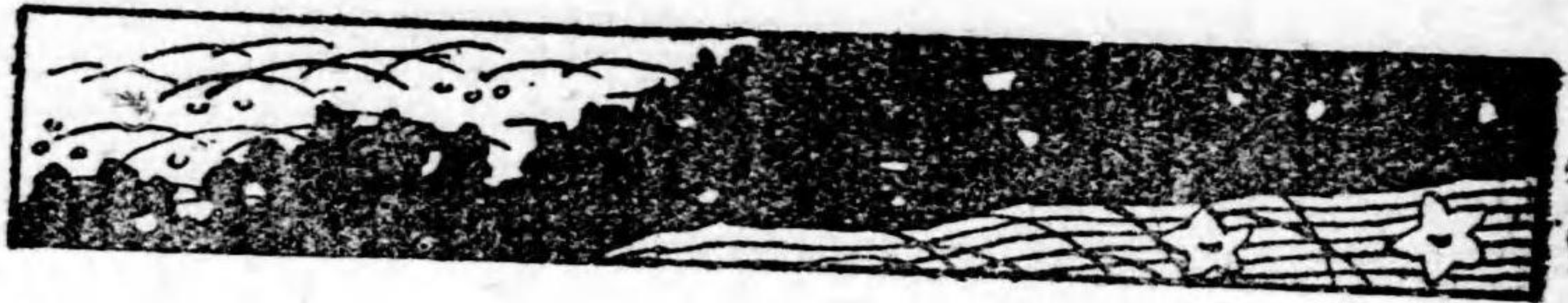
これよりお花は戀風の身に染々と忘れかね、その夜は碌々寝もやらず



その翌日もその人來る事かと、黄昏頃を見はからひ、又もや門邊に立出で人待ち顔に佇てゐた。折り柄お高はこつそり傍へかけ寄り、聲を低めて何事か耳語くと、無理にお花の手を取つて我家の軒へ引き入れてしまつた。

云ふまでもなく家の中にはお花が意中の男が忍んでゐて、どうくよくない密會をさせてしまつた。お花が斯うした嬉しい契りを交した男はそも誰れであらう。これこそ赤熊五郎の乾兒、江戸生れの美男として知られた駒平その人であつた。

駒平は只だに美男子と云ふのみで、顔容姿こそ人に優れたところもあるが精神は全く腐つてしまつて詮方のない男であつた。生れついでに放蕩根性は早くから酒と女に身を持ち崩し、親の意見も聞き入ぬところか



ら、とうとう十八歳の秋には親にも見限をつけられて勘當となつた。けれども勘當を厭ふなどと云ふ氣色は更にないのみならず、籠を放れた小鳥の如くに打ち喜び、昨日は東今日は西、何の目的もなきまゝに徘徊ひ流れ流れてこの土地の赤熊が乾兒となつたが、赤熊は駒平をどう思つたものか、非常にこれを可愛がり遂には弟分と云ふ破格の待遇をさへ受ける身となつた。ところが駒平は

「俺は普通の乾兒ぢや無へ、赤熊の弟分だ……」

と云はぬ顔に益々増長し、専ら我意を逞くし人を見下して侮ることを何とも思はず、従つてこれを憎む者もすくなくはなかつたが、何を云つても土地では飛ぶ鳥をも落しかねない勢力をもつた赤熊の威に畏れ、誰れ一人として異議をはさむ者もなかつた。そんな事から駒平の増長は



日に々募るばかりで、自分の美男を隨一の武器に近郷近在を駆け廻り人の娘や主ある婦に心を寄せ、十に八九は説き落すが何よりの仕事で、お花も遂にこの手にかゝつて口説き落されてしまつたのであつた。

美人薄命とは古人の語り草であるが、深窓に育つて世間の恐しさを知らないお花は、斯うした事から遂にはかけがへのない生命をさへもむざくど失はねばならぬ運命となるのであつた。たつた一目見てさへ戀波の立ちしに、況して圖らず契つた後は束の間も忘れ兼ねるが人の情、毎度く逢ふ事は流石に人の目も憚つて、物足らぬたまの逢瀬に早や秋の半ばともなり、涼みに出るよしも無く楽しい逢瀬の首尾とはほんの月に一度か多くて二度もまゝならず、やがては兩親に明かせ世間晴れての夫婦にならんと娘心のたゞ一筋に思ひつめても見たが、何を云つて



も相手は身分の賤しい遊人、許されぬ事は火を見るよりも明な事實あれよこれよと右つ左つ深い思案にやるせない日を送り迎へてゐた。

一方九市は九市で、お花の姿を見初めてからは、一度なりとも慾望を遂げんものをと深草少將が二の舞ひにはあらねども、雨の降る夜も風の日も、二里の道をもものこもせず間がな隙がな廣瀬村へ忍んでまゐり、お花の様子を一心に窺つてゐた。

六七八の月は空しくも夢の間に過ぎ去り、早や薄肌寒き九月上旬のあゝ夕まぐれであつた。持田の邸近くに身を忍ばせ様子如何にと窺ひゐる折りしも、薄暗の中の柴戸が音もなくスツと開かれ、立ち現はれしは繪を抜け出でたかと思はれるばかりの手弱女、これぞ持田が姉娘、九市が寝た間も忘れる事の出来なかつたお花その人で、お花は今宵駒平との



逢瀬を樂しみにいそぐところまで忍び出たのであつた。

『ウム、お花だ。確にお花だ。有がたい』

と心にうなづきながらわざと息を殺してお花を遣り過したが、九市は永の月日思ひ焦れてゐたお花が供をも連れず只だ一人忍びやかに駆け出したのであるから、天にも昇つた心地で飛び立つばかりに打ち喜び、何處へ行くか密つと忍び足に後を蹴けたが、お花は神ならぬ身のかゝる事のあらうとは夢にも知らず、程近きお高が住居なる茅屋の中に消え入つてしまつた。

これを不審に思つた九市は素早く裏手に廻り様子如何にと窺ふと内にはお花と主の老婆、それに今一人見た事のあるやうな若い男の三人、外にはもれねど互に密々の話聲、

「ウム……………。赤熊の乾兒だ。駒の野郎だ。糞面白くもねえ
今業平か何んだ。俺の先を越して彼の美しい娘を手に入れやがったの
だ……………」

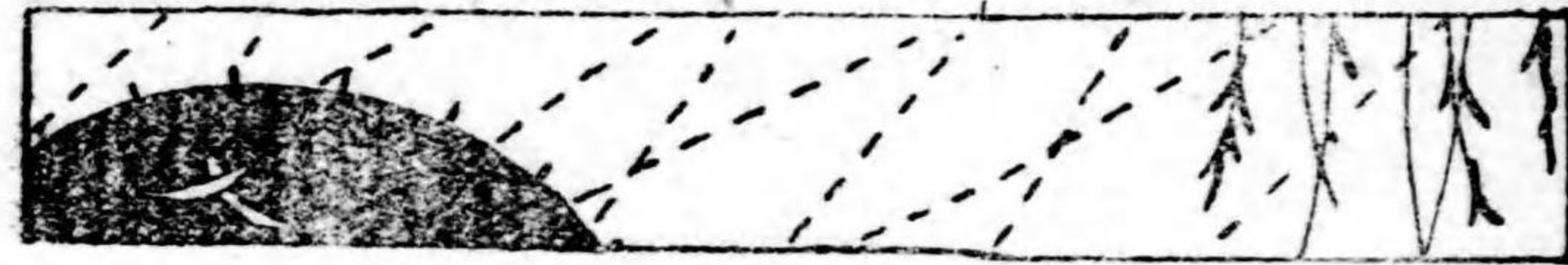
九市は節穴からのぞいて一人向ッ腹を立てゝゐた。

「駒さん。これはお願みのお土産です。思ふ程には行きませんが、今日
の處はこれで勘忍して下さいな。何分知れると後が面倒だから……………」

と莞爾笑つてお花が懐から取り出したのは一包の金であつた。

「オヤッーありや確に百兩包だ！駒の野郎旨へ事を爲やがるな。奴餘程
幸福者だ、美しい娘を手に入れた上に尙ほ金浸りとは、好い星の下に生
れやがった」

とひとり心に問ひ答へて大層羨しがつてゐる時、



「お兩人さん、御寛りとお樂みなさいよ。私は一寸買物に行つてまゐり
ますから……………」

老婆のお高は粹を利かして坐を外し、表口から何處ともなく立ち去り
後は楽しい二人の睦語、カッタなつた九市は心を決めて裏口より跳り入
り、

『不義者見付けた動くな』

と云ふより早く駒平の襟髪取つて押へるや手早く帯で縛り上げ、猿轡
まで食まして傍の方へ押し轉ばし、怖れおのゝくお花の手を執り、

「オイお娘、何も恐がる事は無いよ。俺は斯う見ても荒戸村の九市と
云つて黒髪親分の一の乾兒、極く優しい男だよ。男の口から云ふもちと
恥しいが、先般お汝を見初めてから、片時だにも忘れる事が出来無へで





繋ぎかねたる心の駒、駒の野郎に先手を打たれやうた、お釋迦様で無へ
俺にや夢にも知らなかつたよ。何時かノと附狙ひ、圖らず今夜の
尾と後追ひ來ればこの始末、未だ男知らぬ昔は兎もあれ、今ちや怖か
るめへよ。」

云ふより早くその場へ振ぢ伏せ、思ふ様なる落花狼籍の振舞ひ、お花
はたゞ無言の中に泣き入るばかりであつた

美女を殺害

お花の後を附け狙つてゐた九市は斯ふした人もなげなる亂暴狼籍の仕
度放題を盡してゐる最中、表の方にて不意の足音起り、お高婆奴が寢酒
の徳利を提げて歸つたが、斯様の始末に呆れ果て暫しは言葉なきまゝ見

つめてゐたが、九市はやをら立ち上り、

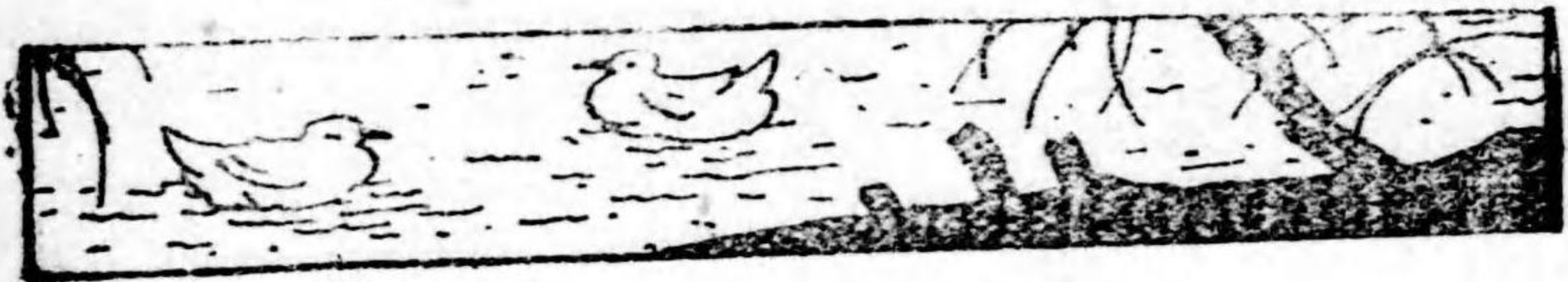
「ヤイ、この老婆婆、俺様の御愉快の妨げしやがるとこれだぞ！」

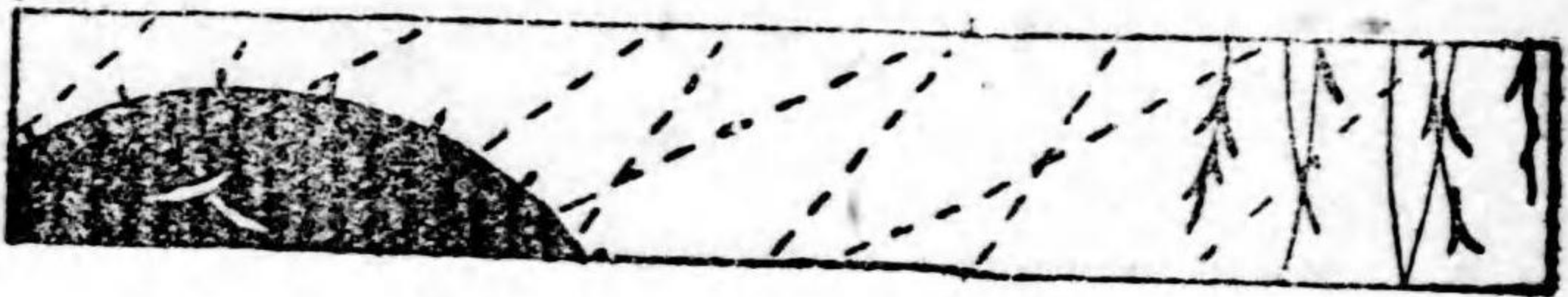
と云ひ様拳を固めてボンと打つたが、何を云ふにも五十人力の強力で
打たれたのだからたまらない。「アッ！」と云つたがこの世の名残り
で血反吐を吐いて何の苦もなく息絶へてしまつた。

實に慘忍苛酷の野郎ではあるが、九市も始めからお高を殺す心算では
なかつたので一時は可哀想と後悔もして見たが、

「エイまゝよ、毒食は、皿だ」

と悪心は益々増長し轉がして置いた駒平の懐中へ手を差入れ、つい今
の先きお花から貰つたばかりの百兩を奪ひ取り、家の其處此處を捜して
これもお花から貰ひ蓄めたらしいお高婆の臍線十五六兩をも己れの懐中





へねじこみ、一旦は表へ立ち出でたが、

「否、待てよ。駒の野郎は豫てより俺の顔を知つてゐる。そればかりでない、今お花に黒髪の乾兒で荒戸の九市と云つて聞かせた。このまゝちや今夜の事を奴等は代官へ訴へ、俺れに憂目を見せるは必定、お花は不憫な者ではあるが、今連れて逃げる事もならないこりや、寧ろその事に兩人共殺して……」

九市と云ふ奴はよくく惨忍極はまる奴で、男は戀敵だからまあいゝとしても、お花の方は豫て戀慕した女で、それをさんく淫んだ上殺してしまはうとは全く人道をはづれた極悪非道の鬼であつた。お花等二人も身から出た錆とは云ひながら、返へすくも可哀相な者であつた。九市が兩人を殺さうと決心すると、泣き臥してゐるお花の首筋、と縛



られて倒れてゐる駒平の袴髪をムンズと引ツつかみ、

「コラ、能く聞け、汝等二人はとてこの世ぢや添はれねわ奴等だ、それを不憫に思つて今俺様が引導を授けてやるから未來は目出度夫婦になつて仲よく暮らせ……」

と云つて可哀想にも兩人の咽喉笛を力に任かせてグツと一押し押しつけたが、何かはもつて堪るべき、大力無双の九市に斯くも強く押さへられたのであるから二人は七轉八倒悶へに悶へて間なく息を引き取つてしまった。この有様を疾と見濟した九市は別にそれを憐れとも何とも思はぬものか

「脆い奴等だ……」

と呟きながら野鼠くくと立ち出で種ヶ崎さして歸つてしまった。



その翌朝富右衛門の家では、早や日は中天高く昇つてゐるに今日に限つて娘のお花が一向に姿を見せないのので、主人の富右衛門は下女のお松にお花の様子を見にやつた。お松は障子の外から

「嬢さま、お起き遊ばせ。もうお日様が高うございますよ」

と聲をかけるが一向返事らしいものがなく、ハテは小首を傾げて怪しみながら密と障子を細目に開けると、是は乍麼如何に中は空蟬のもぬけの殻、お松は膽をつぶすまでに驚き、面相變へてこの由を主人夫婦に告げたからたまらない。家内は今更の如く上を下への大騒となつた。この時息せき切つて駆けて来たのはお高婆の隣に住む小作の爺で、爺はお高の家に起つた出来事を残らずつぶさに話し、事件は益々大騒動となつたが一方赤熊の五郎も急を聞いて駆けつけ、無惨や昨日に變る兩人の非業



の最期をまのあたりに見て男泣きに泣いて悲しみ

「持田の旦那、何うも何とも申様のない御愁傷でございます。是れなる男は確に俺しの乾兒で駒平と云ふものでございますが、今この有様から察しますと、たしかにお高婆の媒妁でお嬢様と密會してゐたものに相異ございません。ところへ強盜かさもなくば何か遺恨を含む奴か、押し入つて、斯かる始末に及んだ事でせう。然るにても三人ともに刃物一つ用ひず殺されたとは、こりや並々の人業でございませぬ。たしか力の勝れた男です。俺しも可愛い乾兒を殺られて口惜しございます。草の根を分小石を裏返してもきつと敵を尋ねて打ち取つてやらねば死んだ佛が可哀想です」

と云ひながら何か手索ともなるものはなからうかとあたりに心を配つ



て捜してゐると、上り框の處に財布が一個落ちてゐて、それは正しく駒平の物ではあるが、肝腎の金は一文もないのみか、封金の封じ紙のみ飛んで出たので、いよくお花と駒平が疾くより密通してゐて、お花は駒平に親の金を盗んで貰いでゐた事も知れて来た。

斯うなると盗賊は土地の勝手からお花等兩人の様子まで委しく知つてゐる男で、人に優れた力量の者に相違ないとは一般と一致した世評で忽ちその嫌疑は荒戸の九市の頭にかゝつて来た。九市の方でも世間が斯うした噂を立てると餘り寢覺めのよい感じもせず、何となく心の落ちつかぬまゝ、毎日に心を痛めてゐたが、その年の夏から老病の床に臥してゐた長藏親分は九月十五日に眠るが如き大往生に、型の如き葬も済ませると乾兒の一統は夫々分散して、九市も長藏の四十九日が済むと再び荒



戸村へ立ち歸り、頭を押へる者がなから相變らず賭博ばかりしてその日くを送り、駒平等から奪ひ取つた百二十兩近い金はまたく間に使ひ果してしまつた。

一方兄弟分の赤間の三吉は長藏親分が死るとすぐ廣瀬村へ行き赤熊五郎の身内となつて隨身し、伶俐に立ち働くところから非常に可愛がら

て、以前の駒平にも勝つた勢力となつた。

恰度十二月の始めの事であつた。五郎は三吉を供にして種ヶ崎へ出掛けたその歸り路に、とある小料理へ揚り對酌で四方八方の話をしながら快く飲である時、不圖お花の事が話に出て、三吉は一年前に九市と二人連れで長藏親分の代理で赤熊五郎のもとへ行つた歸りに起つた九市が戀慕の顛末を漏なく話すと、五郎はこれをちつと聞いて暫し思案に耽つ



てゐたが、やがて

「然うか。そりや華やかな話だなア。若い時や誰れしも一度や二度は必ずある事だ。だが、汝の云ふ九市と云ふのは種ヶ崎の賭場で亂暴した若い男で大力無双の奴と聞いてゐるが……」

「仰言る通り、滅法強い奴で何でも五十人力と云つてますよ」

「實に強い奴ぢやのう。時に此の頃はどうしてゐるか、汝へ知らねわか？」

云はれて三吉は暫く考へてゐたが

「俺ちも委しい事は聞かねわが何んでも近頃は可なり工面のいゝ方で遊んでゐるようです……」

と云ふのを五郎は皆まで云はさずグイと膝を進め

「汝へ黒髪が死なつてから俺について二心の無いのはよく知つてぬ。それに就て是非汝へに頼みたい事があるが、何と承知して貰へなからうか？」

と云ふのは一段の小聲であつた。

「親分、何んな用件か知りませんが、さう改まつたお言葉では恐れ入ります。俺しや親分に随いてから愛顧して下さる事は忘れはしませんよ。充分身に徹へてゐます。だからやくざなこの身體で出来る事なら何でも否とは申しません。何んな御用なりと云つておくんなさい」

と云ふのを聞いた五郎は大そう喜び、四邊の様子に心を配つて何事か密事を言ひ含め

「三吉抜かるなよ」





後は再び酒になつて二人が充分に酔つぱらつて歸つたのは早や夜も可なり更けた頃であつた。

欺かれて逐電

頼みに思ふ親分の黒髪長藏に死なれた九市は、一先づ故郷の荒戸村へ歸り、例の百餘兩の金を資本に博奕の明暮れを送り迎へてゐたが、限りある金では限なき遊びをいつまでもつゞける事が出来るものでもなく、いつしか元の木阿彌となつた上、尠からぬ借金までも背負ひ込み、果ては博奕の資本もなく空手になつて、母親のお浪が住み荒した小舎にたゞひとりつくねんと面白くない日を暮してゐた。

その内に十一月も過ぎて、堪へ難き極寒の十二月となつたが、ある日

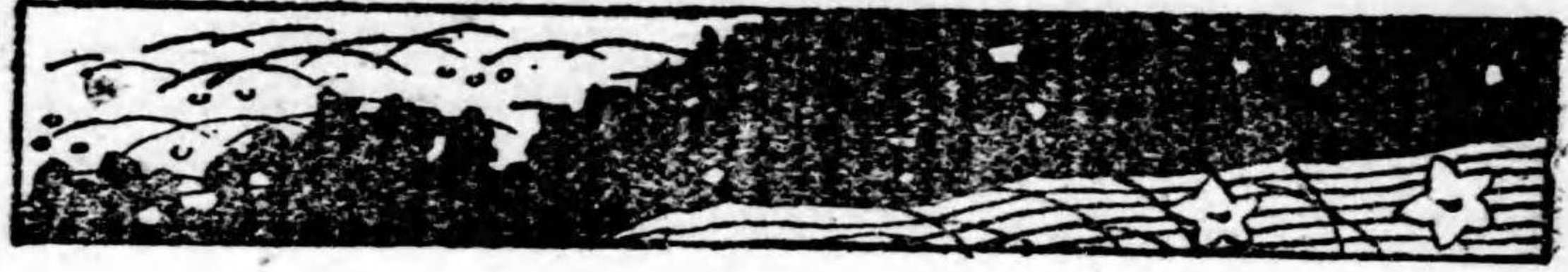


九市は茫乎として僅な焚火に漸く寒さを防いでゐる折り柄、ひよつくり荒家へ訊ねて來たのは赤間の三吉で、九市は思はざる珍客に一別以來の挨拶を交はし、やがて四方八方の世間話に入らうとする時三吉は小膝を進めて

「時に大哥、汝へ廣瀬村のお花が殺された事を知つてゐるか。此處からは八里近くもあるが一時は随分評判が高かつたからう。俺等も知つてゐる通り、大哥が強う熱心だつたから、玉なしになつちまつてお氣の毒千萬よ」

と何氣ない風でさぐりの一矢を放つた。

「エ、然うかい。そりや可哀想な事をした。俺アちつとも知らなかつた何だつて俺ア、頼みに思ふ親分に死なれて一時とちめんぼうを喰つてゐ



たのでのう」

これも極めて平気で我れ關せずな返事であつた。

「ウム、然うか。ところが大哥も知つてやうが、赤熊親分とこの駒平も一緒に殺られてゐたので、親分はごうかして警を取つてやりてねと八方手分して探索したが未だ手索りなくてのう……」

「ウム、そうだつたか？ あの美男子に美人が、それにしても何故同じ處で殺られたんだらう。大方密通つてやがつたのだらう根畜生奴！」

九市は一寸嫉妬らしい事を云つて表面の腹立たしさを見せた。

「さうよ。大哥の御推量通りさ」

「それや自業自得と云ふもんだらう。ところで何處で殺られたんだ」

「すぐ近くのお高つて云ふ心よくねね婆の家だよ。その婆さんも一緒に



に殺られてゐたが、殺つた奴は餘程力の強い奴と見せて三人を殺らすに及物一つ使つてなかつたよ」

「何の爲めに殺したんだい。盗賊かい、それとも戀の意趣かい？」

「その邊の事は、つきりしないが、何でも盗賊らしい遣口もあるはあるさうだよ。百兩餘り奪られてゐるらしいから」

「百兩？ 百兩？ 一體誰れが百兩も持つてゐたんだ。汝への話ぢや百兩も持つてゐさうな奴はゐねぢやねねか？」

「そりや譯があるんだ。早い話は娘のお花が駒が可愛さに親の金を盗んで貰いだ金と、婆がお花から絞取り取つた臍線りが大分あつたと云ふ事だよ」

「ウム！ 駒の奴よほご甘い汁を吸ふてゐやがつたなア……」



「マアそうらしいが、ところで迷惑なのは大哥だよ……」
「何んで俺が迷惑だ？」

「まア急ぎ込まないで話を聞いて呉れ。大哥の力が度はづれに優れてゐるだらう。だから迷惑になるんだよ。皆の奴等はごうも大哥の様子が怪しいつて。かう睨んで附け狙つてゐるよ。ほう大哥が此間中遊び廻つてゐたらう。あれが怪しまれる原因だよ……」

と云つて三吉は九市の顔色をちつと窺ふた。

「エツ！ そりや眞實か？ 迷惑だなア」

九市は如何にも急ぎ込んだ調子になつた。

「それでまア昨日赤熊の親分とお花の親爺さんが談合の上、今朝早く代官所へ恐れながらつて出たらしいよ。今にも此處へ捕吏が來るかも知れ



ないが、若し來たつて大哥に覺わがなけりや些とも恐れる事はねわのだから……併し萬一にも係りがあるやうだと打捨ちやア置けねわと、そこは以前の友達づくだ。俺アこつそり親分の目を忍んで飛んで來たのだ。三吉は如何にも眞事らしげに九市の心を搦手から喰ひ入つて來た。九市にしては係りどころの騒ぎでなく、眞正銘自分が犯した事であるから、冷りと胸に八寸釘でも打たれる思ひで忽ち顔色を變じた、がすぐ心を取り直して氣取られまいと笑ひに打ち消し

「そりやありがてへ。態々知らせて呉れた眞實はありがてねよ。しかし俺ア全く係りはねわのだ。何處へ出ても云ひ解くから安心して呉んな。夫れはそうとして、久し振の面會だ。何處かで一杯やらう。貧乏してゐても俺だ飲代位はごうともするよ……」



と云つて荐りに勧めたが三吉は今九市の味方でないからどうしても首を縦に振らず

「折角の志だが、大哥は然うはしてゐられぬへ、俺も一緒にゐちやよくなわから今日は預けて又来るよ。まあお壯健でろう……」

九市は種々に引き止めて見たが、三吉はどうも振り切つてそこへに歸つてしまつた。取り残された九市は腕こまねいて思案に耽つたが「ウム然うだ……」

と獨り心に點頭くと、慌しく身支度をして、行方は夫れと定めぬご足を早めて村外れに差しかゝつた。折りしも四五人の男が來かゝつて磨違つたと思ふ間もなく、隠し持つたる十手を振り上げ「九市御用だ、神妙にしろツ！」



と四方より打つてかゝつた。さてはど九市は身を開いて近寄る者を左右に投げ出し

「上意呼ばはり理不盡にふる。覺わなき身に何として繩打ち召さる」

聲も荒らかに捕手に向つて呼びかけたが、その詞のまだ終らざる中に三四十人近き人数がどかくと現はれ、蟻の這ひ出る隙もなきまでに取り圍み

「覺わなしとは言語同断、汝日外廣瀬村にて持田富右衛門の娘花を始め三人まで殺害なしたる上、多くの金子を奪ひ取つたる曲者、訴人によつて儘に知つたり、最早逃れられぬ處、速に繩にかゝれ！」

と八方から一時に打つてかゝた。群る捕手の中に仁王立となつた九市は、



欺かれて逐電

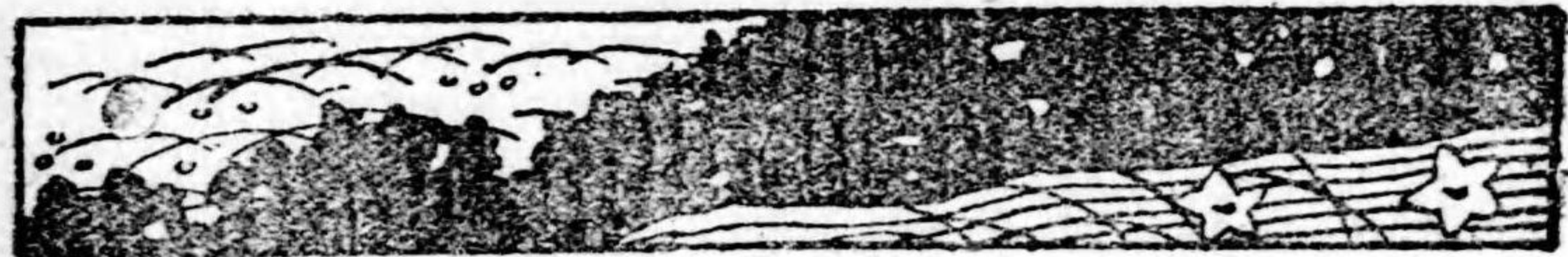
七〇

「斯く發覺るからは隠すも詮なき事、この上は汝等一人残らず冥途の道連れにして呉れる。ならば手柄に搦め取つて見よ」

と云ふより早く隠し持った七口抜く手も見せず、群る組子へ分け入り、當るを幸ひめつた突きに突き立て、とう／＼一方の血路を開き後白浪と逃げ去つてしまつた。

勢ひ鋭く突き立てられ、嵐に木の葉の散る如く八方へ逃げまどうた組子等は、眞の代官所の捕手ではなく、赤熊五郎が俄仕立に仕上げた偽せ者であるから誰れ一人として九市の跡を追ふて捕へやうとする者もなく九市に取つては眞に天の與へであつた。

赤熊五郎が何故に斯様な企みをしたかは、云ふまでもなく、三吉に密計を含めて九市の心を探らせ、いよく／＼と狙んだ上は乾兒駒平を始



め、お花、お高等の警を取つてやらうの考へであつたが、遺憾ながらもうまく／＼と取り逃がしてしまつたのであつた。

赤熊の悪計とは露知らず、兎にも角にも辛ふじて虎口を脱れた九市はそこから三里餘りの道を何れの方角とも定めないうまゝ直走に走つて、八幡越野と云ふところまで来て、やつと後振り返つて見たが、今は一人の追手も來ない様子にホッと一息つくつと、心の緩みと共に俄に空腹を覺え流石大膽不敵の曲者もこればかりにはとう／＼平口たれた。食を求めやうには果しなき曠野の事とて家などのあらふはずもなく、獨り心を勵まし星の明りを無二の頼依りに一歩一歩引づるやうに連んでゐる折りしも遙か彼方にあたつて火影がちらく／＼と見え、人の聲さわかすかに聞えて來た。偕ては人家があるわい、と大に喜び且つ勇み、一夜の宿を請はん

欺かれて逐電

七一

と足の痛みも打ち忘れて火に近づいて見ると、人家と思つたは相變らず曠野の中で、四五人の荒くれ男が焚火をしてゐる處であつた。丸市は案外に思つて一時は後へ引かうかとさへ思つたが、それでもずつと進み出で、

「私は遠國の旅人でございますが、同行に離れて難澁致し居ります。卒爾ながら火を一つ……」

と云つて用意の煙草入れを取り出しスバリ／＼と燻らしながら、

「こゝから旅籠のある處までは何の位の行程がございませうか、お聞かせに預りたうございます」

と云ふのを聞いた一人の男は點頭で、

「ウム、旅籠のある所は教へてやらう。だが、そのお禮に汝の所持品殘



らず置いて行かねばならねぞ」

と盜賊の本性を顯して迫つた。これが並の人間なら一縮に縮み上つて慄る／＼震へるところだが、何を云つても相手が丸市であるから、びくともせず、

「こりや面白い、弱味を見せりや宜い事にして、衣類所持品殘らず置いて行けたア片腹痛い、汝等云ふまでもなく盜だなア、盜棒なら盜棒らしく相手を見てよく物を吐せ、餘人ならばいざ知らず、この丸市様に限つて汝等に只だで物を與る事はまあいやだ。氣の毒ながら面でも洗つて出直して來い。ポツ／＼出掛けやうか……」

と行きかゝるを前後から引挾んで、

「何んだ、小二才奴、見損つたの面を洗へたアなんだ。小癩な事を吐





かすと命まで貰はにやならねぞ」

云ふより早く佩む山刀をズラリと抜き拂つて詰めかけた。九市はカラ
くと笑つて、

「それまでに欲しけりや姑く待て、汝等に與りてへ物がある」

と傍にあつた手頃の松の大木を根ごとし

「俺様の賜り物はこれだ、受取れるものなら受取つて見ろ」

云ふより早く小賊目蒐けて打ち下さんとした。小賊等は膽を潰すほど

に愕いて我れ先きに逃げ出さんとしたが、九市の勢におされてしまつ

て逃げる隙さへなく、一様に刀を投げ出してその場へ平伏し、

「どうかお待ち下さい。我々は眼があつても節穴同様、斯かる豪傑とは

夢露も知りませず、先刻よりの無禮至極、平にお許し下されい」



「御立腹はさることながら、何卒命ばかりはお助けを……」

と各々に泣面をして詫を入れる可笑さに、九市は思はずふき出しなが

ら、根ごきした松の大木を傍へ投げ捨て、

「それほどまでに云ふなら助けてやらう。だが只では助ける事が出来ね

ね、少々腹が空いてゐるから食物を持つて来い」

小賊は九市の云ふがまゝに自分が持つてゐた握飯を恭しく差し出す

と、九市はそれをほゞばりながら、尙ほも酒と肴を注文するなど、我儘

氣儘な飲み食してさも氣持よげに腹を撫で面相を和らげて、

「大きに御馳走だった。時に、汝等は此處へ出るのは何處から出たんだ

そして全體何處の山に棲をかまへてゐるんだ。又首領は何んと云ふ男だ

？」

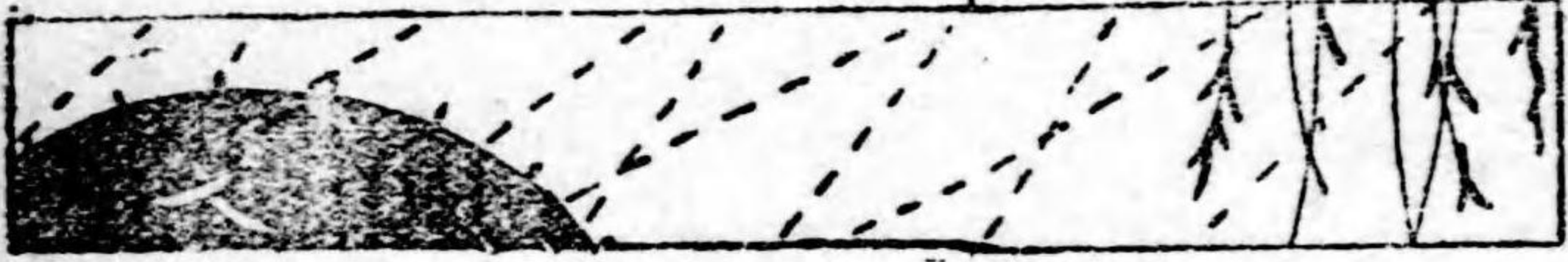


と問ひかけたが、小賊の面々互に顔と顔とを見合せ戦慄して答へかねてゐる様子を九市は早くも察し、

「汝等どうまで怖れる事はねえよ。かうして心易くなつたからは何も憚る事はあるめね、譯を話せ！ 事によつたら汝等に相談したい事もあるのだ」

かう利らかに話しかけると、小賊共もやつと安心したらしく中の一人が、

「左様ならば申します。私は素筑前の者ですが、博奕と酒と女に身を持ち崩し、遂には同じ仲間が五人心を協せて斯うした稼業を營んでゐるやすが、もとより頭もなければ鱭もない、眞の一致團結とでも云ふ者です。だが此の後は必ず心を改め決して悪事はいたしませんから何卒か今夜の



ところは御寛大にお見逃しの程願上げます」

と云つて陳謝平伏すると、他の四人もこれについてお慈悲〜と詫びを入れた。けれども九市は一時のがれに自分に敬ひ遠ざける心と思つたので、

「オイ、皆の衆、そんな下らね御説教はよしな。汝等がどのやうに改心しやうたつて所詮それは出来るものぢやねえよ。行るからにや太く短く男らしく行れ、些細の盗賊をして大切な笠の臺を飛ばすのは餘り上出来とは云へまい。どうだ、今日から俺に隨身して一時千萬と云ふ大物に手をかけ、濡手で粟を掴むことは嫌かどうだ」

小賊等は案に相違の相談に、何れも只憫れ返つて開いた口が塞がらぬと云つた案梅であつた。



「斯ふ云ふと汝等は自分等の心を引かれるものゝやうに思ふだらうが、俺は一旦云ひ出した事は後へ引かぬ氣象だ、吐いた唾は二度とは飲めねわや。今こそは何かも洗ひさらひ云つて聞かせてやるが、俺は長崎近在荒戸村の生れで漁師の九市と云ふ男だ。それが汝等と同じ、博奕と酒と女が三度の飯よりも好きサ、殊に女が好きで、色戀の出入から三人まで殺らしてしまつた俺だ」

と云つてお花等を殺した一件を残らず話して聞かせ、すぐ今から乾兒になれと云ひ出したが、これ聞いた一同は願つても無い事とすぐその夜から九市を首領に仰ぐ事を契つた。

今日明日の生命



圖らずも斯ふした事から九市を首領に仰ぐやうになると、取り敢ず今日はこのまゝ棲家へと云ふので、九市は小賊に案内されるまゝに草木を潜つて凡そ三十町餘りも行くど、同じ曠野の中央にと一軒の伏家がありそれが小賊等の棲家であつた。

「こゝが私共の棲家なんで……」

と云つて九市をすつと奥の上間へ通したが、賊の家にしては何れも立派なものばかりで、食物も酒も少しも不足なく皆盗み蓄へてあり、九市は大恐悦の態で、如何にも潜むには屈強の場所とすつかり安心して、その夜は主従固めの盃に酒を酌み交はせて夜を更かしてしまつた。

小賊等は九市と云ふ豪傑を首領に戴くと今までよりは一層向ふ意氣が強くなり、近郷近在の豪農は片端から押入り、金銀米穀は云ふに及ば



す、衣服家賊を手當り次第に奪ひ取り、機りに觸れては容貌よき女を掠奪り、棲家へ連れ歸つて己等の淫態を恣にしてゐたが九市が斯ふした事をするやうになつてから半年ばかり過ぎた寶曆十一年五月も餘程末の事であつた。ある夜平常の如く小賊を率ゐて盜棒の歸り、不圖過つていぢ川へすべり落ち、その翌日は風邪の氣味もあつて終日臥床に這入つたが、丁度真夜中と思ふ頃俄かに大熱が發し、早や息も絶えくの有様となつて小賊等は三四人の女共と共に種々手を盡して介抱したが、何分肝腎の藥が無いのでどうにも病氣を押へる事が出來ず、流石の盜棒等もこれには眞から閉口たれてしまつた。

この時九市は小賊の一人に密と云ひつけ、女等を残らず一間へ集め、若しこの中に優れた名醫の名と住所を知つてゐる者があれば速かに云へ



その醫者の力で首領の病氣が全治れば褒美に女共残らず家へ歸してやらう。とさも眞實らしく云ふので、女等は大いに喜んであれかこれかと取り沙汰した揚句、長崎の町に山井眞全と云ふ醫者のある事を話し、眞全は早や六十の坂を越した老人であるが、近在切ての名醫と云ふ事を云ひ加へた。

九市はすぐ山駕籠一挺仕立てさせ、手下等二人に駕籠を荷はせ、一番伶俐な一人を附添はせて長崎の町まで眞全を向へにやつたが、長崎の町へは漸く三里足らずの事として夜の明け切らない頃は早や眞全の門前に着き、慌しく門の戸を叩いて案内を乞ふた。

戸を叩かれた眞全はまさか野中の大盜賊が向へに來たとも思はなかつたのですぐに戸を開き、



「何方からですか？」

「私や飯田村の西田でございますが、只今主人が四苦八苦の苦しみをし
て居りますので、是非先生の御治療を仰ぎたいと存じ、お迎への駕籠ま
で要意してまわりました。何卒直ぐお見舞を……」

と非常に急ぎ込んだ調子で云ふと、眞全は何の疑ふ様子もなく、

「飯田村の西田さんなら庄屋さんだつたね」

と云つてすぐ様娘のお絹に云ひつけ、身支度もそくくにして迎への
駕籠に、手代に化けた小賊はお絹の手から薬箱を受け取つて背負ひ、ト
ン／＼と駕籠を急がせ朝霧の中を駆け出したが、僅か一里足らずの
飯田村へ行くのはなかく急な事ではなく、眞全は不案にとらはれながら
ちつと思案に更けてゐた。



間もなく駕籠を下され、たれをとつて見ると西田とはとつてもつかぬ
草茫々たる野原の眞中で、いぶせく建てる伏家の軒であつた。

「先生の御不審は御道理でございますが、之れには深い仔細のある事で
實は我々の主人と云ふは、或るやん事なきお方で、これは只ほんの假住
居、眞に浮世を偲ぶ譯で明白には申上げかねますところから、わざと飯
田村の西田と名乗つて是れへお迎へ申した次第でございます。何は兎も
角話は二段として病人を助けるは醫者の御商業、何卒一應御診察下さる
やうひとへに願ひ申し上げます」

と極めて慇懃に述べて奥の一間へ誘ひ入れた。眞全は取り敢ず病人は
と見ると、未だ二十になるやならずの若い男が、顔色を土の如くにして
苦しんでゐるので、醫者の役目としてそれを見捨てる事もならず、直ぐ診



察をすると、風邪の重いので熱さへ下れば容易に治る病氣である事がわかり、早速薬を調合して渡すと、手代風の男はそれを押し戴き、直他の者に煎じる事を命じ、自分は真全を別の室に案内して山海の珍味を所せまきまでに並べ立て、酒を勧めて心から饗應すと、真全はそらろに薄氣味の悪さを感じたが、何しろ朝から何も食べてゐないのみならず、日頃酒は大好物と來てゐるから

「然らば」

と云ふので充分に飲み食ひして腹を拵へ、いざ歸らうと云ふ段になると賊の一人は頭を擧へすりつけるやうにして

「先生の御歸宅をお急ぎになるは御道理でございます。斯ふした見知らぬ土地、しかも方角さへも知れぬ處で、かうした譯の分らぬ男ばかり寄



り合つた家ではさぞお心持も悪ふございませうが、決して御心配遊ばす程の人物でもございませぬ。まして主人が只今の容態で我々共一同不安に堪へませねば、何卒全快いたしますまで是非に御逗留下さいまして一命をお救ひ下さいますやうひとへに願ひ申上ります。就きましては失禮ながら御禮は何程と仰せられましても決して否とは申しませぬ』

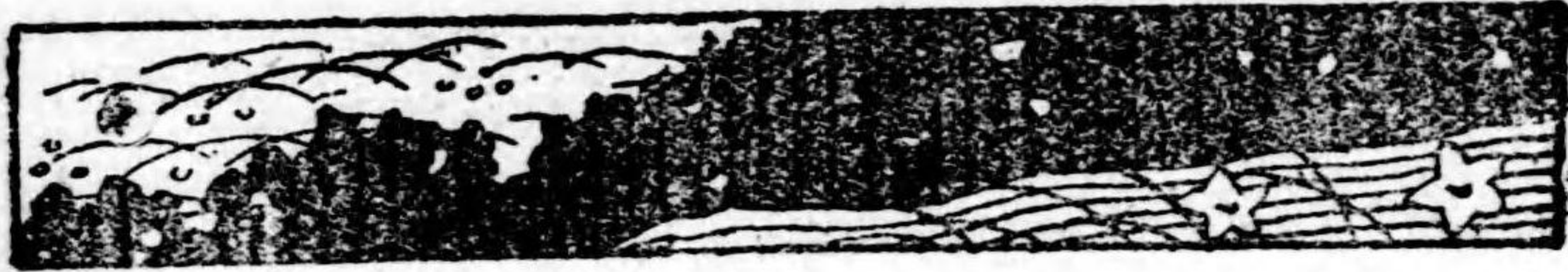
と只管頼みますので、真全も今更それを拒んだところで快よく返して呉れる譯のものでもなく、見たところどうも只だの人間共の家とは思はれず、家は獨木普請の素人細工であるに引きかへ、食器から四邊りの小道具などの立派な事は愕くばかりで、大方近頃近郷近社を荒す盜棒共の棲家で病人と云ふのは首領であらうと察したところから、若し逆らつて一命を奪られてはたつた一人の娘が可哀想と、きつと決心して



「然様ならばお言葉に従ひませう。ところで愚老にはたつた一人の娘があつて、まだやつと十三になつたばかりで、嘸ぞ待ちわび心配してゐる事でございます。たゞそれのみが気がりでなりませぬ。……さて今朝早く起きたまゝ、殊に御酒を頂戴いたした事とて睡くて堪へられませぬ。失禮ながら御免蒙つてしばらく目を休ませて貰ひませう。どうかお枕を……」

真全も心を決すると少しも恐しいと思ふ者がないので、かう云ふとごろりとその場へ横になり、小賊が持つて来る枕をあてるとグウ／＼高懸で寝ころんでしまつた。

斯くて後は毎日心を籠め、手を盡して九市の治療を怠らなかつた甲斐あつて、六月の末には九市は全く舊の身體に還つたから、性根こそ無頼



の悪黨ではあるが、人の性は着なりとか稱つて、真全の好意を人一倍喜んで感謝し、數多の禮物を賜つたが、真全非常な固造で餘分の禮は一厘も受けず、娘が淋しく待つてゐるから病氣が全快した上は一日も早く我が家へ返して呉れと切に頼むので、九市は賊ながらも大層氣の毒が「御心中はよくお察し申します。長々御厄介でしたが、明日は早く御送り致します。今晚は御禮やらお別れの印までに御ゆりと御酒でも召上つてお寢み下さい」

と云つてあらん限りの美味を並べ、盛な酒宴に夜を更かし、九市は病後の事で早く寢についたが、真全も小賊も殆んど酔ひつづぶれてその場へごろりと寢入つてしまつた。

夜は次第に更けて草木も眠る丑滿の頃とも覺しき頃、真全が現寢をし



てゐる隣りの境になつた障子がスーと音もなく開いて、十七八の澁皮剝けた一人の女が密つと恐び込み、グツスリ寝込んだ真全の枕邊に坐り込み、

「真全様、真全様」

とあたりをはゞかる小聲で遙り起した。充分酩酊していゝ氣持で寝てゐた真全がふと眼を醒して見ると、髪も散亂に色蒼めた若い女が、袖で面を覆ひ、よゝと泣きながらつくねんと坐つてゐるので、流石の真全もお化にでも出逢つたやうに思つて一時はギョツとしたがちつとよく眼をすねて見るとどうやら見た事のある女

「オヤツ！ お前はお光ぢやないか？ この春隣村へ行かれて歸つて来ないとか云ふ事を聞いてゐたが、此處にゐるとは全體どう云ふ譯だ？」



小聲ながらも膝すり寄せて聞くと、女は涙ながらにこの春用達で隣村の親戚へ行つたその歸りに、三四人の怪しい男が前後から取り巻き、ギリと光る長い刀を眼の前へつきつけ、中の一人が猿轡を食ますと寄つてたかつてこの隠れ家へかつぎ込まれ、その夜からして首領の閨の伽を爲られ、辛い月日を送つてゐる事を話し、自分と同じやうな運命にとらはれてゐる者が他にも四五人ありそれ等の人は何れも娘か若い人妻で、皆一様に親や夫を慕つてゐるが籠の鳥で身動きもならず、よし首領が留守の時も手下の小賊が嚴重な張番をして少しも遁れる隙のないやうにしてゐる事をもつけ加へて話し、此の間搦はれた女の如きは首領の不在を見はからつて逃げ出したが、何を云つても方角さへも知れぬ曠野の中々走りつゞけたその甲斐もなく、再び小賊に擒へられて引き戻されたが、



今日明日の生命

九〇

首領の命令によつて情け用捨もあらばこそいやがるを無理無體に裸體にし、手捕り手捕り無慘にも交るゝの淫樂物とし、女は遂に悲鳴を揚げてその場で息絶わした時の恐しさをもつぶさに物語り、それを思ふと逃げ出す事もなにかねるから今は神佛の加護を一途に願つてゐる。ところが今度首領が思はぬ病氣をして、若しよい醫者を教へて首領の病氣が首尾よく全快すれば、その褒美として一同を返して呉れる約束になつてゐる。今日は首領の本服祝に酒飲すとの事に、いよく明日は逃がされることゝ喜んだのもつかの間で、自分等は明日の夜から再びいやなお閨のお御をせねばならぬ事になつてゐる。それが悲しくてならぬが右や左云つては生命にもかゝはる事なれば、この上は町へ歸れば今の身の上を兩親に告げ、代官所へ訴つてなりと、一日も早くこの苦難を免れる事の出来る



やうに言傳て呉れど、泪ながらに物語るを残らず聞いた眞全は

「さてもゝ惨酷しい事をいたすのう。それはさぞゝ口惜しからう。

お頼みは確に承知した。こゝに寛坐は悪からう疾く居間へ歸られよ」

と云つて泣沈むお光を居間へ歸し、只管夜の明けるを待つ内早や東雲

の空には曉の雲が現れ、明鴉の時放れる啼音さへ聞けて來た。

間もなく駕籠の用意も具ひ、九市もそれへ出て低頭平身あらん限りの

謝辭をのべ、眞全は然らばと暇氣の挨拶をしてゆらりと駕籠に乗らんと

する時、先の小賊が傍へより

「先生、暫く御窮屈でございませうが、本街道へ出るまでは此の手拭を

かうして置いて下さいまし」

と云ひつゝ眞全の眼を覆ひ確と結んで駕籠に乗せ、垂を下したその上



から尙ほ布を八重九重に巻きつけて

「先生暫く御辛棒を」

と云ふや駕籠はクルリ／＼と幾回ともなく廻轉させられ、ヤツとの掛け聲と共に風のやうに駆け出し、一刻餘りも経つたと思ふ頃漸く駕籠を下され

「先生御窮屈でございましたらう。此處は八幡越の街道で……」

と云つて目の覆ひを取り

「お薬箱は昨晚お宅へお届けして置きましたから此處でお別れ申します種々と御厄介でございました」

と云ひ捨て三人の小賊は背丈にも餘る叢の中へ姿を隠してしまつた。



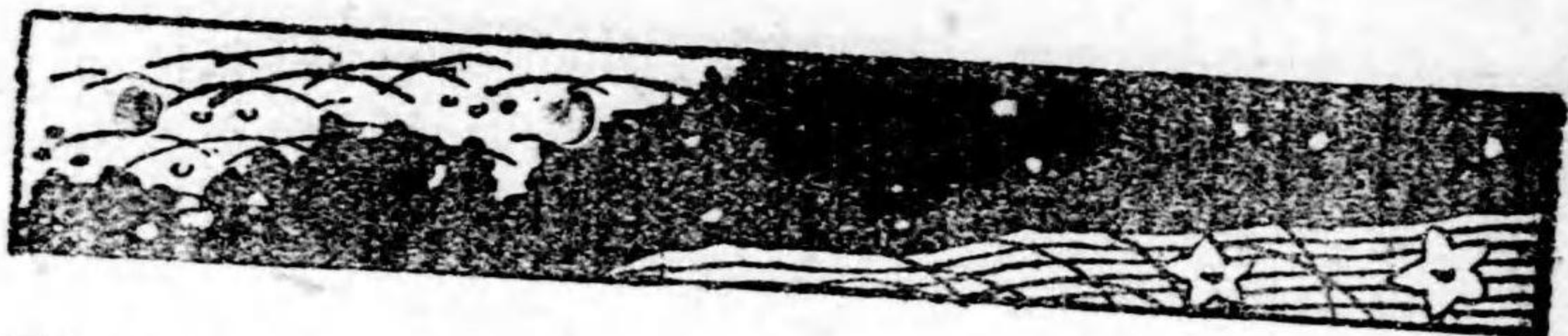
眞全はホットト吐息をついて四邊を見廻したが、駕籠を廻されてゐたので賊の棲家は何處にあるのか少しも見當がとれなかつた。

小賊の失敗から足

八幡越の街道まで送り出された眞全は足を早めて間もなく我が家の門口に立つと、娘のお絹が素早飛び出し

「オー、お父さん……」

と云つて嬉しさの餘り父の首にすがりついて泣いた。その娘より慈愛の父はこれほど娘の身が氣にかゝつてゐた事だらう。老の目に玉のやうな嬉涙を浮べながら、力かぎりに抱き締め互に嬉派に掻き暮れてゐた。



小賊の失敗から足

斯くて慈愛の親子は互に別れて以來の物語りを交したが、娘のするな
 が物語りによつて極悪非道の九市等も、一命を救はれた醫者へは充分心
 を注ぎ、人間らしい事をしたことを流石にも感せずにはゐられなかつ
 た。如何に曇つた鏡も何處か一ところは必ず光るもので、九市は自分が
 眞全に世話になるその間、小賊に云ひつけ蔭になり日向になつて娘のお
 絹に不自由のないやうにし、眞全が連れられて行つたその夜わざ／＼使
 ひをよこし、飯田村の西田と云つたは全く偽り言で、浮世を偲ぶる方
 の假寓へ迎へてゐて、主人の病氣が全快するまでは都合で歸る事が出来
 ないが決して御心配なさるな、それにこれは當座のお手當にと、大枚十
 兩を出して置いた事、その後も折々見舞に來た事などから、前夜下男と
 云ふ男が藥箱と三十兩持つて來た事なども分り、何は兎も角互に無事



であつた事を抱き合つて心から喜んだ。

こんな事から眞全は賊ながらも義理人情を知つた相手の心根が氣の毒
 になり、お光の父親に言傳へては自分が忽ち義理知らず人情知らずとな
 らねばならぬ。と云つてお光との約束を果さねばならぬ板挾の身となつ
 て暫くあれよこれよと途迷ふたが、遂に意を決してお光の言傳を反古に
 する事にした。と云ふのは、自分がお光の親にこの事を傳へる時は、お
 光の親の治兵衛はすぐこの事を訴へて出るは必定で、そうなるも賊はい
 やでも捕へられねばならぬ。ところが自分は賊に對して別に恨みと云ふ
 ものではないのみならず、自分の留守中行届た手當をして呉れてあるのみ
 ならず、遇分の謝禮まで受けてゐる。それまでにして呉れてゐる者の惡
 事を發くは餘りに本意ない致し方である。しかし、お光を救つて悪人を

小賊の失敗から足



除くは仁の道ではあるが、それで義が欠けるところから、かう決心したものの、道にその後は鬱々として心苦しい日がつづいてゐた。それから餘り間の無いある日の夕近き頃であつた。漸く十三のお絹がつくる手料理の肴に眞全は舌鼓を打ちながら楽しい晩酌を傾けてゐる折りしも、案内もなく奥の座敷へ亂入した四五人の捕吏、手にく十手麻繩振りかざし「御説々々」と云ふより早く眞全を高手小手に縛り上げ、物をも云はさず引き上げて行かうとした。この有様に打ち驚いたお絹はあはやとばかりに走り出し、捕吏の袖に絶りつき

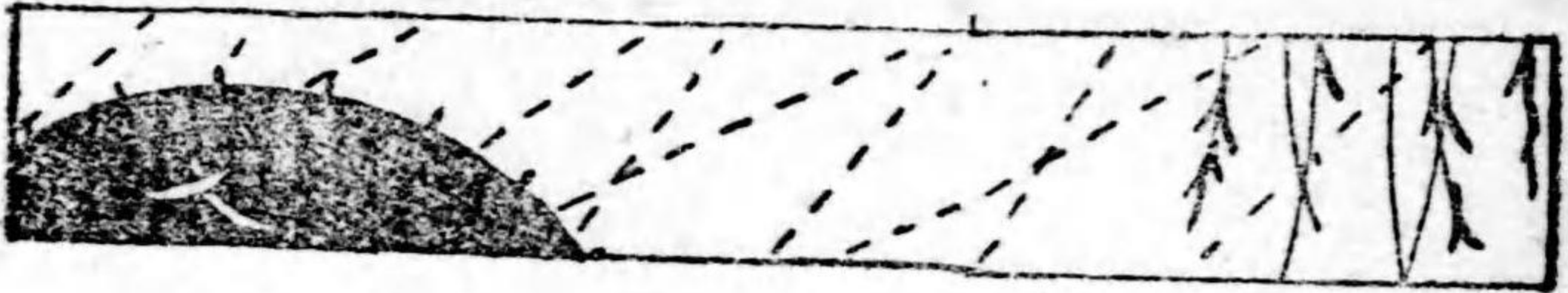
「御役人様、何故に父をお召捕りになります。父は然様な者ではございません。必ずこれは人違でございませう。御役人様、どうぞお免しなされて下さいませ」



とおろくくと涙を瀧のやうに流して願つたが、捕手は情も涙もなきものか、お絹がとらへた袖を打ち拂つていつかな聞き入れやう様子もなく「我々は苟にも上の御用を勤めるもの、罪なき者を縛りはせぬ、邪魔をするな下りおれ！」

と云つて呵りつけ、そのまゝ眞全は役所へ引かれてしまつた。後に取り残されたお絹は狂氣の如くになつて、こりやごうしたらよからうぞ、あら悲しやと身も世もあらず歎き悲んでゐたが、やがてきつと心を勵まし、何は兎もあれ事の實否を糺さんと、すぐその足で土地の庄屋丸持仁右衛門の許へ駆けつけた。

庄屋の仁右衛門と云ふは非常に義氣に富んだ男で、老人ながらも義のためには決して屈せぬ氣性を持ち、土地の者からはその人望の高さを



ながら親につかへる如くに慕はれてゐた。

この庄屋仁右衛門の話によると、近頃近郷近在を荒す九市とか云ふ強賊の小賊に阿呆の茂八と云ふ者があつて、此奴が飯田村の庄屋西田の家へ忍び込み、捕へられての白状から、眞全が九市と云ふ賊の首領の病氣を治してやつた事が露見し、それ故眞全に疑がかつて捕へられたがもごより眞全は潔白な男であるから筋さへ通れば永く牢屋に止めをかける事もあるまい。自分も精々お上へ歎願して、片時も早く罪を赦されるやう取計つてやらうと親切に云ふのであつた。

それにしても眞全の氣が餘りに弱すぎた。始めにお光の言傳を守り、九市等一味の隠家を有體に訴へて置けばよかつたものを、僅かな義理につまされ人情に溺まれての事がこゝに及んだもので、實に氣の毒千萬な



事であつた。

何しろ賊と云ふ奴はなか／＼義に堅い奴等で、たとへ自分一人が召捕られるやうな事があつても、それは單に自分だけの罪として決して他へ及ぼす事もなく、なか／＼悉皆白状するものではないが、阿呆の茂八はその名の通り、根が少々足りない男で、役人等の吟味にあつても最初は通り一片の隠し立はしたものの、厳しく責める拷問には流石に堪へる意氣地もなく、九市の事は云ふに及ばず、一賊六人の隠れ家八幡越野の顛末から、眞全等に關はる事まで逐一白状に及び、それが因となつて先づ手近な眞全から召捕られ、いよく八幡越野の隠家をも襲ひ、一人残さず召捕る手筈となつたのであつた。

一方九市の方では阿呆の茂八が單身稼ぎに飛び出したまゝ、二日二夜

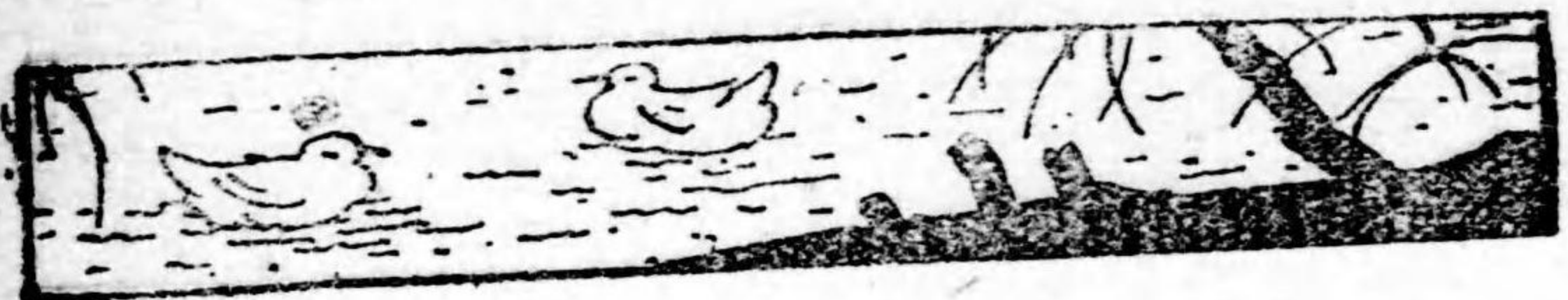


小賊の失敗から足

一〇〇

と云ふもの歸つて來ないを不審がり、一賊集めて前後の評議眞最中、阿呆の茂八が案内役で、郡代下役高坂松之進三十餘人の組子を引き具し、眞晝中九市の隠家を襲ひ、裏と表の兩口より「御誼御誼」と呼ばはりながら、一度にドツと踏込むや、不意を打たれた九市等一味、これはどばかり狼狽する暇もあらばこそ、忽ち小賊は召捕られ、後に残るは九市一人、されど九市は前にも云つた如く五十人力の怪力に劍道は眞影流の奥儀皆傳の腕前とて、高が組子の三十人束になつてかゝつたとて及びさうな筈もなく、叩り飛ばし蹴り飛ばし、またゝく中に五六人は眼玉を飛び出し血反吐を吐いて無慘やその場へ倒れてしまつた。

猛虎は血を見て猛るとか、阿修羅の如くに狂ひ立つたる九市の奴、血を見て何と逆上したか、用意の強刀抜く手も見せず、群る捕吏の中へ斬



つて入り、漸く一方の血路を開くと、豫て勝手知つたる脱路から、背丈に餘る叢押し分け、役人等の喚き叫ぶ聲には耳をもかさず、何處ともなく姿を消してしまつた。

この態を見た高坂松之進は齒齧をして悔んだが既に事及ばず、詮方なきま、棲家の金銀米穀を取り出して焼き拂ひ、九市に捕はれた五人の女はそれ／＼實家へ返し、小賊等五人は獄門の刑に處せられすつかり事は落着となつたが、こゝに憐れを止めたは山井眞全その人の身上である。

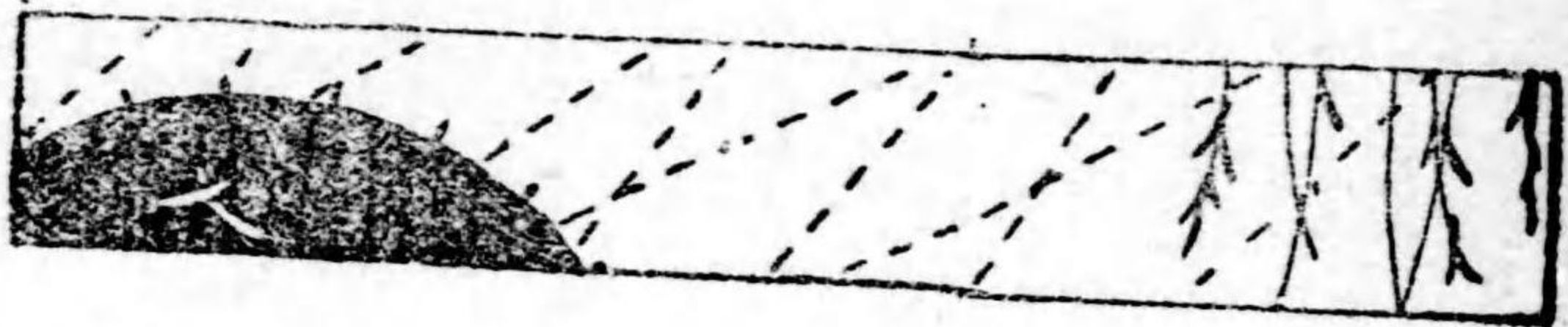
お絹の危難

實に可哀想なは眞全の身の上で、眞全は之れぞと云ふ悪事した事もなく、單に賊の家から歸つて訴へなかつた罪のみなるに、十日過ぎ二十、

小賊の失敗から足

日經ち、一月経いても尙ほ放免されなかつた。と云ふのは、先きに九市に捕へられてゐたお光の父慾兵衛は氣のよくない奴で、娘のお光が役人等の手によつて歸されるや始終の話を聞き、眞全が言傳せなかつた事を深く根に持つて恨み、仇を報ふはこの時とばかり、親娘が互の相談づくで、遂に眞全を讒訴して出たのであつた。

ところが郡代ではお光親娘が訴へて出た、眞全は早くから九市等と氣脈を通じ、金のありさうな家を九市に報告し、九市は眞全の報告によつて稼をしてゐたと云ふ根も葉なき偽言を眞に受け、日に日に眞全を拷問して責めるが、素より身に寸毫も覺わなき眞全は白狀のしやうもなく日毎に重なる責折檻入牢以來四十餘日を數へた九月の下旬、可愛い一人娘に後髪引かるゝ思ひを殘し、吹く秋風の誘ふまゝ、憐れ無慘や六十路を

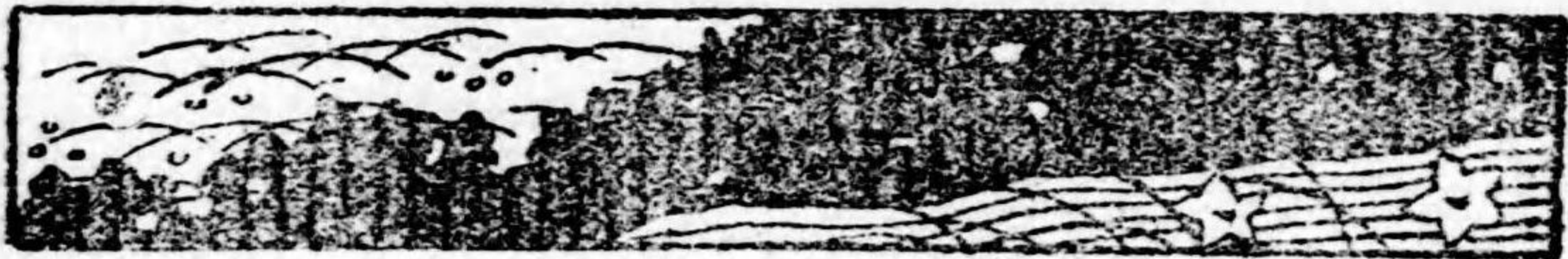


越した老軀を冷めたき牢舎の中より黄泉の國へと旅立つた。

けれども幸ひな事にはお絹はまだやつと十三の數へ年の事とて、父の死骸を引き渡されて後はおかまひなしと云ひ渡された。ところがお絹は勝氣にも、

「御役人様へ申し上げます。父が斯かる牢死を遂げねばならぬ運命に立ち至りましたも、もどを糺せば慾兵衛父娘が跡形もなき讒言をお上へ申し上げた故この事、風の使りに聞きました。若しそれに相違なくば、せめて父の悪名を雪ぎたい存じます。どうぞ確と御吟味お願ひ申し上げます」

と瀧なす涙と共に歎願したが、左様な事にはおかまひなく、強ての事に下げてしまつた。お絹は口惜しいとも無念とも心の遣る方さへなく、





お絹の危難

若し男ならば慾兵衛親娘を斬つて捨てやうものをとさへ歎き悔むもおつかず、涙を吞んで型ばかりの野邊の送りを營んだ、村中で寄つて集つてこの孝女を憐み、その後は萬事不自由のなきまでに世話をする事を云合つて慰めた。

ところが飽まで心の振けた慾兵衛父娘はこの様を妬み、尙ほもお絹を苦しめんものと、又悪計を廻らして、師走早や中旬近き寒夜の事、密かに悪漢を味方に引き入れ、慾兵衛父娘三人、何れも異形の打扮でお絹の家へ忍び入り、臥したるお絹の上に跨がり聲立てさせぬ猿轡、有り會ふ帯で高手小手に縛り上げ、三人均しく家探して、金子はもとより衣類まで大風呂敷に包み入れ、揚句の果てはお絹を小脇に搥込んで、何れも雲を霞と立ち去つた。



十四五丁も駆けてとある森の中へ入り、軒の傾く辻堂の前へ來ると、お絹を堂の縁へ下し、三人一緒に假面を脱ぎ捨てたが、十日餘りの寒月に、お絹は怪人の顔を透して見ると、疑がう形なき慾兵衛父娘は今一人の荒くれ男、お絹は再び驚き且つ呆れてゐる矢先、慾兵衛はお絹に向つて、

「ヤイ女郎、能く聞け、汝の爺の眞全は、賊の棲家を出る時に、娘のお光が呉れくも頼んで置いたその事を、少しも俺れに告げないで、打捨つて置たる返報に、お光と俺が談合づく、首尾よく牢死をさせてやつたのみならず、差入れに頼んでよこした大枚小判三十兩、途中で俺が頂戴したよ。ところが今の奴輩等は、憎い汝に情をかけて何呉れの世話介抱それを見るのが忌々しさに、又娘等と相談して、汝をこゝまで連れ出し

お絹の危難



たのさ、サアこれから馬關なり博多なり、憂川竹の流れに沈め、此の世からなる地獄の苦しみ、受けるも親の悪報と、俺等を恨まず観念してその身の罪を亡ぼせよ」

と小娘と見かけて飽までも悪口雑言、お絹は口惜さに舌の根かみ切り死なうものと思へども、食まされた猿轡に邪魔立せられ、手足の自由もならぬまゝ、只涙に暮れて悶々苦しむその傍で、早や三人は奪んだ品の分配事、一時は少の争ひもあつたが、どうにかそれもけりがつき、いざ立ち去らうとするその折りしも、思ひもよらぬ辻堂の中よりいと鋭き男の聲、

「三吉待てッ！ 慾兵衛お光も暫く待てッ！」

と呼ばはりながら現はれ出でしは雲つくばかりの大男、三人一時にギ



ヨツとして恐々ながら様子を見ると、これぞ別人ならず荒戸の九市、お光は素早く逃げ出さうとするを、そうはさせじと九市は矢庭に取つて押へ、手早く腕を捻ぢ上げ膝に敷いたが、この態を見た慾兵衛は大いに立腹し、

「ヤイ、娘を捉へて何んとする」

と云ひ様飛びかゝらうとするを九市は透さず腕を伸べてボンと突いたる手練の早術、呀とさけぶひまもなく、當身を食つて息絶わてしまつた「三吉久し振りだ、汝に少々聞きてへ事があり、また言ひてへ事あるまア、此方へ來ね。處でその娘御は、俺に取つては少々由縁のある者繩を解いて連れて來い」

云はれた三吉は一すムツとしたが、何を云ふにも相手は九市、迂濶に



逃げも隠れもならず、と云つて手向ひは尙更禁物、云はれるがまゝに繩を解き、猿轡をはづして九市の所へ連れ出したが、九市はお絹を縛つてあつた繩を取つて膝に敷いたお光を縛り、傍の木の根へ結びつけ、

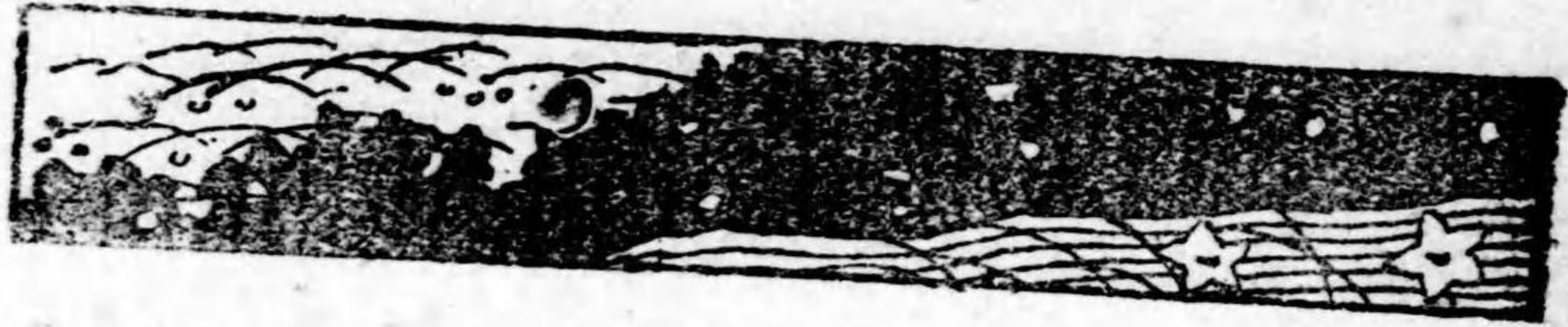
「三吉、去年の暮にや親切に、態々出かけてよく知らせて呉れた。その時覺わがねへと云つたあみな嘘だ。お花を始め、駒の野郎を殺らしたはこの俺だよ。後では俺も無益の事をしたものと一時はそれでも悔んだが過去つた事は詮方がねへ、だが誰れも知るめへと思つたに、俺や汝の知らせを受けた時にや驚いたよ」

かう云つて話してから、高飛びしやうとして村はづれで捕吏に出遇ひ漸くそこを斬り脱け、四五人の小賊に出遭つてこれを麾下につけ、八幡越野の隠家に半年餘りを暮し、遂に捕吏に出遭つたことを語り、醫者の



眞全には世話になつて、返つて眞全を苦しめ濟ないくと思つてゐた事から、眞全を苦しめた奴のあるを知つて、其奴を捜し打ち殺し、又一つには麾下等の怨みも晴してやらうと、この辻堂を棲家として時節の來るのを待つてゐた事までも洩れなく語り、今夜かうして仇を見つけたのも全く天の與へ、此奴等二人は云ふに及ばず、事によつては兄弟分であつた汝をも殺らして仇を報ひねばならぬときつとなつて云ふと、三吉冷りと冷汗流し、自分は全くこの事件には關係なく、賭博友達であつた慾兵衛がこれくと云つた今夜の相談に乗つたまでの事であると話して説を入れ、元は友達だが、これからは麾下になつてみつちりと働きていと云ふと、聞いた九市は非常に喜び、

「俺も大方そこの事と思つたよ。それはそれで綺麗さつぱり事濟んだ



お絹の危難

俺も汝の助けがありやあ、龍に翹か鬼に鐵棒だ、これから方々へ出掛け
て野武士の奴等を味方に引き入れ、太く短く面白可笑しくみつちり働か
うせ、だがそれはそれとして、こゝにゐる慾兵衛とお光、此奴は取りも
直さず真全さんの仇敵だ。幸ひこゝには娘のお絹さんも居る俺等が助太
刀格で殺してしまひね。此奴があつては後日の妨だ。そうすりやお絹
さんを送り届けても安心が出来ると云ふものだ、俺等も枕を高く寝られ
る譯……」

と云ふから三吉はすぐそれと承知して、用意の七首を取り出し、先の
味方は今の敵、倒れてゐる慾兵衛の胸元今しも刺こんとする氣配、慾兵
衛も一時は當身、食つて倒れてゐたが、疾に息吹き返して二人の永物語
を聞いてゐたが、今しも三吉が七首を抜かうとするから、こりや堪らん



と身を起し、一目散に逃げやうとするを、早くも九市は引つ捕へ、襟髪
取つて引づり返へし、

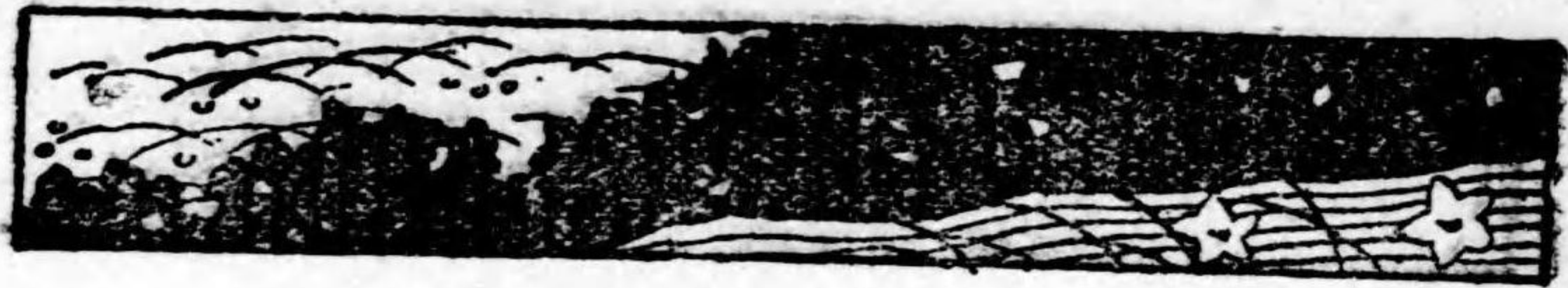
「お娘御ぢやない、お絹さん。此奴がお前さんの父御の仇敵だ。今お前
さんを苦しめたも此奴の仕業だ。さア、これで一突きついておやりな」

と云つて九市はお絹に短刀を持たすが、お絹は娘だけに慄々として突
き殺すほどの勇氣がなかつた。

「エ、ツ、困つた娘御だのう。三吉斯ふして呉んな」

と云つて慾兵衛を三吉に確と捕へさせ、九市自身はお絹の手に短刀を
握らせ自分の介添となつて、ブツツリ慾兵衛の脇腹目蒐けて突き立て、
續いて止めの一刺、この有様に胴顛して驚いてゐるお光は、

「首領、ま、まつてお呉んなさい。妾に罪があつたとて、妾は豫てお前



お絹の危難

一一二

さんの馴染、身まで任せたお光だと思ひ出し、どうぞ命はお助け……」
とオイ／＼泣きながら詫びるを九市は冷笑ひ、

「へッへッへ、大それた旨く云やがるね。汝のやうな悪黨女を生けて置
ちやお絹の不爲めだ。又俺等にも恨があらア。俺の爲めにも生けては置
けねわ、とてもこの世に居られねわものと觀念し俺れの引導受けて斃ば
つちまへ」

と云ふとお光はさも恨めし氣に九市を睨みつけ、

「オ、よう云ふた。殺すなら殺してしまへ、大悪黨奴！ 例へこの身は
死ぬるとも、一念はこの世に残り、今に思ひ知らせて呉れるぞ」

と云つた時の顔は慄とするほどの怖しさであつたが、九市は少しも怖
れ色もなく、



「ウム、幽霊になり蛇になりと、汝の好きな者になり、たるほど怨を晴
して見るがい」

と云つて何の苦もなく只一刀に首を打ち落して刀の血を拭ひ、

「オイ三吉、汝その包を背負つて來い。俺はお絹さんを送るから」

と、そわ／＼してゐるお絹を劬りながら、間もなく山井の家まで送り
届け、お絹には今夜の事を固く口止めし後日の事まで云ひ合せて何處と
もなく立ち去つた。

變り果てた母の姿

九市ほどの極悪人も人の性は善なるもので、悪にも強ければ善にも強
く、一度受けた恩には深く感じたものと見わ、恩人の娘お絹の身の上に

變り果てた母の姿

一一三



變り果てた母の姿

一一四

は心から同情をよせ、斯ふして無事に送り届けたが、すぐその足でやつて来たのは慾兵衛の宅であつた。

ところが肚も少々北山となつてゐて、何か食物はないかと厨棚の中を探すと思ひがけなくも酒肴の用意がしてあり、尙ほその傍には買つたばかりの一升徳利さねあつて、これはもつけの幸ひと、兩人互にたらふく詰め込み、

「さアこれで此家には用は無へ。今夜は一先づ他所へ身を潜め、打手に向つた郡代高阪松之進を明日の晩にも打ち取らなきや九市の云ひ分が立たねわや。三吉さア来い」

と云つて立ち上る九市の袖を三吉は引き止め、

「首領、一寸ばかり待つてお呉んなさい。郡代も郡代だが、事の起りは



西田の野郎が茂八とかを捕へたのがそもくで、殊に西田は彼の土地切つての大富限。怨も返したその上になつたあ大きな仕事も出来やうぢやありませんか、今夜はこのまゝ引き揚げて、明日の夜には西田の細首捻斬つて、しこまたポツポを暖めるは近頃の上分別、若し郡代へ斬り込んで、多くの奴等に斬り伏せられたその時にや、後悔立たぬのみならず場合によつちや笠の臺も六ヶ敷からうぢやありませんか？」

と分別顔に早や憶病風に襲はれての後退り、九市もきつと思案したが何を云つても三吉は取るにも足らぬ卑怯者、其奴を相手の仕事で仕損なひとは云ひ切れず、こゝは一先づ三吉の云ふ通り、敵の片割れ西田を襲ひ、家内残らず打ち殺し、思ふ存分金を奪り何處へなりと高飛びしやうと思ひかへ、

變り果てた母の姿

一一五



「ちや汝の云ふ様に爲やう。何は兎もあれ此處に長居は無用ぢや。それにしても慾兵衛してたま蓄めてゐるとの話ぢやが、行きがけの駄賃に持つて行け」

と云つてそこら中を探すと、凡そ四五十兩の金があつたので、

「無いよりかは優だ」

と云ひながら夜明け前に出て行つた。

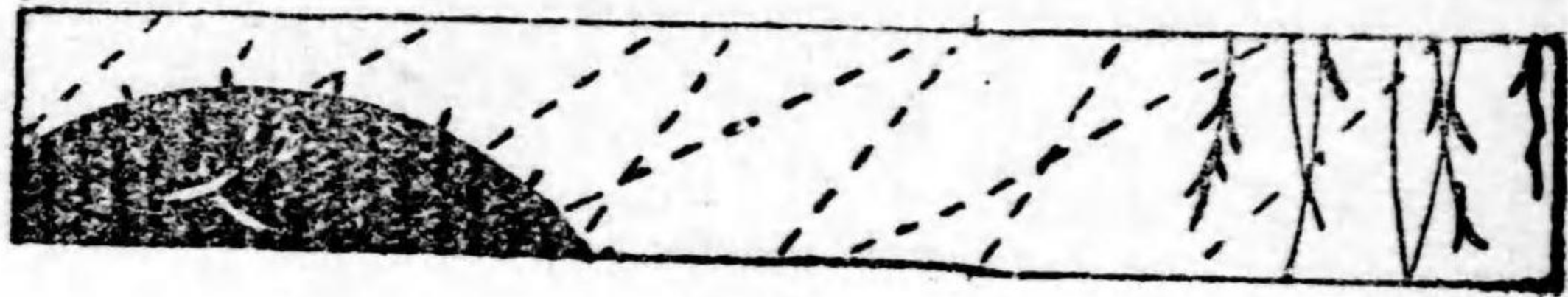
その翌晩は近來稀に見る大風で、時々みぞれまじりの雨さへ降つて、ヒュー／＼、ザア／＼と云ふ音がひつきりなしに起る物凄さは話の聲さへ聞ねぬ位で、飯田村の庄屋西田の家では早く戸閉りをして、今晚は皆宵寢と云ふことであつたが、夜も早や深更の三鼓と思はしき頃、豫て忍んでゐた盜賊荒戸の九市、麾下の三吉は、裏の物置き小屋から現はれ



出で、背戸の雨戸に手をかけて開けやうとするがなか／＼嚴重で開かない。氣短の九市は面倒なりとばかりに焦ら立つて、丁と拳を打ちつけるど、流石五十人力はあらそへぬもの、忽ち雨戸は破れてばら／＼になつてしまつた。

これが天氣の良い日だと大そうな音で家内の者も眼を醒すが、幸ひな事にはゴウ／＼たる風雨の音にさへぎられて、少しもそれと氣づかれない。九市と三吉は幸先よしとすぐ様中へ跳り込み、下女や下男は傍の柱へ有合ふ帯紐などで縛り上げ、聲を立てると殺すぞと威しつけ、そのまゝ奥へ進み入り、主人八郎兵衛の寢床を襲ふた。

「ヤイ、汝は當家の主人八郎兵衛か？ 俺は何時か汝の爲めに生捕られた小賊茂八の首領、荒戸の九市と云ふ強盜様だ、麾下の怨が晴したさに



今宵はわざ／＼御見舞申した、り斯なるからには汝等夫婦の生首は、後とも云はず今こゝで貰ふからそう思へ」
と云ひつゝ、ギリリと強刀抜き放ち、慄へる八郎兵衛の鼻先へニユツと差しつけた。

「お首領、暫くお待ち下さいませ、只今の御立腹は御道理千萬、私も虫なき事をしたものと、疾くより後悔いたし居りますが、さて爲てしまつた事は今更追つくものでもなく、濟ない事をしたものと、日夜心にかけて悔んで居ります。どうぞ御腹の立つ處は特にまげて命ばかりはお救い下さい。その代り、持ち合せました金銀衣類は云ふに及ばず、何なりともお持ち歸り下され、ひとへにお願申し上げます」
と、八郎兵衛は音に聞けた強盗に押し入れられたので又向ふどころの騒



でなく、三拜九拜低頭平身して頼み入るを、九市はさも心地よげにながめて冷笑ひ、

「アツハツハ、意久地の無い奴等ぢやなア。汝の指揮を受けずとも、金銀家財を奪るが目的、いや、此の家の物は皆俺の物だ、それを命の代りに差上げるとは何事だ。オイ／＼、代つた風な口を利くな。今は冥途へやつてやる」

と云つて再び刀を振り上げて斬り下さんとする、實に八郎兵衛の身は風前の燈火にも均しいものであつた。この時であつた、

「九市待てッ！」

どいと鋭き一聲と共に悠然と一人の尼僧がその場へ現はれた。

尼僧は早や五十にも近き年頃で、念珠を両手に爪繰りながら無言のま



變り果てた母の姿

ま九市の兩前へ不動の如くに突き立つを、九市は眼眸を定めて疾くと視ると、姿こそ代れどこれぞ自分の母親お浪に相違なかつた。ハット思つて何とか言葉をかけやうとしたが、流石に人の氣も憚つてかそのまゝ刀を鞘に收め、只太息をつくのみであつた。尼僧は落つる涙を振り拂ひ、「今更汝に言葉は交さぬ、只この上へは一夜でも難儀を救はれ、持病の癩を看護し下されし、此の家の御夫婦が身代りに、この身を殺して呉れるがいゝ、既に先年死んだ筈の妾、今更惜くもない命、さア早く殺して立ち去れよ」

と身を摺り寄せて泣き沈んだ。如何に情知らずの九市でも、是ればかりにはすつかり弱わらされてしまつた。現在自分の母親が、身は墨染の薄い衣に褰れ果て、昔に變る痛々しき姿を見せられては、どうして及が



向けられやう。極悪非道鬼の目にも眞珠の泪、

「八郎兵衛、汝等は助ける奴ぢや無へが、この尼さんに免じて赦してやらア、これからもよくあることだ、よく氣をつけて疊の上で往生した。俺等は二度來ないから………。三吉來い」

と云つて雨具を被るとそのまゝ後をも見ずに立ち去つてしまつた。八郎兵衛はたゞ茫然として夢に夢見る心地で、先づ傍に慄へてゐる女房と共に坐を正し、その場に泣き伏してゐる尼僧を劬つて上座へ直し、「有り難い幸福にございます。若し尼公がお出で下さらねば私共夫婦の生命はもとより、金銀家財残らず奪ひ取られるところでございました。さるにても尼公こそ眞の生菩薩でございます。さればこそ彼程名うての強賊が、只だ一言に屈してしまつたのでございます。どうか希ば結縁



變り果てた母の姿

の爲めに御素性を御明し下さいますせ』

と夫婦が共に手を合せ伏し拜みながら尋ねると、尼僧はやをら身を起して涙を拂ひ、

「素性など、申すほどの事もございませませんが、妾は元と賤しい者の娘で不幸にも年長けての尼生活、それと申しますも今逃げ去つた賊の爲めでございませす。お恥しきことながらお話し申すも身の懺悔、罪業消滅ともなりませうが、過ぎし此の身の不幸、因果は廻る小車の、悪い子持つた身の上話、どうぞ憐れな奴と思召し、程よう聞いて下さいませ。さるにても、先の夜御主人様に、街道筋でお救けに預りましたは何かの宿縁これと申すも佛の御引合でございませう』

と云つて自分が荒戸村の九平次に嫁ぎ、夫婦の仲に子供のないのを歎



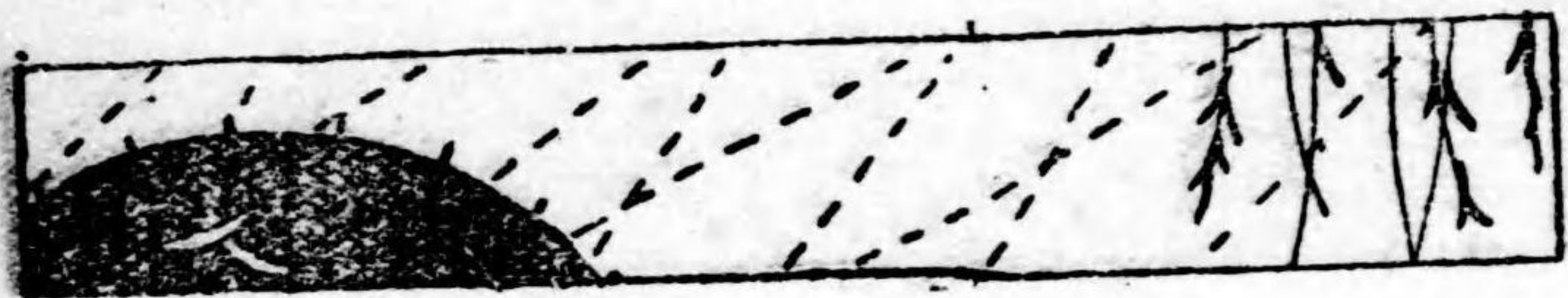
いて無養寺へ願込めした始めから、名も知らぬ怪しき若僧に身を汚され生れ落ちたが今の強賊九市の前身で、九市が幼時を残らず物語り、生れついでに放蕩は、親の意見も聞かばこそ、遂には我から我を折つて、一つには世間へ、又一つには九●の身持を治さうと、今から四年前九市が十五の十二月に、死なう覺悟で濱邊へ出たが、折りしも一人老僧現はれ先ア〜待てど引き止められど頼んでも死なして呉れず、それほどまでに思ふなら、今日の日から出家となり自分に従ひ諸國を修業し、靈山靈地を順拜してこの世の罪を亡ぼせと、説き諭されて熟々と、心に思ふには、若僧故にこの身の難儀、今老僧に身を助けらる、これも何かの因縁と諦めるより早や緑の黒髪剃り落し、名も妙真と改めて、九州四國は云ふに及ばず、中國筋から畿内東海の果てまで、其處此處の靈山靈地に

變り果てた母の姿



變り果てた母の姿

参拜する折り柄、頼みに思ふ老僧には去年の秋攝津の兵庫で遷化され、
 滿一年は墳墓の傍に型ばかりの庵を結び、念佛唱へて葬へど、今はどこ
 へも心任せ、勝手次第に行かれる身ぞと思ふにつけて肉身の、凡夫の心
 ぞ淺ましく、不圖我が子の事を思ひ出し、指折り數へば早や十九歳、そ
 の後の身持や如何あらんと、案じられるは輪回の絆、悟りの道に入りな
 がら心の曇り尙ほ晴れやらず、力を杖と道々を、乞食しながら故郷の土
 地を踏だのは二三日前のこと、これとはなしに様子を問へば、斯様の悪
 事を働き、遂には荒戸を逐電し、事もあらうに山賊の張本となりしと聞
 いた時、膽に針さす心地にて身も世もあらぬ心地ぞすれど、俗縁絶つて
 も親は親、聞かぬまでも今一度意見を加へて自首させやう、左もなくば
 及ばすながら刺違へて相果てやうと、彷徨歩けば空しくも、今宵はから



すこの始末、意見しやうも後白浪の逃げ根性、只悲しうござります。遺
 憾でござりますと、怨みつらみの永物語り後は涙に掻き暮れしが、再び
 氣を取り直して言葉をついだ。

「妾は悪人とは同腹ではござりませんが、今晚此處で出逢ふた上は、御
 主人は疑が無いでもござりますまい。殊に九市の母親に一夜の宿でも
 貸したとあつては後日のお答めもござりませう。何卒妾に繩打つてお訴
 へなされて下さりませ」

と云つて背後に兩手を合せたが、八郎兵衛とても眞の人間、どうして
 左様の事の出来るものではなく、

「尼公、どうぞお氣を慥かに持つて、暫くの間御静まり下さいませ。例
 へ尼公がああ賊の、實の親御であつたとて、我等夫婦の爲めには命の親



變り果てた母の姿

一二六

どうして左様の事の出来ませう。お身の上を聞きましたも、こゝに居ります夫婦ばかり、今夜の事はこの儘にして、何卒か今日から私方に生涯氣安う御送り下さいませ。然うぢやないかのう女房！」

と云へば女房も言葉を合せ、夫婦がよつて勧めるに、妙真尼は涙を流して厚意を謝し、

「アノ若しや下部衆は縛られてはゐられますまいか、案じられてなりませぬ」

と云へば、八郎兵衛夫婦も始めてそれと心づき、納戸勝手を調べたが只だ縛られてゐるのみで一人の負傷者ともなく、その間に風も雨も止み、やがては平和な太陽の光りさへ拜める時となり、一同ホツト息ついて悦び合ふ笑ひ聲さへ聞えて來た。

海賊の襲來

四年昔も師走の夜に生き別れ、死んだとのみ思ひつめたる母親が、四年後今宵、しかも荒稼ぎの眞最中に出逢ふなど、は夢にも知らなかつた荒戸の九市、母のお浪に出逢つたばかりに、怨む仇敵が討たれぬのみか、鏢一文も取る事ならず、ほうくの態に逃げ出したが、その舉動に不審を抱いた三吉は、

「首領、一體どうしたんだね、私にやちつとも解せねわや」

と云つて問ひ詰めた。

「ノウウ三吉、母者が此處にゐるからは、何かにつけて都合がよくなわ、明日は早く出立して花の浪花へ出やうぞよ。それにしても今夜は随分無

海賊の襲來

一二七





駄骨を折つたのう。大きな仕事が出来ればかり雨風の吹く寒空に、まあ仕方がねねお母の爲めだ。しかし三吉、西田一軒が金持ちやねね、廣い世間の金は皆俺等の者ぢや、繁華な土地へ出りや、仕事は降るほどあるよ、高が田舎の小庄屋一軒見通したとて、命の繋げぬ事もあるまいよ』云はれて三吉も漸く昔を思ひ出してかそれと合點畏つて、

「首領の云ふ通り、私の聞く通り、たしかに金は天下の持ち廻り、一人持つに決つたものぢやねね、善は急げと云ひますよ、これからすぐに出かけませう」

とそこは賊だけに諦めもよくて氣前もよく、それから間もなく小森と云ふ處へ來かゝつたが、夜は森々と更けてゐて、聞ゆるものとは犬の遠吠ばかりであつた。



今更宿を取るにも都合が悪く、詮方なきまゝ、兩人は尙ほも足を進めて宮崎に向ひ、翌日には港へ出て浦の景氣を眺めてゐる折りしも

「兵庫行。兵庫行」

云ふ聲が聞え、二人は何の船が兵庫へ行くのか、きよろしくして見廻すところへ、一人の船頭が來て

「お客さん達は何方へ行かつしやる。若し兵庫行きなら乗つてお呉んなさい。私の船は伊勢丸ぢや」

と云つて勧めるので、九市等は渡り船と、

「私等は大阪へ行く者だが、兵庫行ならもつけの幸ひ、便船頼むよ。三吉乗らうぢやないか」

こゝに二人は端艇に乗つて本船へ移つたが、伊勢丸は六百石積のかな

り大船で、中には早や十人ばかりの乗合と米や雑荷が一杯に積まれ、持主の小兵衛は今船を出す支度の真最中であつた。天氣は日本晴、風は追風と来てゐるから、帆を揚げると船は油の上をすべるやうに沖へ向つて走り出した。

九市は他の乗合客の中に混つて四方八面の浮世話を聞いてゐると、背の方から袖を引くものがあつて、密つと振り向くといちらし氣な小娘が兩手を突いて丁寧な辭儀をした。九市はさも不審氣に娘の顔を見ると、これを疑ふ方なき真全の娘で、一昨日の晩難儀を救けてやつたお絹であるから、流石の九市もこれはとばかり打驚き、

「お絹さんか、どうしてこの船に乗つた？」

と問ふたが、お絹は九市の身分をよく知つてゐるので、何と答へれば



九市の迷惑になるまいかと、答ふべき言葉を考へてゐるを横合から相當年輩の親父が飛びだし、

「私はお絹の伯父で死んだ真全の弟でござりまして總兵衛と申します。貴方様はやはり國のお方で……。へ、へ、へ、私も此の度は實に不思議な知らせを受けまして、遙々京都からお絹の身を引取りにまゐりましたところが、まあ驚いた事には兄はあの始末で嘸ぞ無念な事でもござりませう。それにつけてもお絹が強うお世話様でございましたらうに、ツイ出立を急ぎまして碌々御挨拶もいたしませんとんだ失禮をいたしました」

と云つてこれも譯わからぬながら丁寧に辭儀をした。九市もそれに應じて挨拶を交はし、





海賊の襲来

「私は他村の者でございますが、眞全先生とは豫てよりのお知合で、大病を患つた時にも先生の御蔭で生命拾をいたしましたやうな譯で、とてもお返しの出來ないほど御恩を受けました」

とうまく云ひくるめて後は他の話にうつしてしまつた。

兎角する中に船は豊前の小倉近くへ來たが、時は十一月二十何日から宵暗である上に、星合さへも曇り勝でなんとなく氣の進みかねる物憂氣な夜であつた。乗合客の話聲も今は途絶わてあちらこちらでコクリ／＼と行つてゐる折りしも、墨を流したやうな海原の中から何者か、四五艘の小船を伊勢丸に漕ぎつけ、何の會釋もなく手に手に獲物を引つ提げて乗り込んで來た。

乗客は「やれ海賊」とばかり一時に騒ぎ立るを賊は制し、一段聲を暴

らげて、

「コリヤ／＼者共、命が惜くば我々仕事の妨げするな、事によつては容

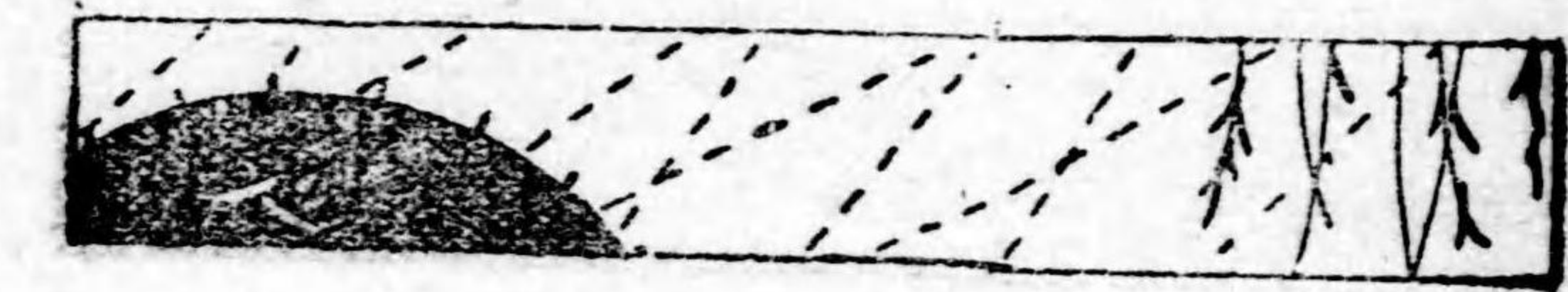
赦はせぬぞ」

と威して置いて船頭の小兵衛を縛り上げ、米や荷物は片つ端から小船へ運んだが誰れ一人として手向ひせぬのみならず、何れも平伏て神や佛を一心に祈つてゐたが、九市と三吉に流石悪黨だけに海賊の仕事振りにちつと氣をつけ、如何に手馴れた働きに、感じ入つたものゝ如くであつた。

海賊等は充分仕事をすると各々が船權を押し切つて、裕々遠くへ漕ぎ去つた。ところが賊の小船の中から幽かな女の悲鳴が聞けるを九市は不審に思ひ、ちつと耳を澄せてゐると、例の總兵衛が船舷へ出て、

海賊の襲来





「オーイ、オーイ、その船返せよ、戻せよー」

と喚き立てるに九市は始めて気づいて驚き、儲ては小賊の奴お絹を奪つて行つたなア、折角一昨日助けた娘だ、知らねば兎も角、かうして知つたからには捨て置けぬ。かう思ふと忽ち衣類をその場へ脱ぎ捨て、覺わの一刀口に啣へるや、ザブーンと氷のやうに冷ね切つた海の中へ飛び込み、腕に覺わの水練で、またたく間に三町餘りも泳ぎ切ると、後れて漕ぎ行く小船に取りついて跳り込み、

「お絹は居らぬか、お絹、お絹」

と呼ぶ聲に海賊共は始めて気づいて仰天し、

「ヤイ、汝は一體何者だ、天から降つたか地から湧いたか、この船を何だと心得くさる」

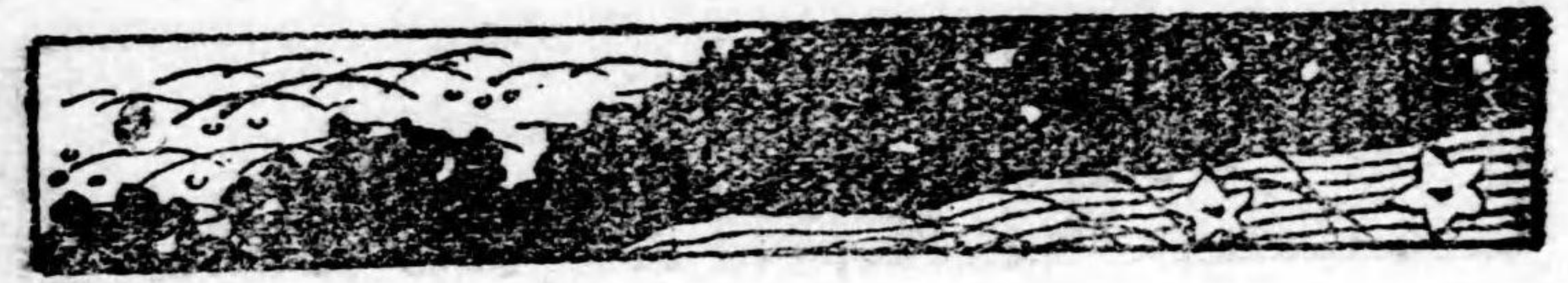
と云ふには耳をもかさず、

「コリヤ小賊、先刻汝が奪つて逃げた娘は何處だ、四の五と吐すより早く娘をこれへ出せ。ことによつては命がねわざ」

「アツハツハ、、娘を尋ねる汝は先刻の船の野郎か、由ないことにてまで命を捨てに来る夏の蚊蜻蛉め。早くくたばつて観念しろ」

と云ふより早く右と左から九市目菟けて斬つてかゝつた。九市は別段刀を抜くでもなく、近寄る小賊の襟髪つかむと見るやまるで小石でも投げけるやうな案梅で、ドブン／＼と片ツ端から海の中へ投げ込む勢に小賊はすつかりおそれてしまひ。

「手向はいたしません。何卒命ばかりはお助け下さい。これこの通り……」





と云つて手を合せて拜んでゐる様子に九市はブカツトふき出し、
「意氣地の無に奴等ぢや、だが先刻の娘は何處へやつた、それとも前の
船か、正直に吐せばよいが吐さぬ時にや是れだぞ」

と云つて九市は刀の柄に手をかけると、海賊共は口を揃へて娘を乗せ
てゐるは一番前の船で他は荷物ばかりだと云ふので、

「居なけりやそれで詮方がねね、探すに及ばんその代り汝等の棲家へ案
内しろ。それに就いちや俺の名を聞かしてやらう。俺はな、今長崎近邊
で荒戸の九市と呼ばれた強盗で、ちつたあその名を知られた男だ。夫故
先刻伊勢丸に居つた時、同じ渡世の輩と思ひ、見て見ぬ振りをしてゐた
のだ、ところが縁故ある家の娘を奪られたからには如何に同じ稼業でも
どうにもそれは捨て置けぬ、よつてこゝまで追つかけたのさア」



と委細を話すと、海賊は頗る愕然と、

「さては肥前で名高い九市親分でございますか、然様の事とは夢にも
知らずとんだ御無禮仕りました。ところで親分を棲家へ御案内申し上
げるに於いて、私共にも少々御願の筋がありやすが、お聞き届け下さい
ますまいか」

「何？ 頼み！ 事によつては聞かぬでもないが、一體どんな事だ言つ
て見ろ」

云はれて、中の重立つた奴はおづ／＼と進み出で、

「私は海鼠の金三と申し、我々一統の親分は毛剃武右衛門と申しますが
それが至つて氣短の向腹立て、その懲し方の厳しい事はとても話にも
ならないんで、若し仲間の規則に犯く時には、忽ち首を刎ねられて外の



海賊の襲來

者等の見試にする事になつて居ります。因つて親分を案内して隠家へお
伴れ申したら我々の笠の臺の飛ぶは必定、そこをお察し下されて、棲家
の近くで通して戴きてねのでございます」

と折り入つての頼みに、九市は一寸思案したが、

「アツハ、、、どこまでも意氣地のねね奴等ぢやのう。それについて
汝等五人に俺から改め相談がある、よく耳の穴深へて聞けばよし、四の
五のと吐すからには武右衛門とやらの手を待たず、この九市様がスツバ
リと殺つてやるぞよ。俺の口からかう云ふのもおかしいが、實は俺も陸
を食ひつめて、詮方なしに大阪へ行く途中だが、今夜かうして汝に會つ
たは天の配合、陸を離れた海賊を見るにつけても羨しいよ。世を偲ぶ
身にや島住居が一番だ。どうだらう。俺はこれから棲家へ乗込んで、武



右衛門とやらのソツ首刎ね落し、賊下の奴等は救けてやるが、又向ふ奴
は皆殺し、後は俺が首領となつて、世を面白可笑う、太く短く送らうと
思ふがどうぢや、汝等今から俺の乾兒にならねわか」

思ひ設けぬ談合に、五人の小は胸ツとして驚いたが、今となつては
いやとも云へず、云ふたところで笠の臺とのかへ事で許されそうな等も
なく據なく承知をすると、九市は大層満足して、

「よく承知して呉れた。これから俺がよくしてやるよ」

と悦び勇んで櫓を急がせ、その中にも種々の計略を廻してゐたが、早
や小船は島の隠家へ着けられた。この時九市は先刻なぐり殺した小賊の
衣物を剝いで着込み、素知ぬ振して上陸し、五人の奴等と一緒に棲家へ
行つて様子を窺つてゐるとも知らず早く歸つた小賊等は、首領と共に酒



盛して各自の手柄話に花を咲かせてゐた。

「首領、大そう遅くなりやした」

と云つて海鼠の金三等五人は武右衛門の前へ出て挨拶をすると、

「汝等は何故かうも遅かつたのだ。何か途中で事でもあつたか？」

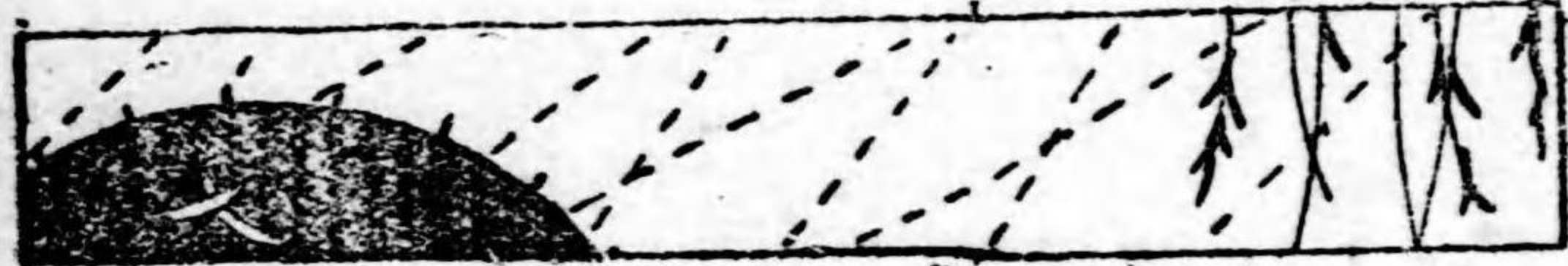
と云つておろりと一同を見ながら、

「汝等五人で他の奴等はどうした？」

と不審氣に聞くを海鼠は待つてたと云はぬばかりに、

「外の奴等はまだ濱で荷を揚げて居りやすが、餘り遅くなつたので私共は兎も角お答へして置いて又行く積なんで……」

「ウム、そりや御苦勞だ、だが行くには及ばんよ。ヤイ、稼ぎに出なかつた奴は皆行つて手傳つてやれ」



と命令けると、三十人ばかりの小賊はバラ／＼と蜘蛛の子を散らしたやうに駆け出したが、これは九市が海鼠の金三に教へた計略の一つであつた。

奇怪な父子の邂逅

九市の策略は美事圖に當り、何の譯もなく三十人ばかりの小賊を棲家から遠ざけてしまひ、首領武右衛門の顔も充分に見て知つたから機りこそ好ど、突然酒宴の席へどつと踏み込んで、毛剃武右衛門を確たと睨みつけ、

「オイ首領、俺は伊勢丸に便船した旅の者だが、汝の麾下に荷物を奪られ、まだその上大切の小娘までも盗まれた残念さに、わざ／＼後を慕つ



て来たものだ、サア疾く荷物と娘をこれへ持ち出し、這跪つて詫して返へせばよいが、左もなき時は覺悟があるぞ」

と云つて大見得を切ると、武右衛門はカラ／＼と笑つて、

「小癩な小二才、此の毛剃を誰れだと思ふ。大膽不敵身の程知らぬうち虫奴、ソレ討ち取つてしまへ！」

と下知したのみならず、武右衛門自身が覺悟の一刀を手に取つて立ち上がらんとする處を、九市は透さず飛び込んで、抜く手も見せず只だ一刀の下に斬りつけ、武右衛門も素早く刀を抜いて受けやうとはしたが、この時既に遅かつたのみならず、九市の方が二段も三段も腕が達者なところへ年も若いから血氣の勇から云つてもとてかなふものでなく、受け損じた太刀先きは右の肩先深く四五寸も斬り下げられ、紅に染つて握



つとその場へ打ち倒れたが、この時の勢はまるで猛虎を群羊の中へ放つたやうなもので、誰れ一人として九市に手向ふとする者もなかつた。

九市は素早く武右衛門の上へ乗し蒐つて馬乗りとなり、大音聲を揚げ「毛剃武右衛門儘かに聞け、死出の土産に我が名を聞かせてやらう。汝も豫て聞き及ぼう、長崎荒戸の九市と云ふ強賊は斯く云ふ俺の事だ。同じ渡世の汝をば、怨も無ねのにむざ／＼殺すは不憫な事と思つたが、俺が望む海賊の首領となつてゐたのが汝の不運、可愛想とは思ふたが、閻魔の廳へ疾く行つて娑婆で犯した處刑を受けろ！」

と云つて今にも止めを刺さうとするど、流石の小賊も首領の最期を知つては捨置く事ならず、八方から十人ばかり一時に九市目蒐て斬つてかゝつた。しかし九市は眞影流免許皆傳の腕達者、その上五十人力の怪

力は何條小賊の十人や二十人屁のカツバ、見る間に六七人をその場へ斬つて捨て、尙ほ阿修羅王の如く縦横無盡に斬りまくした。

かゝる折りから武右衛門はさも苦し氣なる聲を絞り、

「九市待て！、皆刀を引けッ！」

と云つて、手で制しながら、

「九市暫く待て！ 汝に言つて聞かせる事がある。刀を引け。……………」

麾下の奴等も残らずこれへ出る、聞かせる事がある」

と云ふから九市は何事かと不審に思つたが刀を置くと、武右衛門は太息を吐いて、

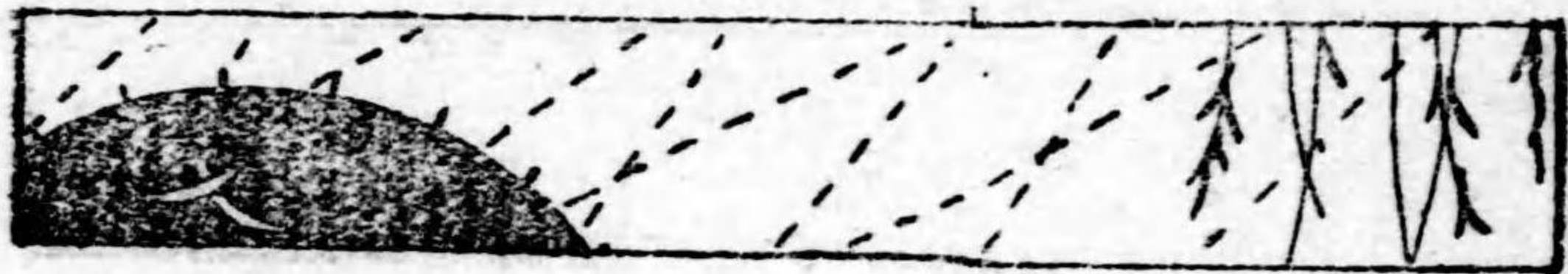
「九市よよく聞け、汝は俺の子だぞ。汝は眞の男の親を知るまいが、現在汝の父親は、此の様に、倅の、刃にかゝつて死なねばならぬ。これも



廻る因果の緒還と、その緒を語つて聞かさう。此の武右衛門も始めからの悪黨ではない。元はさる大名に仕へた立派な藩士、主君や親の名は云ひかねるばかり用のないもの、俺は幼い時に両親に別れ、十五の時から藩へ仕へたが、兎角堅くるしい奉公は身に添はず、色と酒とに身を持ち崩すその中に、藩は綺麗に永のお暇、今更これと云ふ生活の道も立ち兼ねるまゝ、斬取強盗は武士の習と勝手な道理、自分で許して賊の仲間に入りにしたが、捕吏の目もうるさいまゝ、姿を變へて諸々方々、重なる悪事を働く中に、いつしか髪を剃り落し、假の坊主は名も毛剃武右衛門と改め、流れ流れて長崎附近を徘徊してゐる折りしも、汝の故郷の荒戸村に程近き山寺に一夜の宿を求めんと、時しも十月末つがた、日も入合に近き頃、奥の院の傍、大銀杏の蔭に差しかゝる折りしも、田舎に

稀れな女に出遭ひ……

と過ぐる年無養寺の奥の院でお浪に出合ひ、心なくもそれを弄んだ事から、その時は何處の女とも知らなかつたが、一年程の後に、又もやその女に荒戸村で出遭つたが、女は少しも武右衛門の事を知らぬらしかつた。さうしてとある家へ這入つたからその近くの婆さんにそれとなく聞いて始めて九平次の女房と分り、女房はすぐる日玉のやうな男を生み落したが、これと云ふのも無養寺の大銀杏の靈現だと、土地では強い評判と聞かされ、さてはあの婦人は正しき夫の子種がなく、淫事の胤を宿し、神の申し子と思つてゐるかど、始めて汝が俺の子である事と氣づいたが、その後俺は海賊渡世、追々麾下も多くなり、此の孤島の主と爲つて仕度放題、榮華の極を盡すについて、思ひ出すのは汝の事ばかり



一度は荒戸へ人をやつたが、汝はごうも身持が悪く、遂には母さへ見限つて行方知れずに無つてから、汝の悪事は益々募る一方、つい昨日までの事柄は一切残らずこの俺の耳にも入り目にもついた。俺は疾から汝を呼んで、名乗つて具に暮さうと、思ひつめたも空たのみ、我れと我が子の手にかゝるも前世の約束事、悪事の報と諦めたよ。さアこれで云ひ置く事はねわ、早く俺れの苦痛を去つて呉れ』

どいと永い物語の後、九市の手を取り止めを刺させやうとするから、九市も追が親子情に後悔したが、今となつて詮方もなく、泪を呑んで武右衛門の首をコロリと斬つて落した。

斯くて海鼠の金三に命じて死骸を形付け座敷を清めさせ、その上改め乾兒残らず呼び集めて、



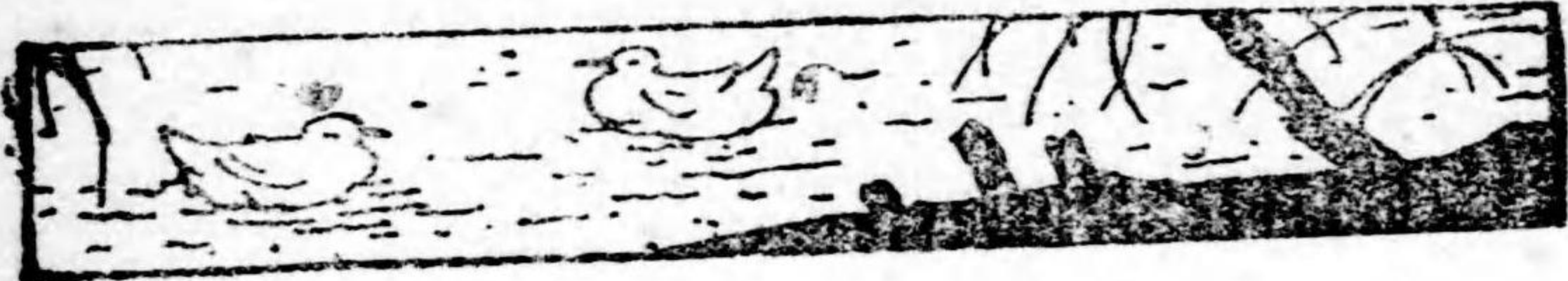
「皆の者、今日から俺が島の主だ。不服があれば遠慮なく云へ、又向ふ者あらば又向へ、それとも濡順く従ふかどうかどうぢや返答しろ」

と威歴的に云ふと、海坊主の仙太、土佐の荒三、豚の丈五郎など重立つた奴を始め、五十人近き麾下は一様に頭を下げ、

「首領の御子息と云ひ、肥前で名高い荒戸の親分を、我等の首領に何の不足がありません。それにつけても先刻又向ひましたる無禮の段、平にお赦し下さりませ」

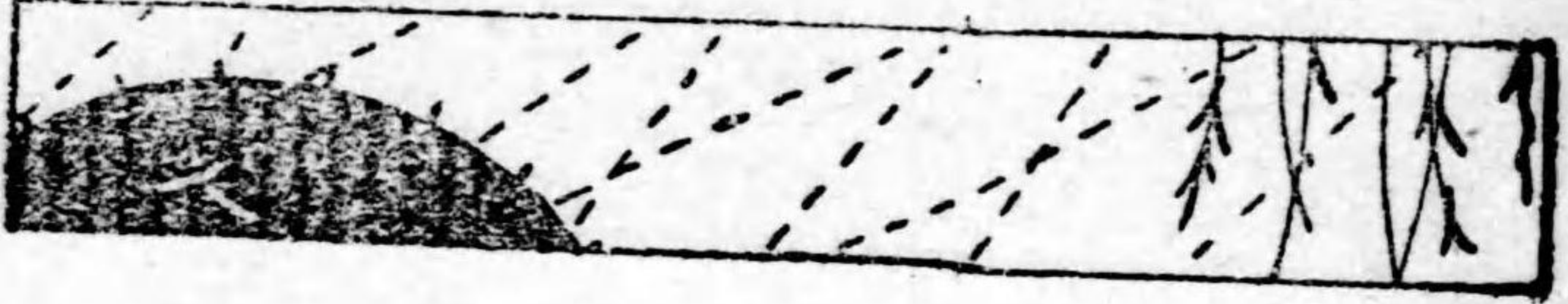
と平蜘蛛の如くに這ひ跪ばつて詫をした。

九市もこれでやつと安心と云ふ態で、名も毛剃九右衛門と改め、酒肴の用意をさせると主従固めの盃事に夜の明けるまで大盛宴を張つたがその最中、自分がかうした事になる始めの目的であつたお絹の事も氣にか



かり、海鼠の金三に命令て押し込められた一室の中より連れ出させ、縄目を解いて丁寧に取り扱ひ、悪人の娘だと云つて御馳走を進めるなど殊の外大切にし、その翌日九市自身が小頭を従れて密つと送り出す事にしたが、これだけは流石悪人でも感心な事であつた。

お絹は九市に送られて島を出たが、途中伯父に出逢へば結構だが、若し出逢へぬやうなその時には、再び村へ歸りなど、又は京都へ尋ねて上りなせへよと、路用として二十兩を貰つてゐたので、兎に角便船を求めて京都へ上る覺悟を定め、豊前の小倉まで陸地續きに來た時、はからずも伯父の總兵衛に出逢ひ、この方は先づ無事に京都へ上る事が出来、例の赤間の三吉もその後重なる失策に一時は命さへも危く思はれたが、これも再び九市に出逢ひ、改め小頭として海賊稼ぎをしたがこれは後段の



奇怪な父子の邂逅

一五〇

事で、この三吉が失敗によつて、九市は大阪無宿の強盗今鬼若の傳次と云ふ乾兒を得るが、この傳次は九右衛門隨一の片腕となつて働いた男である。

と云ふのは例の三吉が乗つてゐた伊勢丸は海賊に出遭つたその翌日一先づ小倉の港へ船を着け、その趣を濱奉行へ訴へ、乗合一同にはそこで上陸して貰ひ、小兵衛はそのまゝ平戸へ歸る事になり、従つて赤間の三吉もお絹の伯父總兵衛も船頭の氣を吸んでこゝろよく上陸し、港の宿に十日餘りも滞在して九市やお絹の歸りを今かくと首を鶴のやうに永くして待つてゐるある日、三吉は例の酒癖が出て、とある小料理屋で強か呑んだが懐中なくして拂ひが出来ないのみならず、果は酒代の云ひがかりに亂暴狼籍の振舞するより、事には馴れた料理屋の亭主もかつとな



つて後日の戒めにと訴へて出たからたまらない。可哀想に三吉は捕はれの身となつたが、その時懐中してゐた七首を怪まれ、揚句の果ては當時同じ牢に居つた今鬼の傳次と共に死刑の重罪を科せらる事になつた。この事を乾兒の口から風の便りに聞き込んだ九右衛門は、
「實に惜しい人物だ。三吉は取るに足らない男だが、それでも舊は俺の乾兒、それに今鬼若の傳次と云つちやア聞いたことのあるやうにも思ひ、何となく頼母しい奴だ、此奴を何とかして救ける工風はないものか」
と麾下に謀ると、豚の丈五郎と云ふのが膝を進め、
「首領、私が考へますに、兩人の死刑も近いと聞いてゐますから、それまでに我々は小倉の城下へ忍び入り、當日が來れば見物人にまぎれて刑場へまゐり、斯様々々の手段で救ひ出しては如何なもので？」

奇怪な父子の邂逅

一五一



と云ふを聞いた九右衛門はボンと膝を打つて悦び、
「俺もそう思つてゐたのだが、そんなら汝に頼んだぞ」

その日は前祝の酒宴をして、散りくばらく人に目立ぬ風にして
乾兒の一行五十餘人小倉の城下へ忍び入つた間もなき後の事でもつた。
時しも寶曆十二年、二月中旬の六日の朝、小倉の城下外れ馬捨場と云
ふ處で、大阪無宿の強盗今鬼若の傳次、西海の海賊毛剃九右衛門の乾兒
赤間の三吉兩名がこゝに處刑せられ、首級を獄門にかけられる事になつ
たが、馬場は四町四面の竹行馬、警固の役人獄卒總勢三十餘人が兩人の
前後左右をおつ取り巻き、下役人より型の如き罪の次第を兩人に申し聞
け、背後に立つた太刀取りが、今や二人の首を打つて落さんとする間一
髪、行馬の外より起る銃聲二發、ズドーンと響く暇もあらばこそ、狙は



遠はず太刀取りの急所を見事に打ち貫き、挫どその場へ倒れる折りしも
十人ばかりの曲者、屈強の身に軽やかなる打扮、群る見物押し分け掻し
分け、見る間に行馬の一方を破り役人目蒐けて斬つて入つた。

「ソレ曲者！ 片ツ端から召捕へッ！」

役人は目を見はつて獄卒共に下知する折りしも、又もや別の方向より
十人ばかり、これに續いて海坊主の仙太、海鼠の金三等の率ゐる一黨も
二手に分れて斬つて入り縦横無盡に薙ぎ立るからたまらない。流石の役
人等も防ぎかねてゐる隙に、傳次三吉の繩を解き小力のある小一が背負
ふと後白浪と一散に逃げ出し、他の面々も東西南北に逃げ廻る見物の中
にまぎれて早くも濱邊へ逃げて行き、この事を早くも知つた小倉城では
森口小太夫が乗馬で組子を急がせ現場へ應援に出かけた時は早や既に後

の祭りであつた。

海賊の大親分



斯様な事から今鬼若の傳次は九右衛門のために危きところを救けられ厚く禮を述べた上改めて乾兒になる事になつたが、九右衛門は三吉に向つて他勢丸で別れてから後の事を物語り、覺束ない野郎だが古馴染と云ふので傳次と共に小頭役にして豚の丈五郎、海坊主の仙太、海鼠の金三等も同席をさせ、他の賊下等も呼び集めて主従兄弟分固めの酒宴を開いた。

この時九右衛門は傳次が今日までに顔を賣るやうになつた。昔話を聞かせて云つて、傳次も残らず話したが、如何にも太つ腹で糞度胸の強い

事には流石の九右衛門も舌を捲いて驚き、好い賊下を得たものと深くそれを悦んでゐた。

それより五六日は何事も過ぎたが、或る日九右衛門は三吉に向つて、『三吉、汝に一つ頼みての事があるが、今度は失敗ねいでやつて呉れ。

實は汝も知つてゐやう母の事を、俺はいつもそれが氣にかゝつてならねわのだ。如何して暮してゐる事やら……。汝これから飯田村まで行つて、それとなく様子を見て来て呉んな』

と賊下ではあるが、餘の事と違ふので折り入つて九右衛門が頼むと、三吉は一も二もなく引き受けたが、何を云つても西田八郎兵衛には顔を知られてゐて都合が悪るいところから、誰れか一人附添をと云ふことになつて、誰れがよからふと人選をしてゐると、傳次が進み出て是非この





仕事をしたいと云ひ出し、結局は傳次に決つた。

九右衛門も悦んで早速充分の路銀を渡して二人を旅立たした。兩人は舟路を急いで博多の港へ着き、こゝから道を肥前の長崎にとり、程近き飯田村の庄屋西田八郎兵衛の家へ着いたのは可なり日數を重ねた時であつた。

こゝで傳次は三吉一人を宿へ残して、自分は大阪者と云ふ振れ込みで單身西田の家へ出掛け、うまく西田の主人八郎兵衛を欺いて事にかゝりそれとなく妙真尼の事を聞くと、何でも九右衛門の九市が強盗に這入つた翌日とかに、妙真尼は我が子の九市とか云ふ者の行く末を苦にして、裏手の松の樹に細紐をかけ縊れて死んでしまつたと云ふことであつた。その夜は西田八郎兵衛の好意によつて一泊し、その翌日厚く禮を述べ



て西田を立去り、三吉が待つてゐやうと花咲村の宿屋へ取つて返したが三吉は昨日の夕方ひよつこり出たきり雀で未だに歸つて來ないとの話に何處へ行つたものかと申くは待つたが、待てど暮せど梨のつぶてで何の音沙汰もなく、遂には斯ふして待つてゐるよりはと、宿の拂を濟ませ若し連れの男が來れば、捜しに出たから歸るまで待つやうに云つて呉れと云ふ言傳を残して、これと云ふ目當もなきまゝぶいと足にまかせて歩き出した。ところが一人の盲目が頭巾目深に高足駄を穿き、コツリ／＼と杖をたよりに傳次の傍をすれ違つた。

「ウム、占者だ。一つ見さしてやらう」

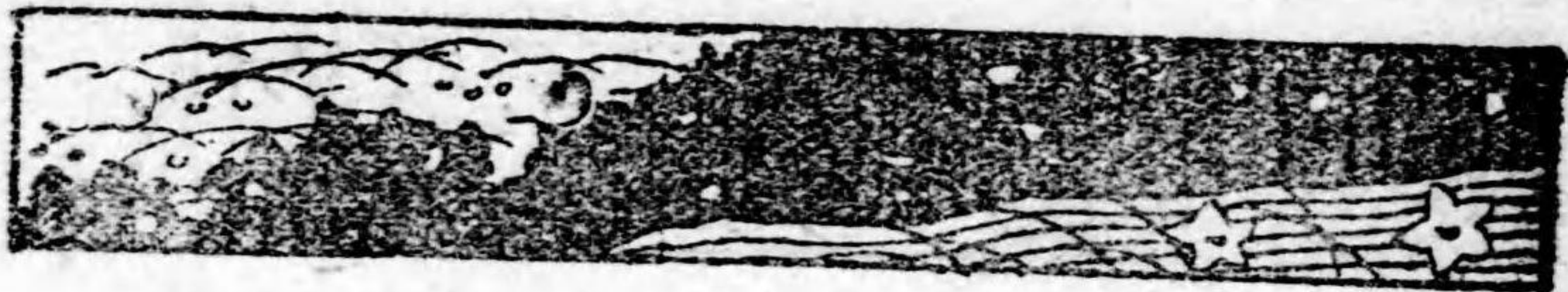
かう心に一人うなづいて盲目を呼び止め、すぐ傍にある茶店の床几に腰を下ろすと、如才内儀か茶店の婆が、傳次の身形に早や茶代の勘定を

胸にかき、

「お客様そこは端近でございませう。まあ、座敷で御休息……」
 と座敷へ通し、澁茶を吸んでのもてなしも、今の傳次には何の用も味もなく、盲人に向つて三吉の行方を占つて貰つてゐる折りしも、表の方より十人計の男連れ、手に手に十手捕縄振り翳し、ドットばかりに踏み込んで、

「御誼、御誼！」と呼びかけた。

落ち人の身は茫の穂すれの音にも恐れるとか、疵持つ足の今鬼若傳次スワ我が身の上よとキツト身構へたがさにあらず、今の今まで盲人のみ思ひつめたる彼の占者、カツと兩眼開くよりも尙ほ早く、隠し持つたる七首の鞘抜拂つて逆手に持ち、寄らば斬らんと立派な身構へ、されど



捕吏は少しも憶せず、傳次には更に目もかけず、膺盲目の左右をおツ取り巻き、前後から搦め取らふとしたが、流石世間を偽る盲目だけに、いづかな捕吏も寄りつけず只だがやくと言ふばかりであつた。それを眺めた傳次はホット一安心、されど脛に疵もつ氣味の悪さにそつと裏から飛び出して、田圃傳に二里餘りの道なき野路をひた走りに走つて逃げたが、もとより家のありそうな筈もなく鬼を欺く強氣の傳次もこればかりには手も足も出ず、困り果てたるその折り柄、風に靡く草の葉影も四五町先に、とある小さい火影を見つけて力づき、尙ほ道なき處を歩きながら火を目的とする草屋へ着き、戸を叩かうとすれば家の中には四五人の男の聲、如何なる話と耳傾け居るとも知らぬ家内の男、

「實にあぶないところだつた、今も云ふ通り、既んでの事に捕はれる處



を、それでもやう／＼斬り抜けたが、俺はもう賈盲目ぢや通らねわ、それにして俺をどうして賊と知つたらう……」

「アハ、ハ、ハ、そこが汝のどぢだよ、ところがこの俺れの働を聞け、昨晚連れて歸つた彼の酔倒れ、多くの金はあるまいと思つたに、生の小判の七十兩、思つたよりは大金の近來稀な大仕事だ、しかし汝の今の始末では此處へ足のつくは知れた事、こりや明日にも巢を返へなくちやなるめへせ」

酒呑みながら各々が世間かまはぬ高話、これを聞いたる鬼若傳次はすぐ同類の奴とは思つたが、話詞の端々に、七十兩の金を懐中にした男と云ふが、若しや三吉ではあるまいかと、豫て首領に止められてゐる禁酒を破つて寝入つた處を、此奴等に謀られて金を奪られたその上に、殺さ



れたのではあるまいかと、それでは首領にこの俺が、何と斷りしてよからう、事の次第は判らねど、仔細糺したその上で、若しやそれだと分つたら、奴等を残らず殺らしてしまひ、三吉の仇敵を取つたその上で首領に云ひ譯しやうぞと、大膽にも刀の鯉口寛げて、板の表戸ブリツと蹴破り酒呑む中へヌツクと飛び込み、中の奴等をハツタと睨んで、

「ヤイ鼠賊共、俺の云ふことたしかに聞け、我は大阪無宿の鬼若傳次と云ふ者だが、今外で様子を聞けば、旅の男を欺いて七十兩を奪めたこの事、夫は赤間の三吉と云つて、俺の友達だ、定めて酒に酔つばらつた處を殺してしまつたに違へねわ。サア友達の仇だ觀念しろ」

と云ふより早く大刀ギラリと引き抜きたゞ一討にと斬つてかゝつた。「鬼若暫く待て！ 皆の者手向ひするな」



と一間の障子をサツと開いて出て来る男、傳次はさも不審氣に見守つたが、

「オ、野狐か？ 汝は何時此處へ來た。久し振ぢやねわか、時に野狐昨日七十兩持つた旅人を欺して金を奪つたと云ふが、ありや俺の友達で赤間の三吉と云ふ男だよ、もう汝等の手で殺つてしまつたか如何だい、早くそれを聞かせて呉れろ」

と云つて迫るを野狐源五郎は軽く笑つて、

「さうかい。それは知らなかつて悪い事をした、まア勘辨しろ、一旦は俺等秘薬の痺薬で殺したが、まだまる一日にやならねわかから解き薬を服さうよ。まア實否を糺して見ろ」

と云つたが、この野狐源五郎と云ふのは傳次が大阪にゐた頃兄弟のや



うにしてゐた者で、傳次には常から一目も二目も置いてゐた男であつた。

斯くて傳次は源五郎の云ふがまゝに裏手の物置小屋へ行つて見ると、そこに倒れてゐるのは紛ひもなく赤間の三吉であつた。から大そう驚き三吉に違ひないことを云ふと野狐も共に驚いてすぐ解き薬を服せ、一刻ほどの後には全く人心地づき、傳次の顔を見て面目なげに起き上らうとする途端、夥しく濁つた水を吐いて氣持がすうとしたらしく顔を上げて、

「大哥、どうか勘辨して呉んね。私の不始末は嘸かし腹も立たうが、以來はきつと慎むから今日の處は首領にも内々でどうか勘辨して呉んね。ところで、どうしてこんな處へ來たんだらう不審でならねわ……」



と云つてあたりをキヨロ〜と見廻してゐると、源五郎はまあ〜と二人をもとの坐敷へ連れて来て傳次を上坐に直し、その後の挨拶をして改め傳次を一同にも紹介せ挨拶をさせたが、例の鷹目は阿波の生れで死神の大助と名乗り、三吉を欺して連れ歸つたのは向見すの權太と云ふ者で御次もそこ〜に挨拶し、三吉を一同に改め紹介し、有り合ふ肴で酒を汲み交しながら、種々話合つた終、傳次は皆を九右衛門に隨身するやうに進めると、源五郎も大助も權太も俱に喜んで、是非毛剃の首領に推薦呉れと頼み、すぐその夜傳次、三吉、源五郎等の一行六人は榎家へ火を放つと幽かな星明りを頼依りに豫て知つた近道を急いで博多の港へ出で、待たせて置いた小船に乗つて隠島へ引き上げた。

傳次は早速首領九右衛門の前へ出て、飯田村で聞いた妙眞尼が非業の

最期を氣の毒氣に告げると、流石大悪人の九右衛門も悲歎の涙に暮れしはしは言葉もなかつたが、その代りに野狐源五郎、死神大助、向見すの權太など、云ふ屈強の賊下を得た事を心から悦び、今肥後の太守細川侯の用金三萬兩が大阪表から本國へ船で廻送せられてゐる噂があつて、それを道で奪ひ取る計企をしてゐる事を傳次等に話し、是非力を盡して呉れと改めて頼み込んだのであつた。

一代の大仕事

人間一代に名を成さんとすれば、それが善かれ悪かれ並一通りの事ではどうてい及びもつかない事である。

ところが善は積めば積むほどに名を成し家も榮むるが、悪は積めば積



むほど名を成すと共に身を亡すの因ともなる。九右衛門は斯様に段々悪
を積んで身を亡すの端緒を作つたが、その最後の大仕事は海賊としては
實に華々しいものであつた。

時は寶曆十二年四月の上旬で、九右衛門は二十歳の春を迎へてまだ間
の無い頃であつた。

豫ねて探索に出して置いた小賊より、此の度肥後の太守細川侯の用金
三萬兩が本國へ廻はされると云ふ注進を受けた九右衛門は大きに悦びそ
れぐ準備をしてゐるところへ、豫て大なる望を囑してゐる傳次が歸つ
て呉れたのみならず、新に源五郎、大助、權太など、云ふ見るから頑強
で一騎當千の者を乾兒にしたので龍に翹、鬼に鐵棒と雀躍して喜び、用
船が赤間關へ差しかつたと云ふ注進を受けるや、さらば——とばかり



用意の賊船五艘に分乗し、勢込んで漕ぎ出した。

この時賊船の具へはと見ると、第一番船には死神大助と向見すの權太
が大將株となつて乗り込み、二番船には今鬼若傳次と、野狐源五郎が頑
張り、三番船は豚の丈五郎、海鼠の金三、四番船は海坊主の仙太、それ
に土佐の荒三が主將となり、殿の五番船は首領の毛剃九右衛門、小頭
格では赤間の三吉、博多の權次、藻屑の友平等十四五人、一二三四番船
は何れも屈強の荒男十人宛が小頭に従ひ、この總勢實に六十餘人の物々
しくも用船今や來れと待ち構へてゐた。

斯様の網が張られてゐやうなごゝは神ならぬ身に夢にも知らぬ細川家
の家臣、石塚兵左衛門、幾島助八の兩名は守護頭人となつて用船に乗り
込み、鏡の如き豊前の沖中へしづく差しかゝる折りしも、黑白も分





からの暗の海原より同船目蒐けて漕ぎ奇せて来た。

これをながめた石塚幾島の兩人はスワ海賊襲来と一時は大に驚いたが豫ねて期したる事でもあれば、少しも躁がず供人或は船人に下知して、弓鐵砲で拒いたが、船の真先に竹束を構へた賊船は飛道具を物ともせず早や一番船の死神大助、向見すの權太等が用船に飛び乗り、強刀打ち振り死物狂ひで斬つてかゝる折りしも、二番船の傳次、源五郎も飛び込み何れも海上の働としてはこれが始めの仕事ではあるが、その大膽不敵の魂は群の功を立てやうと物凄いばかりに猛り立つて勇を振つた。

一方用船の石塚兵左衛門は今年五十八歳の老人ではあるが、細川侯に選まれ用船守護の任に當る人物だけに、これに向つた傳次源五郎の豪勇も流石に齒が立ちかねて次第々々に追ひまぐられ、既に危く見ゆる折り



柄、三番船の豚の丈五郎、海鼠の金三等海の仕事には馴れ切つた小頭が早く船に飛び移つて傳次等の加勢をするから、流石細川家で劍道達人の譽高き石塚も少々受け太刀となつて来た。

四番船の海坊主の仙太、土佐の荒三は幾島助八に向つた大助、權太に力を添へ兩々相呼應して戦つてゐる隙に、首領の九右衛門は三吉、權次友平に下知して三萬兩の用金を我が船へ運ばせたが、この時石塚老人は僅な隙をはかつて、今しも千兩箱を運んで行かうとする藻屑の友平を真向から只一刀に斬つて落し、その他の小賊も四五人斬倒された勢に、首領の九右衛門は見るに見兼ねて立腹し、

「オノレ憎くき老老奴、この九右衛門が此の世の暇とらせて呉れん…」と云ふや抜く手も見せず、石塚の肩先袈裟斬りに斬りつけると、老功



の石塚も流石に堪わかねばと倒れる處を傳次は素早く首を打ち落した。
 一方幾島は三十代の血氣盛で随分腕達者の藩士ではあるが、土佐の荒
 三その他の小賊六七人を斬つたが、遂には死神大助の爲めに討たれてし
 まひ、今は早や手向ふ者とは一人もないから、海賊共は悠々と用金は
 素より米、薪までも奪ひ取り、仕合よしと孤島の隠家へ引き揚げ、それ
 から三四日は盛大な酒宴が續き、討死した土佐の荒三、藻屑の友平は惜
 しい事をしたと云はれただけであつたが、他の小頭を始め小賊等にはそ
 れく功を賞して過分の分前をやつたが、この時九右衛門が小頭等の順
 位を功勞によつて定めたがそれは次のやうなものであつた。

第一が鬼若傳次、第二が野狐源五郎、第三が死神大助、第四が豚の丈
 五郎、第五が向見すの權太、第六が海鼠の金三、第七が海坊主の仙太、



第八が赤間の三吉、第九が博多の權次で、斯う席順が改まるこ、それを
 小賊等にも知らせて又香直しを始めたが、この席順には誰一人として不
 足を唱へるものもなかつたが、それでも心の中では不公平な遣方だと思
 つた者があつた事は争へな事實である。

偕て斯うして三萬兩と云ふ大金をまんまと奪ひ取つた毛刺九右衛門は
 浮雲の歡樂を極めてゐたが、如何に大膽不敵の強賊も、悪事をやつた後
 は兎角安心のならないもので、或る日傳次を始め九人の小頭を一室に集
 めて相談を始めたが、

「皆も知つての通り、此島は人里放れた無人島の事で、人の知れやう筈
 も無へが、公儀の威光で穿鑿が行き届きやア、討手が來ないとも限らね
 ね、若しそうなるこつてもこの手勢ちや防ぎ切れない。依つてその用意



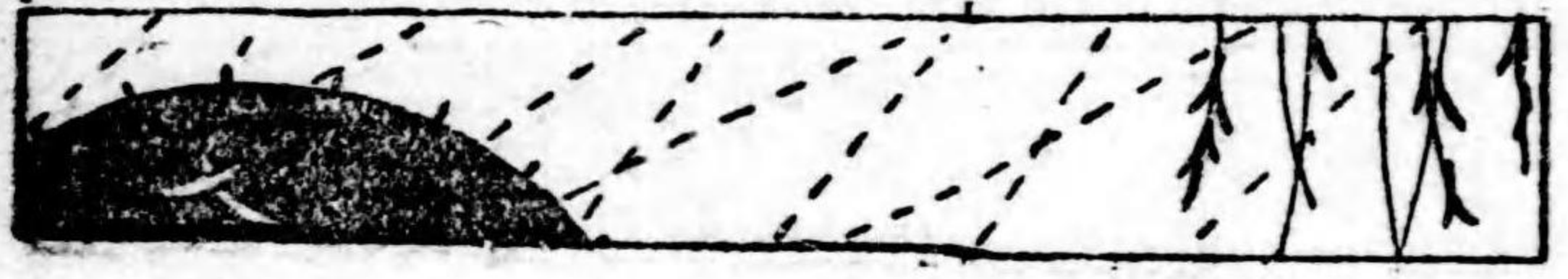
に堅固な大船を製らうと思ふが、誰れでもいゝ造船に精通い船大工の棟梁を推舉する者がないか？」

と云ふ突然の話を聞いて一同は一寸小首を傾げて見たが、やがて野狐源五郎が膝を進め、

「私に一人知つた男があります。盗賊はしませんが大の無頼者で名をうろこの丑と呼び、何でも以前は船大工の棟梁でありましたが、今は大阪の長町で貧乏な暮しをして居りますから、此奴をうまく欺して連れて来ませう。これと云ふ棟梁さあれば餘の手傳は何の苦もなく寄せられます。如何なもので？」

聞いた九右衛門は大に悦び、

「それは願つたり叶つたりだ、御苦勞だが汝これから大阪へ上つて迎へ



て来て呉んね、誰れかこれと云ふ小頭を一人連れてのう」

源五郎は早速九右衛門の命を受け、舊から腹心の死神大助を連れてその年の五月も餘程押し詰つた二十七日に大阪へ着き、大助を海へ待たして單身長町へ出掛けうろこの丑を尋ねると、今は病にやつれて臥床に入つてゐるが誰れも見えて呉れる者がないので、早や命旦夕の間に迫つてゐる有様に、源五郎は大に失望したがまだ老耄したと云ふ年輩でもなく醫藥の手當をせなかつた事が衰弱の原因となつてゐるらしいので、すぐ附近の醫者を呼んで治療を受けさせると、醫者もまんざら治らぬ病人でもないとの事に、充分金をつかまして治療に力を盡させて介抱人も附けその間源五郎と大助は程近い處へ宿を取つてひたすら本腹の日を待つてゐると、丑の命數は尙盡なかつたと見ね、日一日と薄紙を剥ぐやうによ



一代の大仕事

一七四

くなり、例の一條をそれとなく話していよく明朝大阪を出發しやうと云ふその前夜、源五郎と大助は大阪もこれで當分見納めと道頓堀の芝居小屋の前へ立つてゐると、

「オ、大哥！」

と聲をかけて背を叩く者があるに驚いて振り向くと、それは同じ小頭の赤間の三吉と海鼠の金三であつたが、臭い者同士で往來で、而も人足の多い道頓堀で立話も出來ず、その邊りの小料理屋へ上つて一盃やりながら小聲で、

「汝達や一體どうしてゐたんだ。四月の末に出て益過ぎてもまだ歸らずもう彼れ是れ九月だぜ。首領は大に心配して俺れと海鼠をよこしたのだでもまあい、塩梅に出遣つてよかつた。……大阪で土地は實に繁華な



もんぢなア……」

と云ふと野狐は、實はこれくと丑が病氣で寝てゐた一件を話し、明朝はいよく大阪を出發事になつてゐたから實にいゝ時に出遣つたと、歸りの遅れた譯を話し、その夜は各々の宿へ引き揚げたが、翌早朝待せて置いた船で一同は九州の孤島をさして大急ぎに急いだ。

斯くて歸着早々うろこの丑を棟梁として大船の建造に着したが、何を引つても大船を造るのであるから一寸やそつとの人数ではどうする事も出來ない。そこで乾兒の中でも最も小才の利く海鼠の金三を下の關へ出して小料理屋を開かせ、客の中でも大工職と見わる者は片ツ端から南蠻秘法の魔薬で五體を痺れさせ、人事不省になつて倒れた奴をこつそり島へ送り、これ等の者を大船の建造に従はしめた、ところがこの時はから

一代の大仕事

一七五



すも國藏と云ふ九右衛門股肱の小頭を得ることになるが、この國藏と云ふ奴は宅藏の弟分で、宅藏は例の伊勢丸の持主小兵衛が續く不運に今は細き煙りさねも立ちかねる悲運に陥つた時、僅か五兩の金を貸したを云ひがりに娘のお松を金にせんとしたが果たさず、揚句の果は竹庵と云ふよからの醫者と謀つて、小兵衛が頻死の病氣に臥してゐるを幸ひ、それを全快をさせるには極上々の人蔘に正真正銘の蜃珠を加へ、外に兩三味の薬を調合したものを服まさなくてはならぬが、それにはどう安く見積つても百五十兩はかかるが、平常親孝行で評判の娘の事であるから特に百兩で引き受ける。しかしそれもいやなら自分等は無理には進めぬが、若しこのまゝに置く時は後五日間の命が保ちかねるとはうもない事を吹き込むと、素より伶俐なお松ではあるが、まだ年の行かない娘の

事であるから、欺されるなどは夢にも知らず、悲し涙を瀧のやうに流しながら、

「豫て斯様の事もやと覺悟はいたし居りました。この上は此の身を浮川竹の流れへ沈めても金子の調達をして父の病氣を治したうございます。不束な妾ではございますが、若し薬の代になりますればどうぞお世話を下さいませ」

といやでも頼まねばならない運命に陥れたが尙ほ表面だけは押し止

め、
『和女の孝心はよく分つてゐる感心だ。けれども伊御はあの通りの堅造とてもこの相談は覺束なからう』

と云ふと、お松は暫く思案して、



「阿父さんを欺す罪は深ふございますが、身を浮川竹に沈めるとは云はず、妾奉公と云ひなして……………」

と云ふのを皆まで聞かぬに宅藏は、そんなら一つ話して見やうとうまい風な事を云つて、とうとうお松親娘を欺いて筑前博多の遊女町備中屋と云ふのへ三百兩で賣り飛ばし、小兵衛親子には只の一文も與へず皆宅藏、銀八、それに醫者の竹庵の三人で横領しやうとしたを、國藏はうまく謀つて三人を皆殺し、まんまと三百兩を横奪して九州へ下つた所を、海鼠の金三にはかられ前述の如く九右衛門の乾兒になる事になつたのである。

兩勇士の苦心



借て三萬兩の大金を海賊に奪はれたと云ふ注進を受けた細川家では直ちにこの事を太守に言上すると、太守は非常に驚かれ、金は兎もあれ、石塚、幾島兩人の忠臣を討たれるは返すくも殘念だ、如何したものであらうと、重臣方を御前に召して會議が開かれたが、この時御家老の長岡隼人が座を進め、

「近頃持つて捨て置き難き事にござりまする。さりながら彼の賊共を退治いたしまするには、先づその巢窟を探し出し出にさねばなりません。由つて某思ひまするに、石塚の長男彌太郎は當年二十五歳、又幾島の弟助七は廿九歳で、共に忠義無類の若者、殊に武術力量も人に優れて居りますれば、彼等兩人を遣はし、賊の巢窟を探らせては如何かと存じまする」

兩勇士の苦心



兩勇士の苦心

と言上するを太守越中守忠宗公は凝つと聽かれ、其の儀尤も然るべしと仰せられ、早速彌太郎助七の兩人は御前へ召され、

「此の度不慮の事にて其方等の父兄を失ひ、嘸かし秋傷の至りであらう予に於ても忠臣を失ひ残念至極に存する、由つて其方等兩名を探偵として、海邊又は孤島を穿鑿いたさせ、賊窟を知りたる上にて、此の度の仇を報はうと思ふ、然ればその方兩人は互に我意を挟まず、協力同心致し、速に海賊の在家を注進いたせ、萬事は隼人に承り、彼れについて旅行の準備いたし早々出發いたせ」

と云ひ渡された兩人はハツとそれへ平伏し

「仁君の厚き御情、有難く存じ奉ります。公私を兼ねたる今度の探索草を分け藻屑を潜りましても、必ず海賊の所在を捜し出しますまでござ



いまする……」

とお答へして御前を下り、萬端は老臣長岡隼人の言ひに従ひ、堅固な船には水練の達者な水手に乗せ、又下人をも隨へてそれ／＼別れを告げると肥後の港を出帆し探索に向つた。

兩方に別れて海賊の捜査に向つた石塚彌太郎、幾島助七の兩人は、九州の島々は隅なく探して廻つたが一向これぞと思はれる手索もなく途方に暮れて、その年の夏長門の中の關と云ふ所へ落合ひ、こゝで兩人は相談を纏めて、それより三十日後を限つて赤間が關を集會所とし、幾島は海中を、石塚は陸地をそれ／＼に手分して發つたが、石塚は二人の僕を連れて中の關から周防の地へ踏みこみ其處此處を徘徊してゐるある夕の事。天神山の邊七坂越の下道を通つてゐると、森の中から十八ばかりの

兩勇士の苦心



山賊共が手に手に獲物を提げて顯れ出で、

「ヤイ、旅の三ピン、汝等命は惜くはないか、惜しけりや金はもとより身ぐるみ脱で興して行け、それとも、命もついでに興して行くか？」

と云ひながら前後左右に立塞つたが石塚彌太郎は少しも噪がすカラカラと打ち笑ひ、

「其方共は我々を尋常の旅武士と思ふか、無禮をする、容赦はせぬぞ、先づその素首の用心致せ」

と罵り返へすと山賊は非常に立腹して、

「何を小癩な瘦浪人、その儀ならば不憫ながら冥途の引導授けてやらう」

と云つて大刀引抜き斬つて蒐るを石塚は、

「物々しくも身の程知らぬ小賊共」

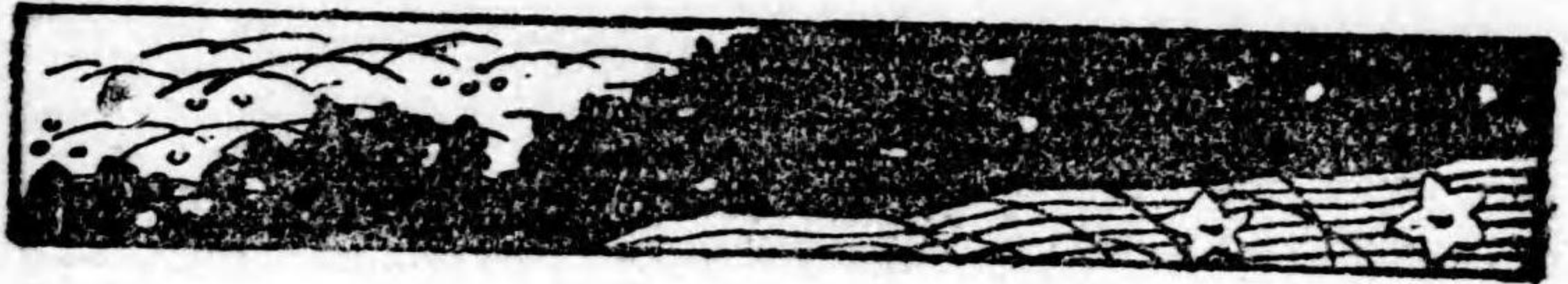
とこれも腰の一刀抜く手も見せず、然で獅子奮迅の勇を起して斬り立ると、二人の共人も主に遅れず抜き連れて賊に向つたからたまらない。

賊は一たまりもなく斬り伏せられて早や逃げ出さんとするを、さはさせじと追つ捕へ、中の頭立つたる一人に向ひ、

「貴様等は賊をするからには、近頃九州を荒す海賊の棲家も知つてゐやう。蛇の道は蛇だ、よも知らぬ事はあるまい。速に白状すればよしなもなき時は貴様一同の命がないぞ」

キツト脅しつけられた山賊はぶる／＼と慄ね出しながら傍を顧て、

「ヤイ佐市、手前はたしか海賊ごやらの麾下だつた筈だ、早くいつてしまへ、でなきや俺等の命があぶねや」





と云はれた佐市とか云ふ小賊はおそろしく進み出し、
「申し上げます。私は佐市と申しましてついの間まで毛剃九右衛門と申す海軍の麾下になつて居りましたが去る事情で去年の七月孤島を逃れ、只今ではかうした陸の稼ぎをして居ります。だが、私はちつとも悪い事は無んです。皆この首領が悪人で……」
と先きの奴を指差したが、これを聞いた石塚は内心雀躍して悦び、佐市に向つて、

「我は其の方に問ふ事があるから此方へ来い。他の奴等も今日の處は赦してやるが改心して眞人間になるかどうかや、否と云へばそれがこの世の名残だ！」

と云つて充分責めて置いて佐市を連れとある木影へ来ると、石塚は佐



市に毛剃九右衛門の事を委しく話させた。

「私が孤島を逃げ出したのは恰度一年前の七月で、當時毛剃の麾下に小頭を勤めてゐる豚の丈五郎と云ふ者があつて、此奴は九右衛門の先代である武右衛門の代からの小頭で首席でありました。處が去年の四月細川侯の用金三萬兩を奪つた時、各自の手柄によつて小頭の席順を改める事になりました。すると、新參の今鬼若傳次、野狐源五郎、死神大助など云ふ者が皆上み立ち、丈五郎はやつと四番目と云ふ惨さでありました。それは自分の働きが足らなかつたので詮方もありませんが、丈五郎はそれを深く残念に思ひ、と云つて不足の持つて行きどころのないのを癪にさへたものか、それからと云ふもの罪もない目下の者に辛く當つて打擲し、中には半死半生の目にさら會はされる事が度重なつてゐました。そ



の中私はある日過つて丈五郎が日頃最も大切にしている大盃を打毀し、只管それを詫びましたが却々聞き入れて呉れませす、百あまりも擲れたその揚句物置へ縛りつけられ五日間食物を與へず乾し上げにせよと云ふ強い命令が仲間の小賊に下り、小賊は私を物置へ連れて行つたが流石日頃強意にしてゐる仲でもありませんから縄目だけは内々で解いて只物置へ入られるだけにして呉れました。けれども食物は與へて呉れませすから私はどうく辛抱しかね、同じ死ぬるなら行ける處まで行つて死のう。かう覺悟するとすぐ島を逃げ出す決心で、夜に紛れ勝手知つた海岸から繋いであつた早や船に乗つて首尾よく逃げおほせましたが、手にこれと云ふ職もなきまゝ暫くは處々に流浪してどうく今の賊等の仲間に入る事になりました。又毛剃九右衛門の隠家は豊前の小倉より西北にあたる



立海灘を遙かに去つた名もない孤島で、人の通はぬ無人島であります』と生命惜しさにべらべらと喋つてしまふと、石塚は聞いて非常に悦び面を柔らげて、

「能く話して呉れた、其方今より心を改め我が差圖に従へば一命は許してやる。のみならず褒美の金も多分に得ささうぞ」

と云ふと、佐市は石塚を神の如く参拜九拜しながら、

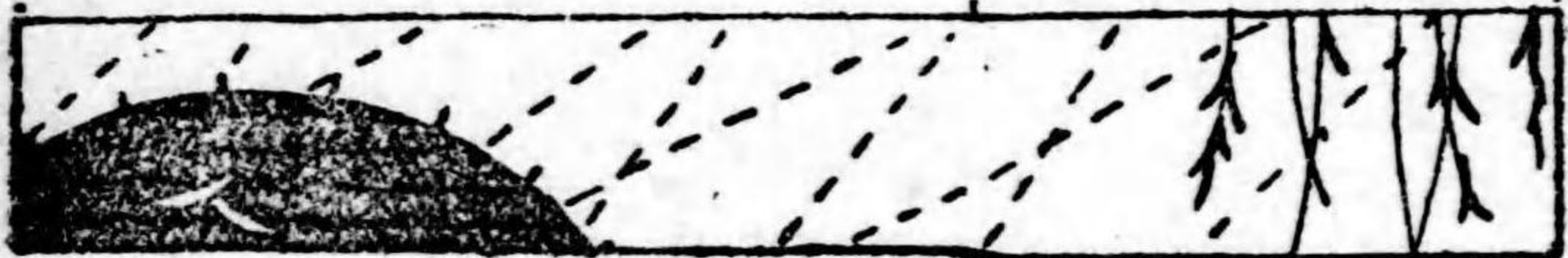
「私はもとより悪事は嫌なんですが、これをやらなくては喰つて行けねわのみで詮方なくやつてゐるやうな案配なんで、命さねお赦け下さいませれば何事も辭せず御命令に従ひます」

と云ふことになつて、石塚は幸にも海賊探偵の端緒を得る事が出来た。



斯くて間もなく石塚は二人の供と佐市を連れて長州へ乗り込み、幾島と約束した赤間ヶ關へ着いたが、この時はまだ二十八日目で豫定の三十日には餘裕もあるので、詮方なく旅宿に逗留して幾島助七の來るのを一刻千秋の思ひで待つてゐる折りしも、豫定の三十日目には幾島助七は水手七人と三人の供人を従へ、海路の探偵を終へ無事に歸つたが、その話は次のやうなものであつた。

幾島等は石塚と別れて海路の探偵に出かけると、はからずも肥前の沖合で難風に出遭ひ、すでに船も覆へらうとさへしたほどであつたが、漸くとある孤島へ吹きつけられ、その間に風も凧いで波も静まり一同もホツと安堵の胸をなでた。しかし、幾島はちつと氣を落ちつけて海岸の様子を見ると、これまで只だの一度も見事もない離れ小島である事に氣



づき、こゝが若しや賊の棲家ではあるまいかと、水手や供人等もそつと云ひ合め、先づ様子を探らうと支度を充分にして上陸する切りしも、向ふから漁師とも何ともつかぬ一人の男が現はれ幾島のそばに近寄ると、
「汝は何處の者だ？」

と大風な口を利くので幾島は小腰を屈め、

「私は熊本の者ですが、時日の難風に出遭つて船を吹きつけられ、上陸いたしましたのでございます」

と町寧に云ふと、怪しい男はいきなり呼び子の笛を吹き、それを聞きつけた島の賊共は八方から顯はれ詞もかけず、幾島に向つて斬りつけて來た。幾島もさる者、さてはと思ふより早く、腰の一刀抜き連れて斬り合、當るにまかせて薙ぎ立てたからたまらない。多くの小賊は蜘蛛の子